

糠漬けのゆで卵

1 犯人は糠漬けのゆで卵を輪切りにした人物【事件当日】

広さ二十畳ほどの、とある民家の洋室。
壁、絨毯、カーテン、すべてが濃紺に統一されたモダンな空間。観葉植物や絵画など、余計な装飾は何もない。

スペースは半々に分けられ、片方はリビング、もう片方は仕事部屋になっている。リビングには大型テレビと高級ソファ。ちいさなワインセラーと、高級酒がならぶサイドボード。仕事部屋には、両袖の大きなデスクに、パソコンの画面がふたつ。デスク脇の壁は一面、キャビネット式の大きな書庫になっていた。

その書庫の前に、スーツを着た男女が三人、なにやらこそこそ話をしている。険しい表情の若い女を、二人の中年男がなだめているという構図。

「いやです」

「まあ、そう言わずに」

「どうしてそうなるんですか、納得できません」

「仕方がないよ。お前さんがいちばん適任なんだから」

「さっき、車の中で言ったことと違います」

「俺が？ 何て言ったっけ？」

「新人だからって容赦はしない。徹底的にこき使ってやから覚悟しろ、と。……わたし、覚悟ならできてますけど」

若い女は挑むように、男たちを睨みつけた。

「悪かった。今回は辛抱してくれ、この通り」がっしりした体格の大男が、毛むくじやらの両手を合わせた。「だれかが相手をしてあげなきゃ、可哀想じゃないか」

「本当に、申し訳ありません」あばた面の白髪男が、ハンカチで汗をふきながら言った。

「まさか現場にやってくるなんて、思いもしなかったものですから」

彼らがチラチラと視線を向ける先には、一人の女がぼつんとソファにすわっていた。

小柄で、地味な服装の、年配の女。流行遅れの帽子を頭に寄せ、もじもじと所在なきげに、三人の密談が終わるのを待っている。

若い女が、白髪男につめよった。「あなた課長さんでしょう。人の配置は、あなたが決めるんじゃないんですか」

「でも、署長に頼まれちゃったんです。彼女を仲間に加えてやってくれって」

「だったらおたくのほうで、どなたか適当なお相手はいらっしゃらないんですか」

「それが、うちは少数精鋭でやっておりまして」

「あら、失礼しました。どうせわたしは精鋭じゃありません」

「こら、いい加減にしろ。課長さんになんて口をきくんだ」大男は苦い顔をして、「もつと前向きに考えなさい。いいじゃないか。せっかくだから、いろいろ教えてもらえよ、女同士、マンツーマンでさ」

「そうしてください。彼女はうちの最古参だそうです。経験だけなら誰にも負けないそうです」

「でも、内勤の方なんでしよう」

「以前は第一線で活躍していたそうです。ああ見えて、なかなか優秀だったそうです」

「そうです、そうですって、なんだかあの方のことを、よく知らないみたい」

「それが、よく知らないんです」白髪男は、あっさり認めた。「私は先月赴任したばかりなので」

三人はあらためて、年配の女に目を向けた。

日焼けした肌。丸い顔に小さな目。もしらぬ顔で天井を見上げ、こちらの口論に気づかぬふうを装っているが、そんなわけはない。原因が自分だということも、よほど鈍感でなければわかるはずだ。

それでもとぼけているのは、三人に気まずい思いをさせまいという心遣いらしい。

「いい人そうじゃないか」

「そういう問題じゃありません」

「まったく、ごちゃごちゃうるさい奴だな」とどうとう大男は怒り出して、「とにかくお前のほうで面倒を見てくれ。これは命令だ。わかったな」

と、最後は有無を言わさぬ口調で言った。

「……わかりました」

女は下唇をつきだした。

理解のある先輩のような顔をしていても、いざとなればこうだ。「君の親父さんには生前、世話になったんだ」。「俺がかならず一人前にしてやるからな」。あの台詞はいつたい何だったのか。

「水元さん、こちらにどうぞ」

白髪男が、年配の女に声をかけた。

水元と呼ばれた女は、ひどく恐縮しながら三人の前にやって来た。

「お待ちさせてすみませんでした」

「こちらこそ、いきなりおしかけちゃってごめんなさい。やっぱり迷惑だったかしら」

「とんでもない。ただ、びっくりしました、なにも聞いていなかったから」

「わたしから署長にお願ひしてみたの。今回は現場に出してちょうだいって。たぶん、もうこれが最後になるだろうし」

「主任の服部です」大男が体をかがめて挨拶をした。「現場は久しぶりですか」

「ええ。かれこれ四年ぶりかしら」

四年ぶり！ 若い女は叫びそうになる声をあやうく飲み込んだ。

「やっぱり現場は緊張感が違うわねえ。でも……」水元はあらためて周囲を見回した。室内には彼らの他に人影はなく、がらんとしていている。「もう全部すんじやったみたい。今ごろココノコ現れても、遅かったかしら」

「そんなことはありませんよ」白髪男が言った。「今ようやく鑑識が終わったところなので、我々の出番はこれからです。……ただ、ええと、水元さんにはいつまで捜査に加わっていただけるんでしたっけ」

「それが、あとひと月なの」

「ひと月ですか。短いんですね」

「本当に、月日の流れるのは、あつという間ねえ」

そういう意味で言ったのではなかったが、白髪男は調子を合わせた。

「うちの課も、寂しくなります」

「こればかりは、仕方ないわねえ。これまでは送り出す側だったけど、とうとう自分の番がきちゃった」

「ところで水元さん。こちらは本庁の高橋さんです。今回、水元さんは高橋さんといっしょに行動してください」

「こいつは一課の所属になって今回が初仕事なんです。ひとつ、厳しく指導してやってください」

主任が頭を下げると、水元は全力で両手を振って、

「そんな、めっそももない。私の方が足手まといにならないように気をつけなくちゃ」と、ひたすら畏れ入っている。

「ほら、高橋。お前もご挨拶しなさい」

「どうも」

にこりともせず、ひよいと頭だけ下げた。子供じゃあるまいし、と自分でも思うのだが、はりきって臨んだデビュー戦でいきなりベンチを外された恨みは、そう簡単には解けない。

「それじゃあ、と……」大男はしらじらしく腕時計に目をやって、「そういうことで水元さん、あとはよろしく頼みます。高橋君、事件について、水元さんに説明してさしあげなさい」

「説明してさしあげたあとは、何をしたらいいんですか」

「説明してさしあげたあとは、水元さんの指示に従いなさい」

口早に言い残し、大男と白髪男は逃げるように部屋を去って行った。

「すごい人だからねえ」

カーテンの隙間から外をのぞきながら、水元が呑気な声をあげた。

玄関の前ではいま、主任と課長がマスコミに対応している。

ここは郊外に建つ、平屋のちいさな一軒家である。まわりは畑も多いのどかな田舎の風景だが、今日は数多くのマスコミがこの家の周囲に群がっている。上空にはヘリコプターまで飛んでいた。

「どうしてこんなに大騒ぎしているのかしら」

「殺されたのが、有名人だからでしょ」

「浅茅憲久さん、といったかしら。そんなに有名な人なの？」

高橋は目をまるくした。

「浅茅憲久を、知らないんですか」

「うーん、聞いたことがあるような気はするんですけど……」

嘘でしょう。世事に疎いにもほどがある。高橋は、開いた口がふさがらなかった。

浅茅憲久というのは、かつては仕手筋の投資家として、若年ながら巨額の資金で相場を荒らし回っていた男だ。風雲児などと呼ばれていた。人を食った厚顔と、強引で狡猾なやり口が、たびたび世間を騒がせた。インサイダー取引で逮捕起訴されて執行猶予。そのうち交際相手に暴行した廉で逮捕され、猶予が取り消されて二年服役した。

出所したのは半年前。以降、マスコミの取材は一切受けつけず、その動向については一部週刊誌でわずかに報じられたのみ。外の騒ぎは、いわばその反動というわけだ。

「出所してからはこの家を借りて、ひとり住んでいたとのこと。投資顧問の会社をたちあげたものの、そちらへはあまり顔を出さないで、もっぱらここで仕事をしていたと、お姉さんがおっしゃっていました」

「お姉さんがいるの？」

「恒子さんという方で、死体の第一発見者です。この近くに住んでいて、家政婦代わりに毎日ここに通っていたらしいです。いつものようにお昼すぎにやって来て、死体を発見したのだとか」

「まあ、お気の毒に」

浅茅憲久は頭を殴られ、昏倒したところを絞殺されていた。家の中は荒らされた様子はなく、恒子のみたところでは盗まれた物もないという。

「死体はキッチンに倒れていました。もう運んでしまいました。現場をごらんになりますか」

高橋は先にたつてキッチンへ案内した。水元は、ひよこひよこことあとに続いた。

「ごめんなさいねえ」

「なにがですか？」

「こんなおばあちゃんの相手をさせちゃって。さぞかし張り切っていたでしょうに」
水元は申し訳なきように言った。やはり、こちらの声は聞こえていたのだ。

「……そんなことありませんよ」

高橋はムスツとへの字にむすんだ口を、やむなく緩めた。

よく見ると、水元は右足をひきずっている。

「足がお悪いんですか」

「古傷なのよ。気にしないで」

「仕事でお怪我を？」

「痛くはないんだけど、こんな歩き方になっちゃうの。ごめんなさいね」

キッチンには狭いながらも、清潔で、よく片付いていた。昔ながらのステンレスの流し台と、冷蔵庫、食器棚。壁際には小さな足長のテーブルと、椅子が二脚ある。食事はここでとっていたらしい。

流しの下に、白テープで人の形が縁取られていた。頭の位置に長い血だまり、流し台のへりには血の手形。頭を殴られ、出血した傷口を手でおさえたあと、流し台をつかんで体を支えようとしたが、そのまま床に倒れてしまった。と、いうことらしい。

「指紋が一致していますので、この手形はまちがいはなく被害者のものです。犯行現場は、このキッチンと断定してよいと思います」

「床の血痕が長く伸びているのは何故？」

「五十センチくらい、浅茅の体をひきずったようです。倒れた位置が流し台に近すぎて、首を絞めにくかったんじゃないでしょうか」

テーブルの上には、二人分の食事が支度されていた。トースト、コーヒー、オレンジジュース、ベーコン、レタスとキュウリだけの簡単なサラダ、スライスされたゆで卵。献立からみて朝食らしいが、どちらも手のつけられた形跡は無い。

「死亡推定時刻は、今朝の五時から九時ということです。来客があり、二人分の朝食をつくったものの、食べる前に殺されてしまったのでしょう」

「そのお客さんが犯人なのね」

「そうともかぎりません。被害者といたところを犯人に襲われ、連れ去られてしまったのかも。あるいはいっしょに殺されて、死体を運び出されてしまったという可能性もあります」高橋は、主任や課長に聞かせるはずだった持論を開陳した。「いっしょに朝食をとるということは、その客は前夜からこの家に宿泊していたとも考えられるわけですが、この家には客を泊めるための部屋はありません。あるいは親密な関係にある女性かもしれませんが、ということ、で、寝室のくずかごや、トイレ、浴室などを調べましたが、女性が宿泊したと思われる痕跡は発見できませんでした」

「そ、そう……」

「もちろん、それらの痕跡をきれいに消去していったという可能性もあるわけですが、それならテーブルのうへの食事をそのままにしていくはずはありませんから、やはり、訪問客は宿泊したのではなく、今朝になってここを訪れたと考えていいと思います」

「そうなの。よくわかりました」

水元はたじたとになった。しかし高橋は、さらにまくし立てる。

「恒子さんの話では、昨日は洗濯と掃除を終えて、夕方四時に自宅へ帰ったそうです。すくなくともその時点では来客はなかったし、これから客があるということも、被害者は言っていないかったということです。被害者は普段から、自宅に人を呼ぶことを嫌っていたのか。ただ十日ほど前にいちど、女性を夕食に招待したことがあったといえます」

「まあ。恋人かしら」

「そこまでは恒子さんも知らないそうです。ただ当日は被害者も、機嫌よく料理の支度をしていたとか」

「被害者が、自分で？」

「料理が趣味だったようです。恒子さんは洗濯と掃除専門で、食事の支度は朝昼晩、被害者が自分でやっていたそうです。……見てください、これを」

高橋は、流しの下の棚を開いた。中には大小さまざまな鍋や、いろいろな形の包丁、何に使うかも定かでない電気式の調理器具が整然と並んでいる。

「あら素敵」

目を輝かせた水元は床に膝をつくと、戸棚の中に頭をつっこんで、ひとつひとつ品定めをはじめた。

高橋はつづいて冷蔵庫を開けた。中には色とりどりの食材がひしめいている。続いて食器棚の戸を開けると、こちらも高価な食器がならんでいたが、数は意外にすくなかった。皿、カップ、ナイフやフォーク、いずれもかろうじて二人分あるのみ。これも来客に備えてというよりは、時々恒子といっしょに食事をするための分だったという。

「お友達がいなかったのかしらねえ」水元はとっかえひっかえ食器を手にとって、蚤の市で掘り出し物でもさがすようにながめている。「料理が趣味なら、知り合いを招いてご馳走してあげたくなると思うんだけど」

「そういう時は、仕込んだ食材を持って自分から出かけて行ってたそうですよ」

「見て見て、このコーヒーカップ。表面の彫刻が凝っていて素敵。でも、すこし小さすぎ

るみたい。濃いコーヒーを飲むときに使う物かしら」

「濃いコーヒー？」

「濃くって、苦くって、ちよっぴりしか淹れてくれないやつ」

「エスプレッソのことですか」

「そう、それ」

「違いますよ。これはエッグスタンドです。ゆで卵をここに立てて、スプーンで食べるんです。外国の貴族とかがやっているのを、映画なんかで見たことありませんか」

「だって、こっちのゆで卵はきれいに輪切りになってるわよ」

水元は、テーブルの皿に盛られたゆで卵を指して言った。

「おかしいですか？ エッグスタンドを持っているからと言って、ゆで卵を輪切りにしていけないという法はないと思いますが」

「それはそうだけど」

そんなことより、ゆで卵については高橋もひとつ、気になることがあった。

「このゆで卵、色がおかしくありませんか。白身も黄身も黒ずんでいるし」

「そうねえ」

水元は眉をひそめ、鼻をよせて卵の匂いを嗅いだ。

「これ、漬けてあるんじゃないかしら。うん、きつとそうよ」

水元は、流し台下の戸棚にもう一度もぐりこみ、調理器具の山をかき分けた。

「お鍋のあいだにひとつだけこんな物があったから、何だろうと思っただけど」

水元が取り出した物は、白い円筒形の物体だった。手にとってよく見ると、陶製の壺である。蓋をはずすと、とたんに独特な香りが鼻をついた。

「やっぱり。糠床だわ」

水元は袖をまくり、壺の中に腕をつっこんだ。唇を舐めながら中をかきまわし、やがてひきあげられた手には、卵がひとつ、つかまれている。

「へえ、ゆで卵を糠漬けにするんですか」

「若い人は知らないのね。糠は、何を漬けたっておいしくなるんだから」

水元は指先に着いた茶色いペーストをひと舐めし、合格とでもいうように満足げにうなずいて、高橋に壺をわたした。高橋はうえつと舌を出し、味見の方はご遠慮もうしあげて、わたされた壺を戸棚の中にもどす。

棚の前の床は、ひきずられた血だまりの出发点になっていた。それを踏まぬようガニ股にひらいてしゃがむと、ちょうどその角度から、冷蔵庫と床の隙間に、何かが落ちていたのが見えた。

手をのばして拾ってみると、それは一口サイズの菓子だった。アイスクリームをチョコレートでコーティングした物で、形状は立方体。ホコリも付いておらず、まだ新しい。

高橋は首をひねった。冷蔵庫の中には、チョコレートやアイスクリームなど、菓子のたぐいはひとつもなかった。リビングに酒瓶がならんでいたことから、被害者は辛党だったと思われる。

よもやこんな物が事件に関係しているとは思えないが、被害者の嗜好と合わない物が唐突にころがっているのだから、違和感はぬぐえない。

どうしよう。

高橋は水元に意見をもとめた。水元はぶるぶると頭を振った。見当もつかない、ということらしい。

「あとで主任さんにお見せしたら？」

高橋はがっかりした。一瞬、この発見で何か主任たちの鼻をあかしてやれるのではないかと期待したのだが、この先輩刑事には、そういう気概はないらしい。

続いて高橋は、水元を寢室へ案内した。

といっても、特筆すべき発見は何もない。目覚まし時計のアラーム設定は、七時半だった。恒子によると、通常は八時にセットしてあるという。被害者の生活は意外に規則正しかったということだ。刑務所の規律のある生活で体重が落ちたので、それを維持したいと考えていたらしい。

「お客さんが来るので三十分早起きしたということかしら。死亡推定時刻とも合うし」

「どうでしょう。アラームの設定なんて、いくらでも細工できますよ」

「朝食を一緒にとるなんて、よっぽど親しいお友達だったんでしょね」

「それもどうでしょうか。秘密の商談の相手だったかもしれません。水元さんは、浅茅会という名前を聞いたことがありますか？」

水元は首を振った。

馬鹿なことを訊いたと高橋は後悔した。そりゃそうでしょう。浅茅の名を知らなかった水元が、浅茅会を知っているはずがない。

「週刊誌で報じられている噂なんですけど、被害者は最近、秘密会員制のファンドを作って、旧知の資産家から資金を集めていたのだそうです。出所に設立した会社は、行儀のいいまっとうな表家業。それを隠れ蓑にして、本来の仕事を再開するために立ち上げたのが浅茅会なのではないかといわれています」

「本来の仕事って？」

「逮捕される前の、浅茅本来のやり口という意味です。法律無視の金儲け主義といますか、駆け引き、裏取引、ペテン、買収、脅迫、なんでもありです。そのための情報収集には金に糸目をつけなかったといえます。早朝の秘密の来客くらい、あっても不思議はありません」

「最近は、どんな仕事をしていたのかしら。調べてみましょう」

二人は仕事部屋にもどった。短い廊下を、高橋が先に立って歩く。足をひきずる水元は、すこし歩が遅い。

「痛そうですね。本当に大丈夫ですか」

「大丈夫よ。見た目ほどじゃないの」

「その怪我は仕事で？」

「そんなに痛そうに見えるかしら。きっと年のせいだわねえ」

仕事部屋にもどった二人は、まずはデスク周辺を調べた。

パソコンは、パスワードが設定されていてすぐには開かない。こちらはのちほど技術者を呼んで調べる運びになっている。

デスクの上には、今朝配達された新聞が置いてあった。高橋は引き出しをひらいた。そこには膨大な枚数の名刺が、美しいほど整然と管理されていた。

名刺は立てた状態で、四列にびっしり並べられている。名刺一枚一枚には受け取った日

付が書き込まれており、並びはその日付順になっていた。

一番手前にある名刺の日付は、いまから二十日前。名刺の主は、地元の保険会社の外交員。その次の名刺は一ヶ月前の日付で、こちらはガス器具販売員。いずれも「ご挨拶に伺ったのですが、お留守でしたので、日を改めて参ります」という内容の書き込みがある。さらにその次は二ヶ月前の日付で、地元の不動産会社の営業担当の名刺。もらった名刺はなんでもかんでも保管しておく、という主義だったらしい。

その次の名刺は、いつきに三年前までさかのぼる。この空白は、彼が事務所にした期間を意味している。ようするに、シャバに出てから受け取った名刺は、この三枚だけということだ。

「恒子さんいわく、出所後の被害者は、新しい人間関係を拒んでいたそうです」

「どうして？」

「資金も知識もないシロウトたちが、甘い汁を吸おうとすり寄ってくることにうんざりしていたとか。こんな郊外の寂しい場所に暮らしているのも、近所にお姉さんが住んでいるという他に、そういう人たちを避けるという目的もあったようです」

デスク横の壁を覆うキャビネットは、全部で五面あった。いずれも上半分が書架、下半分がタンボール箱の収納スペースとして使われている。書架の部分には、プラスチックのファイルケースがならんでいた。同じメーカー、同じ厚さ、同じ色の背表紙には、同じ大きさの文字で日付が書き込まれており、実に気持ちよく整理されていた。

一方、ダンボールの中身はじつに雑多で、分厚い書類、本、カタログ、記念品のような物、額に入った写真。別の箱には、アルバム、日本人形、猥褻な書籍。統一性はなく、なんでもかんでも詰め込んであるという感じだった。

書架のファイルはすべて、仕事関連の記録や資料だった。浅茅が株の売買をはじめたのは大学生の頃だというのが、日付から見ると、その頃からの関連資料がすべて保管してあるようだ。

水元はファイルを一冊手にとって、ばらばらとページをめくっている。個々のページはクリアフォルダになっていて、新聞雑誌の記事、印刷物、手書きのメモ、小冊子などがスクラップされている。こちらにも名刺同様、発生年月日ごとに綴じ込んであり、ページには日付を記したインデックスが貼ってある。ファイルの背表紙も、何年何月から何年何月という範囲が記されていた。

「仕事の種類で分類するんじゃないやなく、時系列なのね。どこに何をしまったか、あとでわからなくならないのかしら」

「でもこの方法なら、発生したものをどんどん最後尾に綴じ込んでいけばいいので、スペースは効率的に使えるんです。カテゴリで分類すると、どうしてもページに遊びが発生して、ファイルの冊数も多くなってしまうので」

「へえ。そういうことなの」

「さっき主任がそう言っていました」

一番新しいファイルの、一番新しいページを開いてみる。そこには大手百貨店に関する資料が綴じ込まれていた。昨今うわさされている業界再編に関する記事の切り抜き。歴代の役員名簿。彼らの個人情報やプライベート写真。はては、マル秘扱いの内部文書や議事録まである。

「こんな物、いったい、どうやって手に入れるのかしらねえ」

「ライバルやターゲットに関する情報は、手段を問わず、徹底的に調べ上げるんです。そのためには関係者の弱みを握ってスパイをさせたり、大金を積んで買収したりするのです。かつて仕手戦で連戦連勝を誇った所以だと言われています。これも主任の受け売りですけれど」

この膨大なファイルの山は、浅茅が逮捕された時は押収を免れていた。どこかに隠しておいたのだろうか。もしあの時、警察がこのファイルを見つけていたら、おそらく懲役二年ではすまなかつたはずだ。

さらにいえば、ここに眠っているのは、浅茅憲久の違法行為の証拠だけではない。彼の商売敵や、過去に標的にされた人物たちの、表沙汰にできない秘密がひしめいている。今後この資料の山の中から、まだ日の目を見ていない事件がいくつも発見され、捜査され、立件されることは、じゅうぶんであり得ることだった。警察にとっては、さしずめ宝の山といったところだ。

「それにしても、すごい量ねえ」

水元は放心したように口を開け、その宝の山をながめている。膨大な資料に感心しているのか、呆れかえっているのか、いつまでもその場を動こうとしない。

高橋は仕方なく彼女の横に並び、彼女のまねをして資料の山をにらみつけてみた。

そのうち、あることに気がついた。

ファイルはきれいに並んでいる。クリアフォルダーの各ページには黄色い紙が一枚ずつ挿入されていて、資料はその表裏に貼り付けてある。したがって、閉じたファイルの上部は、全体として黄色く見える。

ところが、あるファイルの一部分に、その黄色が抜け落ちている箇所があった。

黄色く見えないということは、中に挿入されている紙が抜かれているということ。つまり、そこに貼り付けられた資料も抜かれているということではないのか。

高橋はそのファイルを手に取り、ページをめくってみた。思った通り、日付順にぎっしり資料が綴じ込まれている中で、八ページほど空っぽのフォルダーが連続している。

インデックスの日付は、六年前であった。

直近の案件ならいざしらず、こんなに昔の資料の一部を、浅茅自身が抜き出して他へ移す理由があるだろうか。他のファイルをざっとながめたかぎりでは、ここ以外に抜き取られた黄紙はないように見える。やはり、この空白は不自然だ。

ここにはどのような資料が綴じ込まれていたのか。高橋は前後のページを調べてみた。この時期、浅茅は三つの案件を平行して手がけていたらしい。ひとつは老舗料亭のお家騒動。ひとつは金属プレス加工の特許関係。ひとつは台湾のリゾート開発関係。これら三件にまつわる資料の数々が、相前後して綴じ込まれている。

抜かれた八ページの中身も、このうちのどれかである可能性が高い、と考えていいだろう。

姉の恒子は盗難品はないと言っていたが、もちろん、この資料の山をすべて調べた上での証言ではない。かりにこの八ページ分の資料を抜き取ったのが犯人だとすれば、これこそが犯行の目的、すなわち殺しの動機ということになるのではないか。

高橋は胸をおどらせた。

無論こんなことは、いずれ誰かが気がついたに決まっている。しかし、運良くいちばん先に発見することができたのだから、このアドバンテージを活かして、あの薄情な主任の鼻をあかすことはできないものか。

しかし水元は、あたりまえという顔をして言った。

「主任さんに報告しましょう」

そうでしょうとも。このおばさん刑事の頭の中には、のけ者扱いきれた悔しさも、抜け駆けの功名という野心も、有終の美を飾るという欲も、なんにもないらしい。

やがて、会見を終えた主任と課長がもどってきた。高橋は、キッチンで発見した菓子と、消えたホームページ文の資料のことを報告した。

「ふーん。よく気が付いたね」

主任はいちおう手柄と認めてくれたが、その目は高橋でなく、水元にむけられていた。

水元は、高橋の陰に隠れ、体を縮めて下をむいている。その姿を主任は、先ほどとはすこし違った眼差しで観察していた。

やがて、ぽつりと言った。

「高橋さあ」

「はい」

「お前やつぱり、しばらく水元さんのやつかいになりなさい。うん、それがいい」
主任は水元の正面にまわりこむと、大きな体を折り曲げて、深々と頭を下げた。

「水元さん、うちの新人を、ひとつよろしく願います」

ぽかんとしている高橋をよそに、水元はおろおろと、倍の慇懃さで頭を下げ返している。しばらくして、他の捜査官たちがおおぜい戻ってきた。高橋と水元は、追いつてられる鶏のように、建物の外に放り出されてしまった。

風をつめたさに、高橋は肩をすぼめた。あれたけ賑やかだったマスコミも、もうひきあげている。野次馬たちも立ち去って、ひとつっこひとりのない郊外の夕暮れであった。

「あなた、素敵な靴を履いているのねえ。わたしの安物とは大違い」

高橋の仏頂面もおかまいなしに、水元がはしゃいだ声で言った。外の空気を吸って元気になったのか、妙に澆刺としているのがまた、面倒臭い。靴の善し悪しなど、わかりもしないくせに。

「転属祝いに奮発したハイヒールで、輸入物なんです。そんなことより、これからどうするんですか？」

「そうねえ。とにかく出かけましょう」

「どこへ？」

「歩きながら考えましょう。捜査は足でかせぐのよ」

水元ははじめて先輩らしいことを言い、先に立ってとことこ歩き出した。

高橋はしばらくその背中をながめていたが、やがてため息をついて後に続いた。

足の悪い水元に、高橋はすぐに追いついた。

「そのお怪我は、お仕事中に？」

「まず最初に、被害者の会社に行ってみましょうか。ちょっと時間が遅いけど、今からならまだ間に合うでしょう」

強烈な西日が、畑をつらぬく侘しい一本道を炙っている。目の前に長くのびた二つの影

が、チャップリン映画のラストシーンのように滑稽に見えた。高橋は泣きたくなくなった。

5 区駅を南口から降りたのは万象慈会を嫌う人々【二十八日前】

住宅地の街角。

気持ちのよい並木道が、学校の長い塀にそって、真っ直ぐのびている。石畳の広い歩道を前に、駄菓子屋を兼ねた小さなパン屋が一軒。赤いテント看板、店先にはビデオゲームが二台と、清涼飲料の自動販売機。年配の男がひとり、缶コーヒーを買っている。

反対側の歩道には、若い男が二人。ひとりは路上にしゃがみこみ、ポケットサイズの地図帳に見入っている。色白で童顔。まるまると太り、まだ学生のような幼さが抜けきらない。スーツも着慣れていない。

もうひとりは、ネクタイこそしているが遊び人風。冷たく整った顔立ち。暇さえあれば鏡にむかって、櫛をなでつけているタイプ。手には、老舗和菓子店の紙袋を下げていた。

学校の塀の前には、おおきな掲示板が立てかけてある。貼られているのは、近くおこなわれる市議会補欠選挙の候補者ポスター。

候補者は五人。うち、女性がひとり。握り拳をかざす五十代の女性の顔には、瞳、鼻孔、前歯に、画鋏が刺しこまれている。

痩せたほうの男が、その画鋏をひとつずつ抜いていく。心ないイタズラの後始末をしているのかと思いきや、抜いた画鋏をそのまま、隣のポスターの男の顔に刺していった。

「先輩、よしてください」太った男が言った。「小学生じゃあるまいし」

「うるせえな、お前は黙って地図を見てりゃいいんだよ」やせた男は、真剣そのものといった表情だった。「このジジイには、恨み骨髄なんだから」

「大袈裟だなあ」

「大袈裟じゃねえよ。知りもしないくせに。こいつが専務だった頃、俺たちがどんなにひどい目にあっただか」

「知ってますよ。耳にタコですよ。サービス残業に、サービス深夜残業に、サービス休日出勤ですよ」

「でしょ、なんて簡単に言うなよ。こいつは俺たちに、息子夫婦の引越しの手伝いまでやらせたんだぞ。それから、孫の送り迎えも。よりによって、決算前のクソ忙しい時によ」

「その腹いせが、鼻に画鋏ですか」

「悪いかよ」

「怒られますよ」

「誰に怒られるんだよ。誰も見てないよ」

「僕が見てるじゃないですか」

「あ、お前、チクるつもりか」

「連帯責任はごめんですからね」

太った男は、通りのむこうに目くばせを送る。

そこには缶コーヒーを買っている、もう一人の男の姿があった。

「けっ」痩せた男はいまいまして舌をうち、「まったく、あんなジジイに、どうしてデカイ顔されなきゃいけないんだろうな」

そう言いながら、すすりごと画鋏を抜いていく。しかしその画鋏を、今度は隣の女性候補のポスターに刺しはじめた。律儀にも、もともと画鋏の刺さっていた穴を狙って。

「よしなきいってば。そっちの人には恨みなんかないでしょうに」

「原状復帰じゃないか。元にもどしているだけだよ」

「通りかかりの人には、そう見えませんよ」

「俺は、ここに画鋏を刺していった人の志を無にしたくないの」

「何をバカなこと言ってるんですか」

「このババアの肩書きを見ろよ。『万象照会・慈愛の家 城西地区副支部長』だってさ。こんなバアさんに当選されてみる。市民まるごと信者にされちまうぞ」

「されませんよ。本当に大袈裟なんだから」

「それでもこいつに当選されちゃ困るんだよ。考えてもみろ。こいつが受ければうちの大将は落選だ。そうしたら専務として会社にもどってきちゃうじゃないか」

「先輩、本当にやめてください。ヤバイですよ。ナントカ選挙法にひっかかりますよ、そういうイタズラは」

「ナントカ選挙法ってなんだよ」

「ポスターのイタズラは、法律違反なんですよ。相手候補のポスターはがして書類送検された奴もいるって、レクチャーで注意を受けたでしょ」

「法律が怖くて、選挙の手伝いができるかよ」

痩せた男は、とうとうすべての画鋏を女性候補の顔面に戻してしまった。

太った男は処置なしとあきらめて、地団に目をもどす。

その後頭部に、痩せた男は空手チョップを振り下ろした。

「痛いなあ、もう」

「おい、志村君」

「なんですか」

「ナントカ選挙法なんて法律はないよ」

「わかってますよ」

「わかってるなら、ちゃんと法律の名前を言いなさい」

「憶えてません」

「じゃあお前、名前も知らない法律を破ったと言って、俺を責めるわけ？」

「責めてません」

「そういう大事な法律の名前も知らない奴が、選挙の手伝いなんかしてもいいと思ってるの？ レクを受けたろう、レクを。居眠りでもしてたのか？」

「起きてましたよ。寝てたのは、荒木さんの方じゃないですか」

「それなら法律の名前も聞いていたろうが。だったら言ってみろ。法律の名前を」

「……ええと」志村は目を細め、記憶の糸をたどった。「たしか、公職選挙法、かな」

「なーんだ。ちゃんと知ってるじゃん」しかし、荒木は納得しない。「だったらどうして、ナントカ選挙法なんて言い方をしたんだよ」

「知りませんよ」

「知ってるよ。お前の知らないは、知ってるって意味だということが、いま証明されたばかりじゃないか」

「もういいでしょう。おかしな絡み方をするなあ。いま僕の邪魔をすると、日が暮れるまでここにいますよ」

「そしたら俺は、このまま早退する」

「好きにしてください」

「届けには『志村君の方向音痴により』って書きちゃうからね」

志村はばかばかしくなって、相手にするのをやめた。そんなことより、いま自分たちの場所を探さなければ。本当に日が暮れてしまう。

のどかな住宅街の午後だった。遠くから聞こえるリズムカルなホイッスルと、女子生徒らのランニングのかけ声。

荒木は空を見上げた。雲一つない、すがすがしい秋晴れだった。

「ちくしょう、いい天気だな」

むしろ忌々しげに、荒木はつぶやいた。

ボールを弾く金属バットの音が、澄んだ空気に響いた。触発された荒木が、野球の素振りのまねをはじめた。

「志村君」

「なんですか」

「どうして、ナントカ選挙法なんていう言い方をしたの？」

志村はうんざりと肩を落とした。

「べつに、理由なんかありません」

「理由はあるよ。どんなことにも理由はあるんだよ。ちゃんと考えて、どうしてナントカ選挙法と言ったのか、答えなさい」

「確信がなかったから、なんとなく言葉を濁しただけです」

「嘘だ。お前は憶えていないと言ったんだぞ」

「だから、憶えていなかったんです」

「それも嘘だよ。けっきょく憶えていたもん」

「もう！ いったい、どう答えりゃいいんですか」

「本当のことを言えばいいんだよ」

「本当のことって何ですか」

「お前が俺を馬鹿にしている、ということだ」

荒木は、志村の鼻先にビシッと指をつきたてた。

「根本的にお前は、俺を馬鹿にしているんだ。お前だって社長と話す時は、建築ナントカ法なんて適当なことを言わないだろ？」

「……それはたしかに、言わないかも」

「前から気になっていたんだ。俺と話す時のお前からは、先輩に対する緊張感が、ぜんぜん伝わってこないからね」

「社長と先輩は違います。先輩に対していちいち緊張していたら、仕事にならないじゃないですか」

「じゃあ、吉武さんの前にいくといつも背筋がしゃんとするのはなんでだ。沢井と話す時に口ごもるのも、ありあ全部、緊張してるんじゃないのか」

「緊張してますよ。二人とも先輩だもの。先輩にも二種類あるんです」

「なんだ、俺は『緊張しない組』かよ」

「『組』というのはおかしいです。ひとりぼっちのグループを組とは言わない」

「口の減らない野郎だな」

荒木は志村の背中に、ゆるい膝蹴りを浴びせた。志村が無視を決め込むと、こんどはそのまるい背中にのしかかる。かまってほしくて仕方のない子供のようだった。「どうでもいいけど、まだ見つからないのか。昼の住宅街で遭難か」

「いま探してます」

「いつまでかかってんだよ、グズだなあ」

「いま探してるところです。幾多の妨害にもめげずに」

「なんでわかんねえの？　すぐわかんだろうが。この塙のむこう、学校だぜ」

「しょうがないでしょう。このへんは学校だらけなんですよ。だいたい、この地図がちいさすぎるんです」

「つべこべ言うんじゃないよ。駅の売店じゃ、それしか売ってなかったろ。そもそも、お前がいけないんだよ」

「どうしてですか」

「俺、事務所を出るときに訊いたよ。道はわかるのかって。お前、絶対に大丈夫ですって言わなかった？　向こうへ着けば場所はわかるって。駅を降りてすぐだから、迷いようがないって。それがどうして、こんなところで迷子になってるの？」

「しょうがないでしょう。最初はA駅で降りるはずだったんですよ。まさか電車の事故で、ひとつ前で降ろされるとは思わないじゃないですか。タクシー乗り場はあつという間に長蛇の列だし。……だいたい、なんで僕らだけ電車移動なんですか。はじめから車で来ればよかったじゃないですか」

「俺に文句言ってもはじまらないよ。車がぜんぶ出払ってたんだから、電車を使うしかないだろ。おしゃべりしている暇があったら、さっさと探せ」

勝手なことを言いながら、荒木はうーんと伸びをして、今度はゴルフのスイングをはじめた。

それを見た志村の口もどが、思わずゆるむ。

「あれ……？」

荒木が動きを止め、志村の方を見た。

志村はあわてて目をそらしたが、もう遅い。

「お前、いま笑った？」

「笑ってません」

「笑ってたよ。俺のスイングを見て笑った。歯が見えたもん」

「笑ってません。ぜったいに、笑ってません」

「お前、ゴルフやったことあるんだっけ？」

「ありません」

「思い出したぞ。お前、大学でゴルフをやってたんだよな」

「サークルで、ちよつとやってただけです。それだけです」

「なるほど、それじゃあスイングの上手い下手なんか、すぐにわかるよなあ。……なあ、志村君」荒木はむきになってブルンブルンと腕をふりまわした。「さあ、見てくれ。教えてくれよ。俺のスイング、どこが悪い？」

志村はべそをかいている。「もう本当に、勘弁してください。お願いですから」

「駄目だ。これでも俺は、お前のためを思って言っているんだよ」荒木は厳しくはねつけた。「君は本当に思慮が浅い。どういうことか、わかるか？」

「わかりません」

「君はついさっき、先輩の無知を嘲笑って叱られたばかりじゃないか」

「言っている意味がわかりません」

「ナント力選挙法のことだよ」

志村は信じがたいものを見るような目になった。

「まだその話を続けるんですか」

「聞け。お前は最初に法律で、次にゴルフで、たてつけに先輩を侮辱したんだ。でも俺はそのことを怒っているんじゃない。いちど注意を受けたことを、その場で無自覚にすぐ繰り返してしまう、そんな君の思慮の浅さを、忠告してあげているんだよ」

荒木は両手をうしろに組んで、ゆっくりと志村の周囲を回り始めた。

「危機察知能力。あるいは危機回避能力。そういうものが乏しいと、いつかよくないことに巻き込まれるって言ってるの。わかる？」

「わかりません。何のお話をされているのか」

「そうかい。それじゃあ、言っちゃおうかな。いじめちゃ気の毒だと思って、黙ってただけど」

「それなら聞きたくありません。そのまま黙っててください」

「どうして俺たちが道に迷ったか、教えてやろうと言っているんだ」

「僕が方向音痴だからでしょう。さっきそう言ったじゃないですか」

「それは表面的な理由にすぎないの。本質的な理由は、お前がはじめから、道に迷うわけないって決めつけてたからだよ。道なんてものはな。迷うかもしれないとはじめから用心しておけば、迷わないの。大丈夫だと高をくくってる時しか、迷わないの」

「高なんてくくってません。電車の事故が想定外だっただけです」

「そこが甘いんだよ。お前、車を運転している時のことを考えてごらん」

「僕、まだ飯免です」

「話の腰を折るんじゃない。お前が車を運転していたとするだろう。三十メートル先の路肩に障害物があったとして、それをよけなきゃいけないって時に、お前、残り三メートルまで近づいたところでようやくハンドルを切るのか？ そんな考えだから、結局よけきれずにぶつかっちゃうんだよ。障害物は、それを予感した瞬間からゆっくりハンドルを切り始めるの。そうすれば困った状況に陥るなんてことはないの。危機管理って、そういうことだろう」

「いったい僕は、何について怒られているんですか」

「A 駅で降りるつもりだったことは、仕方ないよ。問題は、隣のK 駅で降りなきゃいけないとわかった時に、ピコピコっと頭の警報装置がはたらくかどうかなの。『あれ？』って思った最初が肝心なの。出会い頭ですべてが決まるんだ。そこで問題に気づかないふりをしたり、高をくくって先送りしたりすると、もう取り返しはつかないんだよ」

「ピコピコっときたからこそ、この地図を買ったつもりなんですけど」

「でも、現に役にたっていないじゃん」

「そりゃあ、まあ……」

「そのわからない地図をひらいた最初の瞬間に、またピコピコなきやいけなかったんだよ。そこを深く考えずに、『高架線のガード沿いに歩いていきやA駅に着くだろう』と高をくぐるから、こういうことになるんだ」

「しょうがないでしょう。まさか道路がガードから逸れていくなんて、思わないし」

「お前さつきから、しょうがない、しょうがないって、何回くりかえすんだよ。それ、あんまりいい口癖じゃないよ」

ふいに真面目な口調で叱られて、志村は子供ののように頬をふくらませた。

「こんなところで、会社と同じ説教するのはやめてください」

「ありがたく思え。俺はおまえの教育係なんだぞ」

「初耳です。誰が決めたんですか」

「お前の親父さんに頼まれた」

「嘘ばかり。会ったこともないくせに」

「電話で話したんだよ。このあいだ、親父さんから会社で電話がかかってきたろう。お前の姉さんが出産した時だ。あの電話を取り次いだのは俺だよ。その時、うちの息子をよろしくって頼まれたんだ」

「そんなこと、社交辞令に決まってるでしょう」

「社交辞令だろうがなんだろうが、わかりましたと請け負ったからには責任が生じるのだ」
「それじゃあ今こそ、その責任感を發揮して、こいつに集中させてください。……だいたい、なんで僕がこんなことしなきゃいけないんですか。やっぱりあの時、すなおに北口で降りればよかったんですよ。A駅までの振り替えバスが出ていたのに」

「だから、そういうわけにはいかなかったんだって」荒木は、掲示板の女性候補の顔を拳でごんごん叩きながら、「北口でこの女たちが演説していたのを、お前も聞いたろう」

「してたって、いいじゃないですか」

「よくないよ。見つかったらどうするんだよ」

「見つかったらまずいですか？」

「あいつらA町まで何しに行くんだって、勘ぐられるだろう」

「考えすぎですよ。A町に、どれだけの人が住んでると思ってるんですか」

「住んでないんだよ。この状況の、しかも選挙期間中に、候補者の各陣営にとっては、A町に住んでるのは海老沢のジジイだけなの。俺たちがA駅付近をうろろしているだけで、花岩候補の陣営が海老沢センセイに接近しているってことになるんだ」

「そんな馬鹿な」

「俺に怒ったって仕方ないだろう。藤波のジジイがそういうんだから」

そう言って荒木は、自動販売機で缶コーヒーを買っていた男を顎で指した。藤波と呼ばれたその男は、いつの間にかパン屋の親父と話し込んでいる。

志村はまだ納得しない。

「堂々としていればいいんですよ。僕たち、悪いことしにいくわけじゃないでしょう。A町は選挙区外だから、戸別訪問にはならないって言っていましたよ」

「この場合、俺たちにやましいところがあるかないか、が問題じゃないんだよ。それを見ただ連中がどう思うか、それが問題なの。やれやれ、お前はまだまだそういうところが……」
「しっ、黙ってくださいい！」

志村が手を伸ばし、荒木の口をふさぐ。

荒木はその手をはねのけ、後輩の胸ぐらをつかんだ。

「この野郎、どこまで俺をなめてるんだ。犬猫じゃねえぞ」

「そうじゃありません。先輩、あれ、聞こえませんか」

二人は息をひそめて耳をすました。

冷たい秋の風に乗って、何かが聞こえてくる。それは、かろやかなウグイス嬢の声だった。連呼している候補者の名前は「万象照会・長崎みどり」。

声はどんどん近づいてくる。まちがいなく、こちらにむかっている。二人は顔を見合わせた。

「どうしよう」

「隠れましょう」

「そうしよう」

しかし、見通しのよい並木道には隠れる場所がない。あたふたと右往左往したのち、二人は車道に背を向け、立ち小便でもするように塀にむかって並んで立った。

「先輩、そんな物持ってちゃ、まずいですよ」

荒木はあわてて和菓子の紙袋を放りすてる。

肩をピツタリくつつけて立つ二人のうしろを、選挙カーが通りすぎていった。桃色の派手な車両看板と、四方向をむいた拡声器のスピーカー。元気のよいウグイス嬢の声。長崎みどり。長崎みどり。長崎みどりをよろしくお願いいたします……！

車がゆっくり遠ざかっていく。死んだふりで熊をやりすごすように、二人はしばらく動かない。声が角を曲がったところで、ようやく硬直を解いた。

「こっちに気づいていたか？」

「知りませんよ。僕だってうしろを向いていたんだから」

「気づいていたら、ふつうはエールを送ってこないか？ 『ナントカ候補陣営のみなさん、お互いがんばりましょう』みたいなの」

「こっちが隠れていることを察して、知らないふりをしてくれたんですかね」

「まずいじゃないか。やましいことをしていますって、白状したようなもんだぞ」

「そうかなあ」荒木の真剣な表情に、志村は急にバカバカしくなった。「やっぱり、考えすぎですよ。だいたい、あいつらが僕らの顔を知ってるわけない」

「ところが、連中は調べるんだよ。相手候補陣営の人数とか、ポスターの枚数と、貼っている場所とか、車の台数のナンバーとか」

「本当ですか、それ」

「そのくらいしたって、不思議はないよ。むこうは人手なんかいくらでもあるんだから。軍資金だって、最近、資産家のスポンサーがついたらしいよ。もう貧乏教団とは呼ばせないって、鼻息が荒くなっているんだとさ。さっきの駅前の演説だって、威勢が良かったじゃないか」

「それじゃあ、うちの元専務、ヤバイんですか？」

「だからこうして、海老沢センセイのところへ挨拶にいくんだろが」

「海老沢センセイに頼むと、当選できるんですか」

「できるんじゃないの」

「そんなに影響力のある人なんですか」

「あるんじゃないねえの。今回辞めた議員も、前の選挙じゃそうやって当選したらしいよ」

「でも、汚職で捕まっちゃったんでしよう」

「だからチャンスなんだよ。センセイも肩入れする相手がなくなって困っているんだとさ」

「それで、その分の支援をごっそりこっちに回してもらおうってことですか。そんなにうまくいくのかなあ」

「センセイにしたって、いまさらどっかの政党に乗ったってしょうがないし、ましてや訳のわかんない宗教団体の応援なんか、できっこない。消去法で、うちの大将しかいないんだよ」

「いったい、どういう人なんですか。フィクサーとか、政界のドンとか、そんな感じなんですかね」

「俺もよく知らないけどね。まあ、どうでもいいよ。そいつと話すのは藤波さんだ。俺たちはそのうしろで、ひたすら恐れ入ってりゃいいんだから」

「ねえ荒木さん、どうして僕たち、選挙の応援なんてしてるんですか」志村はしょぼくれた顔になって、声を落とした。「僕、そんなつもりでうちの会社に入ったんじゃないんですけど」

「べつにいいじゃん。仕事サボれるし」

「なんかこういうの、イヤなんですよ。僕、政治のこと何もわからないのに」

「俺もわからないよ。でも、社長の兄貴が立候補しちまったたら、社員は手伝わないわけにいかないだろう」

「仕事そっちのけでやるようなことですか」

「今はそっちのけにするほど受注もないけどな」

「だったらなおさらですよ。営業まで選挙の手伝いにかりだされて、これで仕事が増えるわけじゃないんですか」

「そこはいいんだよ。うちの大将が当選すれば、そのツテで仕事が取れるんだとき」

「本当かなあ、今どき、そんな話」

「そこに賭けるしかないほど、会社が傾いてるってことでしょ」

「五十人の従業員が路頭に迷うかも、という瀬戸際なのに、賭け事をしている場合なんですかね」

「まあ、悪あがきかもね。でも、何もしないよりましだろ。とにかく、ここまで来たらこのオヤジには当選してもらおうじゃないか」

拳を突き上げる元専務のポスターに、荒木はアップパーカットをお見舞いした。

「さっさと終わらせて帰ろうよ。お前も、喋ってないで場所を探せ。本当にわかんないの？」

「うーん、だいたい場所はわかるんです。とにかく、総武ガスケットという会社さえ見つければ、海老沢先生のマンションは、そのすぐ裏だって話なんですけど」

「それって、線路のこっち側？ むこう側？」

「A駅の北口だから、むこう側でしょう」

「じゃあ、まずガードをくぐらないといけないな」

「たぶん、その角を左に曲がるとガードに出ると思うんですけど」
「俺、ちよつと行って見てこようか」

歩きかけたところへ、藤波がパン屋からもどってきた。バッグを脇にはきみ、ほかほかの缶コーヒーを二本、両手でもてあましながら小走りにやってくる。

元専務の選挙参謀だというこの男とは、今日が初対面だった。もう老人といってよい年齢で、長くこの商売をやっているプロ中のプロということであった。ニコニコとうす気味悪いほど愛想がよく、そのくせ目の奥が妙に冷たくて、なんだか好きになれないタイプの男だ。

「いやあ、びっくりしたねえ。こんなところで相手方の選挙カーに出くわすとはねえ」

藤波はおどけて、額の汗を拭くまねをしてみせた。

「あわてて店の中にとびこんじゃったよ。悪いことはできないもんだねえ。君たち、顔は見られなかったらうね」

「はい、大丈夫です」

そう答えるしかない。塀に向かって並んで立っている男二人の背中が、じっさいにはそうとう不審に映ったのではないか、とも思うが。

それよりも、と、荒木は眉をひそめた。このジイさん、いま「悪いこと」って言わなかったか……？

「風が冷たいだろう。まあ、これでも飲んで温まってよ」

藤波は缶コーヒーを二人にわたした。その時、荒木が手ぶらでいることに気がついて、
「……あれ？ 荒木君、菓子折はどうしたの？」

紙袋は、先ほどあわてて放り投げたまま、銀杏の根もとに落ちていた。

「おい！ グメだよ。大事に扱ってくれなきゃ」

藤波はセカンドバッグを放り捨て、紙袋に飛びついた。

滑稽なほどの狼狽ぶり。こめかみに血管を浮き立たせ、ギョロリと眼をむいたその形相は、たった今コーヒーを奢ってくれた男とはまるで別人だった。

地図に目を落としている志村は、藤波の豹変に気づかない。荒木だけが、呆然とその姿を眺めていた。

藤波は袋をひらき、中に手を突っ込む。菓子の箱ではなく、その下にある何かを確かめているような手つき。間もなくホッと安堵の息をつき、何事もなかったかのように、もとの穏やかな老人に戻った。しかし、菓子の紙袋は二度と荒木にわたそうとしなかった。

「志村君、地図はもういいよ。パン屋のご主人に聞いてきた。その角を左に曲がればガード下に出るってさ。あとは線路伝いに道があるらしいよ」

「やっぱり！ そうじゃないかと思いましたが」

志村は声を弾ませ、うれしそうに荒木と藤波を見比べる。

「さあ、急ごう。海老沢先生を待たせるわけにはいかない」

藤波は腕時計を見てそう言うと、先にたって歩き出した。荒木と志村は、あわててその後を追った。

藤波は歩きながら電話をかけた。相手は海老沢の秘書らしかった。「今そちらに向かっています」「間もなく到着します」と言ったあと、

「東山さん、ちよつと面白いものを配っていたので、お土産に持って行きますよ」

などと、先ほど駅前で受け取ったチラシをながめながら、笑っている。時代劇に出てくる悪徳商人のような高笑いだった。

電話が終わるのを待って、荒木は思い切って声をかけた。

「あろう、藤波さん……」

「何だい」

「その紙袋の中身って、菓子折りなんですよ」

「そっだよ」

「どういうお菓子なんですか」

「和菓子の詰め合わせだよ」

「やっぱり、高いやつなんですかね」

「まあ、安くはないね。相場ってものがあるからね」

「そういう手土産って、問題ないんですか。ひっかからないんですかね」

「何に？」

「法律に」

「何の法律？」

「ええと、ナントカ選挙法……」

「ははは、ナントカ選挙法って何だい。そんな法律はないよ」

藤波は笑い飛ばし、足も止めずにずんずん歩いて行く。

荒木は立ち止まった。

うしろに続いていた志村が、危うくぶつかりそうになる。

「ちょっと、先輩、どうしたんですか」

「お前、帰んな」

荒木は藤波の背中を見つめながら、ぼつりと言った。

「回れ右して、いますぐ帰れ。あとは俺がやっつくから」

志村はきよんとしている。

「いったい、どうしたんですか」

「なんでもいいよ。ピコピコ来たんだよ。……ちょっと遅かったけどな」

荒木は自嘲ぎみに、口の端をゆがめた。

「連帯責任はごめんなんだろう？ 帰れよ。あのオッサンには俺から話しておくから」

「本当に、何の話をしてるんですか。そんなわけにいかないでしょう」

「いくんだよ。帰って仕事をしていなさい。今日中に提出しなきゃいけない見積書があっただろ」

「そんなもの、ありましたっけ？」

「なきや探せよ。探せばあるよ、見積もりくらい。おまえも後輩なら、いっぺんくらい先輩の話を素直に聞いてみたらどうなんだ。ホラ」

戸惑う志村の体をくると反転させ、尻を蹴って送り出した。

「迷わないで、まっすぐ帰るんだよ」

8 久留里製造の社歌を歌える社員が総武ガスケットにいる【五十五日前】

ゴム革カーボンセラミック あまたの素材を使い分け
円に四角に立方体 多様な造形お手の物
パッキン、シール、ガスケット

たゆまぬ工夫で歩みを止めぬ 久留里製造ここにあり

しつかりつないで破損を防ぎ ガッチリふさいで漏れ防ぐ

人目にふれない機械の奥で 大事な部品を引き締める

ちいさなパーツの大きな力

山椒は小粒でピリリと辛い 久留里製造ここにあり

メソポタミアの文明支え 蒸気機関の発明支え

人類進歩の立役者 ジャンボジェットも注射器も

これがなければはじまらぬ

明るい未来の発展担う 久留里製造ここにあり

昼下がりとある病院の二人部屋。

建物はかなり古い。カビの浮く天井と、ひび割れた壁。隣の病室から、雑音まじりのラジオの音が聞こえてくる。

窓際のベッドは空いている。ドア側のベッドには、顔色の悪い老人が横たわっている。すでに虫の息で、意識がない。口には酸素マスク。腕には点滴の管と、何種類ものチューブやケーブルがとりつけられている。

付き人用の丸椅子に、女の見舞客がひとり座っている。四十代半ば。化粧っ気のすくない顔に、地味なスーツ。膝のうえには大きめの鞆。

女は心配そうに、老人の顔をじっと見つめている。

老人は、ときおり呻き声をあげた。そのたびに女は、口もとに耳をよせ、酸素マスクを持ち上げて声を聞き取ろうとした。

その姿を、廊下を通りがかった看護婦が見とがめた。

「あなた、何をしているの。マスクを外しちゃダメよ」

「あ、ごめんなさい」

女はあわてて手をひっこめた。

看護婦はフンツと鼻を鳴らした。それから大股で病室に入ってくると、女の体をおしつけて、病人のマスクを元にもどした。

「本当にすみません。なにか歌っているように聞こえたものですから」

「マスクは外さないでください。患者さんにも手を触れないで」

「あの、お聞きしたいんですが」

「なんですか」

「佐藤さんのご病状って、どんな具合なんでしょうか」

看護婦は、女の全身にジロリと視線を走らせた。

「あなた、お身内の方？」

「違います」

「じゃあ、どなた？」

「ええと、同僚の者です」

「あら、そう。それじゃあ、いつもの方の代わり？」

「違います。……いつもの方って？」

「お若い方よ。毎日来るの。今日はまだ見ていないけど」

「わたし、いま来たばかりなので……」

「とにかく、詳しいことはその方に説明してあります。そちらでお聞きになってください」
病人がまた、何事かつぶやいた。喉をぐりぐりと動かし、顎を左右にふっている。しかし看護婦は気にもとめずに、シーツの乱れを整えている。

女はたまらずに、また尋ねた。

「あの、さっきからずっと何か言ってるんですけど」

「うわごとです。もう意識はありませんから。お気の毒ですけど」

「苦しんでいるんですか？」

「数値に異常があれば、ナースセンターでもわかるようになっていきます」

「本当に、大丈夫なんでしょうか」

「数値に異常があれば、わかりますから」

とにかくマスクをはずさないでください、看護婦はそう念を押して去っていった。

女は老人に目をもどした。節くれ立った手がシーツをつかんでいる。こめかみに血管が浮いている。一見、苦しみもだえているように見えるのだが、不思議と表情は穏やかだった。深刻な昏睡状態の中で、楽しい夢でも見ているのだろうか。

しばらくして、青年が一人、病室に入ってきた。

「あれっ？ ええっ？」青年は廊下に響くほどの大声をあげた。「香山さん、どうしてこんなところ……」

色白の、ひよろりとした長身。小さな目に、長い顎。茶色い髪、耳にはピアスを開けている。外見はやや軽薄だが、目つきや物腰は案外まじめそうだった。どこかで見たことのある顔だ。

「ああ、あなたは確か、ええと……」

「樋口です。元庶務課の」

「ああ、樋口君。そうだったわ」

「嘘ばかり。あなたが僕の名前を知っているはずないです」

樋口はカラカラと笑った。

香山はぐっと喉を詰まらせる。

「ああ、いや、いいんです。僕のことなんか、知らなくて当たり前ですから」樋口を真に受けられて、樋口はかえって狼狽した。「……でも、びっくりしたなあ。本当に、本物の香山さん？」

「そう見えない？」

「お仕事はどうしたんですか」

「近くまで来たから寄ってみたの」

「本物の香山さんなら、そんなことはしないとと思うんですけど」

「あら、そう？　じゃあ、本物じゃないのかも」

冗談とも本気ともつかぬ口調で、香山は言った。

樋口は不思議そうに、香山の顔をのぞきこむ。

「何か特別なご用ですか？」

「そういうわけじゃないけど……。わたしが佐藤さんのお見舞いに来たら、そんなに変わなあ」

「そりゃあ、変ですよ。僕らとあなたじゃ、住んでる世界が違うもの」

「そんなことないわよ」

「ありますよ。僕ら、あの会社では透明人間でしたから」

「透明人間？」

「そう。ネクタイ締めた人には、僕らの姿は見えない。だからこっちから挨拶をしても、むこうは応えてくれない」

樋口は陽気に笑ったが、香山はまた黙り込んでしまう。

樋口は頭を掻いた。どうやらこの手の冗談はNGらしい。

その時、病床の老人がひときわ大きな呻き声を発した。「社長」と言ったように聞こえた。

「ねえ、佐藤さん、大丈夫なの？　なんだか、さっきから苦しそうなよ」

「ずっと、こんな調子です。一昨日くらいから、意識がはっきりしないんですよ。先生によると、もう時間の問題だそうですね」

「そんなに悪いの。……知らなかったわ」

「でも佐藤のオッチャン、よく頑張ってますよ。一ヶ月前には、もってあと十日って言われてたんですから」

「いま、『社長』って言ったみたいだけど？」

「昔つとめていた会社の社長のことだと思えます。……ちよつと待っていてください」

樋口はいったん病室を出ていくと、紙バックのコーヒー牛乳をふたつ持ってもどつてきた。

「どうぞ。こんなもの、口にあわないでしょうけど」

「ありがとうございます。でも、もう失礼するから」

「いいじゃありませんか。もう少しいてあげてください。見舞客なんて、めったに来ないんです」

青年は、隣のベッドからもうひとつの丸椅子をもってきて、女の横にすわった。

「佐藤さん、ご家族はいらっしゃらないの？」

「いません」

「親戚の方も？」

樋口は首を振った。

「友達も、古い仕事仲間らしいおジイちゃんが、このあいだひとり来ただけです。会社の人間だって、香山さんがはじめてですから。今にも死にかけているというのに、このオッチャンを心配してくれる人は、誰もいないんですよ」

「それで、あなたがずっとお世話をしているのね」

「お世話というほどのことはしてません。見かけはボロいけど、いちおう完全看護の病院なんで。僕はただ、毎日顔を見に来ているだけです」

「毎日って、あなたは、仕事は？」

「とっくに辞めました。半年前に。気がつかなかったでしょうけど」またしても口をすべらせて、樋口はあわてて打ち消した。「いや、いいんです。気がつくはずないんです。こちらだって、挨拶なしで辞めてるんだし」

樋口のあわてぶりに、今度は香山も表情をほころばせた。

「ごめんなさい。わたしもこのところ、いろいろ大変だったのよ」

「社員さんは、みんなそうです。僕らのことを気にしている暇はないですよ」

「でも、ひどい話よね。一日かけて会社中を掃除してもらって、ゴミの收拾やら、郵便物の配達やら、外への遣いやら、次から次へと用事を言いつけて、そのくせ名前も憶えないなんて。ましてや、感謝したりねぎらったり、そんな言葉をかけたこともない。なんて傲慢なのかしら。……ぜんぶ自分のことだけ」

「ご心配にはおよびません。オッチャンも僕も、その方が気楽でしたから。とくにオッチャンなんか、社員さんから親しげに話しかけられても、緊張してうまく受け答えできない人でしたからね」

「……わたしも、佐藤さんの声って聞いたことない。声だけじゃなく、どんな顔をしていたかも、よく知らなかったわ」

佐藤は、いつもオドオドした目つきをしていた。清掃をしにオフィスに入ってくる時も、用事を言いつけられている時も、広い場所にひきずりだされた小動物のように、つねに怯えていた。香山の印象には、それしか残っていない。

今こうしてあらためて見る佐藤の顔は、色が黒く、精悍だった。白くて長い眉毛と、刀で彫り込んだような深い皺。逞しい腕には細かい傷跡がたくさん残っている。

七十歳。枕元のプレートには、氏名や血液型とならんで、そう記されていた。

樋口は手持ちのコーヒー牛乳にストローさし、香山のそれと交換してやった。

「手は洗ってありますからね」

香山はストローに口をつけた。聞いたことのないメーカーのコーヒー牛乳は、砂糖水のように甘かった。

樋口は香山の姿を、無遠慮にじろじろ眺め回している。

「今日はなんだか、僕の知っている香山さんとは、ちよつと違うなあ」

「そうかしら」

「しばらく見ないうちに、急に年をとっちゃいましたね」

「はつきり言うのね」あっけらかんとした樋口に、香山は苦笑した。「あなたの知っているわたしって、どんな人だった？」

「そりゃあ、なんていったって、近寄りかたかったですよ」樋口は脚を持ち上げ、椅子のうえで胡座をかいた。「いつ見ても、おっかない顔してるし」

「おっかない？ そうだった？」

「僕たちがビビッていたこと、わかりませんでしたか？」

香山は首を振る。しかし、すぐに思い直した。

「嘘よ。わかってた」

「香山さんが通る時は、左右によけて道をあけてましたから」

「それも、わかってたわ。わかっていて、廊下の真ん中を歩いていたのよ。きぞかし、イヤな女だっと思ってたでしょうね」

「……いや、まあ、立場とか地位というか、それを考えれば当然だとも思いますけど。オッチャンなんかはね、『香山さんみたいな人が俺たちの給料を稼いでくれているんだから、足向けて寝られない』ってよく言っていましたよ」

「佐藤さんが、そんなふうには？」

「女子社員の中にも、香山さんにあこがれている娘もおおぜいいましたよ。たしかに、テキパキ部下に指示をくだしている姿なんかは、ちょっとカッコよかったですよ。いつ見ても自信满满だったし」

「自信满满か……。そこはたしかに、今とは大違いだわ」

「香山さんって、会長からヘッドハントされたんですよね」

「そんなこともあったわね」

「男ばかりのあの会社で、しかもその若さで、次期部長の椅子が約束されているって聞きましたけど」

「そんなこともあったわね」

樋口は探るように香山の横顔を見た。光の消えた瞳と、ゆるみきった頬。そこにはかけらほどの覇気もない。

「……なんだかわかんないけど、重症みたいですね」

「なぐさめがいがなくて、ごめんなさいね」

「もうちよつと時間をください。なにかうまい切り口を思いつくかも」樋口は腕を組んで、真剣に考えはじめた。「それまで帰っちゃ駄目ですよ」

「だいじょうぶよ。今日は夕方までに帰ればいいんだって」

樋口は壁にかかった時計を見た。時刻は二時をさしている。

「それなら、まだ油を売っていても大丈夫だ」

「大丈夫どころか、今日は喫茶店に寄って、雑貨店をのぞいて、さんざん時間をつぶしてから、ここへ来たのよ。会社を出たのは朝だもの」

「へえ、香山さんでも、そんなことするんですか」

「そんなことって？」

「仕事の帰りに喫茶店に寄り道なんて、そりゃあ僕らの発想ですよ」

「そうなの？」

「外へ遣いに出るなんていったら、ホイホイ喜んで出ていったもんです。乾電池を買いに行って二時間かえってこなかった時には、さすがにオッチャンにばれて、『真面目にやれ』とこっぴどく叱られましたけど」

「そう。わたしも叱られちゃうかしら」

「香山さんを叱る？ そんなことの出来る人がこの世にいるんですか」

「さっき、太った看護婦さんに叱られたばかりよ」

「ああ、あの人は特別です。この病院でいちばん威張っていて、院長先生だって頭があららないですよ。でも、オッチャンとは仲良しでした。根はいい人です」

「あなた、やさしいのね」

樋口は少年のように、手のひらでゴシゴシと鼻をこすった。

「そんなことより、最初の質問にもどりますけど……」

「わたしがどうしてここに来たか？ お遣いの帰りに、寄ってみたくなっただけよ。本当にそれだけ」

「香山さんが、お遣いですか」

「ええ。代理店に行つて、見本誌を回収してこいつで頼まれたの」

樋口は背筋をのばし、香山の横顔を見直した。見本誌回収など、それこそ佐藤や樋口の領分の雑用である。

「それはやっぱり、オッチャンがいないからですか」

「いいえ、わたしが病気で三ヶ月間、休みをとっていたからよ」

「ああ、なるほど。今は復帰後の試運転中というわけですね」

「試運転にしては、長すぎるみたい。復帰したのは二ヶ月前だから」

「いったい何の病気だったんですか」

「そうねえ。一口では言えないわ。救急車で運び込まれたのは産婦人科。退院したあとで通っていたのは心療内科」

「……ふーん」

無感情な声でそう言うのと、樋口は自分の紙パックにストローを刺し、いそいで吸い込んで、はげしく噎せ返った。

樋口の動揺がおさまるまで、香山は待った。その間、視線は佐藤を見つめていた。あいかわらず、佐藤の顎はもぐもぐと動いている。

「ああ、すみません、もう大丈夫です」

「驚いたでしょう」

「それでもありません。うちの兄貴の同僚も、仕事と家庭がどっちもうまくいなくて、悩んだあげく医者通いをしているそうです。新聞なんかでもよくそういう記事を読むし、今時、あんまりめずらしい話でもないんじゃないやありませんか」

「そう。わたしも案外、月並みなのね」

「やっぱり、月並みは嫌いですか」

「以前はね。今はかえって、そう言われると安心みたい。……ぜんぶ話してみようかな。重たい話だけど、聞く勇氣ある？」

樋口は椅子にすわりなおし、右の拳で胸をたたいた。ドンと来い、という意味らしい。

「わたし、お腹に赤ちゃんがいるなんて、ぜんぜん気がつかなかったの」

「そんなことってあるんですか」

「普通はないと思うけど、わたしはそうだったのよ。とにかく仕事が忙しくて。カレからは、いつまで結婚を待たせるんだって、何年もいわれていたんだけど、大きな仕事が片付くまではって、ずっと我慢させていたのよ」

「へえ」

「でも、大きな仕事って切れ目ががないのよ。おかしなものよ。この仕事は社運がかかっているからってプレッシャーをかけられて、なんとか成功させたはずなのに、それが終わると次の仕事もまた、社運がかかっているって言われるの。一回負けたら全部パーになる賭け

事を、延々とやらされているみたい」

「へえ」

「お前に任せた、お前しかいない、なんておだてられて、その気になってガムシヤラに仕事をしていたら、いつの間にか救急車に乗せられていたって感じ。そのまま手術室にはこぼれて、次に気がついた時はベッドのうえ。母と、カレの顔が目の前にあって、何が起きたのかと訊くより前に、『君のせいじゃない、君が悪いんじゃない』って、カレが繰り返して言っているの。カレの顔を見たのは、その日が最後。二週間後に退院して、自宅のマンションに帰ったら、テーブルに鍵が置いてあったわ」

「へえ。……すみません、こんな相づちしかうてなくて」

「じゅうぶんよ。ちゃんと聞いてくれているもの」

「香山さんは大丈夫だったんですか。その、香山さん自身のお体が、という意味ですけど」
「お医者さんは、次の機会は大事にしなさいって言ってくれたわ。あれって、こういう時のお決まりの台詞なのかしらね。でも、それ以来、何にもする気が起きなくて、食事もお風呂もイヤになって、トイレに行くのも面倒だって親友にうちあげたら、医者さんにひきずっていつてくれたの。五分くらいの診察で、病名がついて、薬も出たのよ。びっくりしたわ。そうしたら何だか、いろんなことが急に怖くなっちゃって。家に着いたとたん、病院にとつてかえしてお願いしたの。わたしが変な気を起こさないように見張っていてくださいって」

「そんなあ」

「馬鹿みたいでしょ？ 自分でそう気がつくまで、二ヶ月もかかっちゃった」

「それで？」

「もう大丈夫と太鼓判……は押してくれなかったけど、仕事にもどったほうがいと先生に言われて、会社に復帰したの。そうしたら、わたしの机は別の場所に移されていた」

「どこに？」

「北館の最上階」

「げっ、あんなところに……」樋口は思わず声をつまらせた。「そりゃひどいや。会社もやることが露骨だ」

「復職したら、とどこおっていた仕事は津波のようにおしよせると覚悟していたから、肩すかしもいいところ」

「信じられないなあ。香山さんを窓際に追いやって、損をするのは会社の方じゃないんですか」

「わたしもそう思っていたの。でも、ただの自惚れだったみたい。代わりなんかいくらでもいるものね。プロジェクトは、今は私のアシスタントだった娘が引き継いでいて、それがけっこう、うまくやっているみたい。先週、パートナーさんと親睦会があったんですって。わたしはそれを、昨日知ったの。先方の担当者が電話をくれたのよ。香山さん、どうして来なかったのって」

「何て答えたんですか」

「もう体裁をとりつくろうのまばかばかしくなっちゃって、初耳です、誰も教えてくれませんでしたって、正直に言っちゃった」

「ははは。相手は何と？」

「さあ、困ってたんじゃない？ 黙り込んでたんじゃったから」

その時の相手の顔を想像し、くつくつと、自然に笑いがこみ上げてきた。香山の笑顔を見て、樋口も白い歯をのぞかせた。

「あなた、聞き上手ね」

この飄々とした若者を相手におしゃべりしていると、不思議と気分が解放されていくようだった。もし佐藤が元気だったら、この若者のように自分の話を聞いてくれたらどうか。

「ずいぶん前だけど、わたし一度だけ、佐藤さんに叱られたことがあるのよ」

「オッチャンが？ まさか」

「言葉で叱られたわけじゃないんだけど」

「そうでしょう。ありえませんか」

「佐藤さんがわたしの部屋を掃除しに来てくれた時、わたしはちょうど、アシスタントの娘を叱っていたのね。仕事はいいねいなんだけど要領が悪くて、なんでもかんでも几帳面にやりすぎる娘だったから、抜くところは抜いて時間を節約してくれなきゃ困るって怒ったの。何でも一生懸命やればいいってもんじゃないのよ、どうせ客先にはわかりっこないんだからって。その時、佐藤さんと目があつたの」

「ははあ、なるほど」

樋口は合点があったというようにうなずいた。

「なんていうか、呆れたような、哀れむような、そんな目だったわ。顔はおぼえていなくても、あの目だけは忘れられない。なんだかすぐく、軽蔑されているような気分だった」

「それは考えすぎですよ。でもわかります。オッチャンらしい」

「どういふところが？」

「そういう目をしておきながら、何にも言わないところです。じっさいは臆病で、人と話せないだけなんですけど、やられた方は思わせぶりに感じるんですよ。香山さんもムカツときたでしょう」

「そうね。ちよつと不愉快だったかな」

「わかります」

「でも、そんな事は次の瞬間には忘れちゃっていたけどね。思い出したのは、ついさっき。会社にもどる途中に、ふつと思ひ出したの。佐藤さんの、あの時の顔。それで総務に電話をして、この病院を教えてもらったのよ」

「目に浮かびます。僕が仕事で手を抜いたときも、よく変な顔をしていました」

「なにか、そういう信念の人だったのかしら」

「信念？ とんでもない」

樋口は、おおきく手を振って笑いとばした。

「そんなに格好のいい人じゃありませんよ。可哀想なくらい、不器用なだけです。本当に、それだけの人なんです。雑用係以外、なんにも出来ないんですよ。若いころから、そういう仕事しかやってこなかったそうです」

佐藤を罵る樋口の声には、温もりがこもっていた。

「頭は悪いし、要領も悪い。そうとう一生懸命がんばって、やっと人並みという人でした。だから、仕事で手を抜くっていうこと自体、よく理解できなかったんじゃないかな。その

時、香山さんを見ていたのも、軽蔑とかじゃなく、ただ不思議だったんだと思いますよ」

老人の喉が、またぐりぐりと動いた。酸素マスクの中で、くぐもった声がする。

「何を言おうとしているのかしら。謔言というより、なにかの歌みたいなんだけど」

「久留里製造ここにあり、ってやつでしょう」

「そう」

「オッチャンにとっては、大事な歌なんですよ」

「どういう歌なの？」

「社歌だそうです。久留里製造の社歌。このあいだ、見舞いのお客さんが来たといったでしょう。三週間くらい前だったかな。オッチャンと同年代の人で、昔、オッチャンが前の仕事を辞める時に、自分の後釜にその人を推薦してあげた仲だといってました。たぶん、僕らと同じ『透明人間組』の人なんだと思います。その時はオッチャンまだ意識があって、その人との再会をものすごく喜んで、何時間も話こんだあと、最後に二人で、この歌を歌いはじめたんです。それ時以来、いつも懐かしそうに口ずさんでいました。意識がなくなっただけでも、ずっとこの歌を唄っているんですよ」

「久留里製造って、どこかで聞いたことがあるような気がするんだけど。……何年前前に、何かのニュースにならなかったかしら。そこが佐藤さんの、昔の勤め先？」

「オッチャンがいたのは久留里製造じゃなくて、その下請けの会社だったはずですよ。総武ガスケットとかいう」

「あなた、よく知っているわね」

「そりゃあもう。耳にタコができるくらい聞かされましたから。たまにいっしょに飲みに行ったりした時に、いい具合にお酒がまわってくると、オッチャンは決まってこの話をするんですよ。オッチャンの生涯ゆい一つの自慢話なんです。……聞きたいですか？」

「聞きたいわ」香山はうなずいた。「ぜひ聞かせて」

樋口は嬉しそうに身を乗り出した。

「何年前の話かは知りませんが、総武ガスケットは久留里製造と共同で、新製品の開発に取り組んでいたらしいんです。ところが完成品の不良率がなかなか下がらなくて、何が原因かもわからずに、頭のいいエンジニアの人たちも、お手上げ状態だったそうなんです。オッチャンはそこで雑用係をしていて、製造ラインから出る廃棄物を片付ける役目だったんですが、ある時ふっと、新製品の廃棄物が、他のと比べて手触りが違うということに気づいたんですね。ほんのちよっとした違いだったらしいんですけど」

「それが、原因究明の手がかりになったの？」

「でもオッチャンは口下手だから、そのことを誰にも言えずにいたんです。まさか本当に、自分の発見が不良の原因と関係があるとも思っていなかった。でも、会社のお偉方がどんなに考えても、まったく理由がわからない。困り果てた久留里の社長が、何の気なしにオッチャンにそのことをぼやいたんですね。その社長は、従業員の身分に関係なく、どんな人にも優しく親しく接してくれる人だったそうです。それで、ついにオッチャンも勇気をふりしぼって、自分が気になっていたことを言ってみた。すると社長の顔つきがみるみる変わって、すぐにその場に社員を招集した……」

「……それで？」

「廃棄物を徹底的に分析した結果、製造工程で予期せぬ化学変化が起こっていたことが、そこから判明したんだそうです。製品を調べただけでは、なかなかわからない盲点だった。エンジニアの人も、廃棄物を調べてみることでまでは思いつかなかったんですね」

「すごいわ。お手柄だったのね」

香山は思わず、頬をほころばせた。

「オッチャンは、表彰されたそうですよ。さっきの香山さんの話じゃないけど、この開発は、社運をかけた大プロジェクトだった。関係者が一丸となって取り組んでいるその中で、オッチャンもしっかり役に立った。それどころか、プロジェクトを成功に導いた立役者になった。雑用係のオッチャンが、会社の危機を救ったんですよ」

「すごい、すごい」

「オッチャンの生涯にとって、唯一とっていい、晴れがましい経験だったんですね。残念ながら久留里製造という会社は、その数年後になくなってしまったんだんですが、この社歌は当時、久留里の社長が、現場の士気を高めるために自分で作った歌らしいです。朝礼でいつも唄っていたので覚えてしまったんですね」

「その頃のことを思い出しながら唄っているのね、きつと……」

香山はあらためて、深い皺のきざまれた老人の輪郭を、目でなぞった。

何十年も雑用係として、誰にも注目されずに生きてきた老人と、彼のひとつきりの自慢話。彩りのない灰色の一生の中に光る、たった一粒の宝石。

「なんだか、うらやましいわ」

「そうですかねえ」

「やっぱりわたし、もう少しここにいようかな」

「それはありがたい」樋口はぼつと顔を明るくした。「そうしてください。正直にいうと、こんなオッチャンと二人きりているのは、僕も辛い」

「わたしと差し向かいで、おっかなくないの？」

「オッチャンといっしょなら、大丈夫でしょう」

「そうね。わたしも、オッチャンと話がしてみたかったわ」

「聞いたか、オッチャン！ あの香山さんが、こんなことを言ってるぞ」樋口はベッドに手をつけて、老人の耳元に叫ぶように言った。「オッチャン、聞いてるか」

老人は、歌い続けている。

樋口はそつと、酸素マスクをずらしてみた。

その歌声は、弱々しく、か細く、子守歌のように安らかだった。

温度の変化に堪え忍び　プレッシャーにもへこたれず

騒音摩擦を和らげる　辛い役目も厭わずに

任務をはたす最後まで

機械を結んで社会を結ぶ　久留里製造ここにあり

3 お詫びの食事会に招待されたのは、ミスプリントを受け取った者だけ【二十一日前】

投資顧問会社「荻野目コンサル」の社長室。時刻は午前十時。

白い壁と黒いデスク。重厚なカーテン、毛の長いカーペットに、応接セット。調度品はどれも安い物ではない。ただ、背の高い観葉植物はプラスチックのように見える。

まだ三十代と思われる女が、肘掛けつきの革椅子に座り、受話器を耳にあてている。華奢な体を鎧うかのような高級スーツ。疲れといらだちをごまかそうとするかのような、濃い化粧。

「……はい、もちろんです。今回の件でご迷惑をおかけしたことは、重々承知していると申し上げています。いろいろな手違いが重なりまして、こちらとしても思いも寄らぬことになっていくんです。……もちろん、事態はこちらで責任をもって収拾いたしますけれども……」

その横で、作業服を着た男たちが、熱帯魚の水槽を運びだそうとしている。水槽は幅が一メートルを超える大ききで、水を抜いてもそうとうの重い。嵌め込まれていた壁から慎重にひっこぬいて、二人がかりで出口へむかって運んでいく。

「……はい、ですから、直接お詫びをしたいと思ってお電話しているんです。浅茅社長とは以前、個人的にも親しくさせて頂いておりましたし。……いえ、その番号には、もうかけたんです。でも、つながらないの。わたしが知っているのは三年前の番号だから、もう変わっているんだと思う。……ちよつと待って……」女は受話器を手でおさえ、作業員に叫んだ。「ねえ、そこ、ドアにぶつけないように気をつけてよ」

言いおわらぬうちに、ゴツンと音をたててドアが揺れた。

二人の男は青ざめて女を振り返る。

さいわい電話に集中している女は、もう彼らのほうを見ていなかった。二人はホッと胸をなで下ろし、逃げるように外へ出て行った。

彼らが水槽をぶつけたのは、入れ違いに入ってきた男を避けるためだった。

「失礼します」

どنگり眼の童顔だが、年はおそらく五十年代。几帳面そうな、きちんとした身なり。表情は固く、頬はやや紅潮し、鼻の穴が十円玉大にひろがっている。こみあがる憤懣を腹の底におさえこんでいるといった様子だった。

男はデスクに歩みよった。女はペン先で彼を制し、電話口にもわかって話し続ける。

「……あなたねえ、直接電話をつなげなんて、そんなことをお願いしているんじゃないでしょう。連絡のつく番号を教えてくださいと言っているの。……ちよつと、私を不審者あつかいするつもり？ 最近かかってくる電話のことなんか、わたし知りません。住所なんか訊いてやしないじゃないの。そんなおかしな人といっしょにしないでよ。……失礼だけど、あなた、どういった方？ 秘書？ それともただの電話番号？ わたしからの連絡を邪魔すること、あとで自分の立場が困ったことになるという想像力ははたらかないわけ？」

男は懐から封筒を取り出し、女のほうにむけてデスクに置いた。そのまま直立し、正面を見ている。

女はちらりと封筒の標題を見た。それから男の顔を見る。しかし意識は電話に集中している。

「……とにかく、あなたに判断できないなら、判断できる誰かを呼んできてちょうだい。その人と話すから。……いいえ、このまま待たせていただきます。何時間でも待っていますから！」

先方の音声が保留音に変わった。女は電話をスピーカーに切り替え、受話器をたたきつけた。椅子の背もたれにおおきく身をあずけ、長いため息。だがすぐに体を起こし、直立不動の男を冷めた視線で見上げた。

「おはようございます、矢作さん」

「おはようございます、社長」

「昨日は遅くまでごくろうさま。で、これは何？」

「見ての通りです」

矢作は前を見たまま答えた。

「あなた、この会社を辞めたいの？」

「いいえ、そういうわけではありません」

「そういうわけじゃない人が、どうして辞表なんか持ってくるわけ？」

「辞めたくはありませんが、辞めろと言われましたので」

「誰に？」

「社長にです」

「いつ？」

「昨日の緊急会議で。お忘れですか」

「わたし、辞めろなんて言ったかしら。責任をとれと言ったけど」

「意味は同じです」

「ぜんぜん違うわ」

女社長は吐き捨てるように言った。

「あなたが辞めたいというのなら、べつに引き留めやしないわよ。勝手にしてちょうだい。ただ、その前に責任をとってからにして」

「と、いわれますと？」

「事態を収拾しなさいよ。あなた、わかっているの？　うちの会社、悪くしたら訴えられるかもしれないのよ」

「大げさです。そんなことにはなりません」

「もちろん、ならないわよ。ならないようにするのよ。みんなの力で。だからあなたも手伝って」

「いったい私にどうしろと？」

「だから、この事態を収拾するんだってば」

「具体的な方法をご指示ください。曖昧な命令は困ります」
矢作はふてぶてしく、語気を強めた。

「あなた、バカじゃないの」

心底あきれたというように、女社長は声を裏返し、

「それを考えるのが、あなたの仕事じゃないの？　辞表なんか書いている暇があったら、若い人たちにあなたから指示をしてよ」

「指示をしようにも、誰もいません」

「当たり前でしょう！ あなたを待ってられないから、みんな自分たちでやれることを考えて、各自で奔走しているのよ！」

女社長は思わず平手で机をたたき、すぐに顔をしかめて、こめかみのあたりを手でおさえた。

「……あなた、何年この会社にいるんだっけ？」

「ずっとです。社長よりも古いです。創業当時からです。前社長がお元気だった頃からです」

矢作は「前社長」という一言に、妙なアクセントをつけて言った。

女社長はうんざりした顔。

「あなたはいつもそういう言い方をするけど、兄のことを言えばわたしが感傷的になるとでも思うわけ？」

「そんなつもりはありません」

「死んだ兄の後を継いだとき、右も左もわからないわたしを支えてくれたのは、古参の幹部たちだった。でもそのあと、みんな定年で辞めていったり、あちこちに引き抜かれたりで、いま残っているのはあなただけ。それなのに、何よ。情けないと思わないの？ すこしは安達君を見習ったらどうなのよ。今朝の彼、見た？」

「見ましたよ。なあんだ、社長はああいう謝罪がお好みですか」

「馬鹿いわないで。彼、自分の意思で丸刈りにしてきたのよ。こうなったのも自分の責任だから、これからお詫び行脚に行ってくると言ってる。どこに行ったと思う？」

「どこへって……」矢作は一瞬眉をひそめたのち、すぐに顔色を変えた。「まさか、あの二人のところへ？」

「そうよ、あの暴力団関係者のところよ。そういうところには弁護士を遣るから行かなくていいと言ったんだけど、自分に出来るのはこれくらいだっていって、止めるのもきかないで出て行ったんだから」

「一人で行かせたんですか」

「さすがに若杉さんについていってもらったわよ。剣道五段の腕が、こういう時に役にたつのかどうか知らないけど」

「そんな、無責任な」

「無責任？ 無責任ですって？」

女社長は薄い眉毛を逆立てて、

「だったら、今からでも遅くないわ。安達君を呼び戻すから、あなたがかわりに行ってください。もし指を落とされたら、労災にしてあげるわよ」

矢作は言葉に詰まった。しかし依然として、恨めしそうな目つきで女社長を見返している。

「安達君は、印刷屋から納品されたチラシを検品しただけなのよ。まぎっていたミスプリントは全体のほんの一部だったんだから、普通に検品したくらいじゃ見つけられるはずなのよ。それでも受領書にハンコ押したのは自分だからと言って、飛び出していったのよ。去年入社した彼がそこまで責任を感じているというのに、あなた自分が恥ずかしくもないの？」

「だから、私は責任をとって会社を辞めると言ってるんです」

「あなたが辞めて、誰が喜ぶのよ」

「すくなくとも社長には喜んでいただけると思っていましたか」

「どうして」

「今回の件は、私に原因があるというご意見でしたので」

「ご意見でしたので？ ご意見でしたので??？」

女社長は、いまにも卒倒しそうな裏声を頭のとっぺんから発した。

「まさかと思うけど、あなた、俺が悪いんじゃないって、そう言いたいのか？」

「そうは言ってもません。でも……」

「でも、なによ」

「いえ、何でもありません」

「なによ、言いたいことがあるなら言いなさい」

「じゃあ、言います。昨夜の会議の蒸し返しだと言わないでくださいよ」

「なに、またあの話？ だったら言わなくていいわ」

「いいえ、申し上げます。言えといったのは社長ですから」

閉口している女社長にのしかかるように、矢作は身を乗り出した。いったんしゃべり出すと、何度も練習したかのように立て板に水だった。

「第一に、発注ミスに気がついて、それを印刷屋へ連絡したのは私です。私が気がついて連絡しなければ、すべてのチラシがミスプリントになっているところでした」

「そのまちがった発注書に、あなたは承認のハンコを押しているのよ。どうせ間違いに気がつくなら、その時に気づいてほしかったわね」

「次に、届いたチラシをまだ配布するなという指示は、私は受けていませんでした」

「指示もなにも、チラシの内容について、まだ浅茅側の了解を得ていないということ、あなたも知っていたでしょう」

「ええ。ですから、私はチラシの作成そのものにも反対していたはずですよ。うちのセミナーを受講すれば浅茅会の会員になれるなどという広告を、先方の了解も得ずに刷ってしまったなんて、はっきり言って正常とは思われません」

「会員じゃない。準会員よ。そこを間違えたからこんなに大騒ぎになっているのに、あなたはまた、同じところを間違えるのね」

「そもそも、うちは美容院じゃないんですよ。投資セミナーの会員募集に、街頭でチラシを配ってどうするんですか。案の定、今回いろいろ文句を言っているのだから、ハナからうちの顧客になるような手合いじゃない。投資になんか興味の無い、射幸心まるだしの金の亡者ばかりだ。たまたまチラシを受け取って、当たりくじでも拾ったように勝手に浮かれて、その当てがはずれると今度は筋違いの文句を言ってくる。おまけにその中にヤクザ者がまぎっていたなんて、何から何までトンチンカンです。社長はしなくていい失敗を無駄に重ねているんですよ。どうです。私の言っていることに、どこか間違いがありますか」

「ないわ。正論よ。前から思っていたんだけど、あなた、自分に都合の悪い話は、はじめから聞こうとしないか、すぐに忘れてしまうのね。だからあなたと話す時は、いつも同じところを堂々巡りになってしまうのよ」

「どういう意味ですか」

「今あなたが言った正論は、あなたの正論じゃないわ。わたしの正論。最初にこの企画を

三浦君が会議にかけた時、ネガティブな側面としてわたし自身が指摘したことよ。『美容院』という例えも、『射幸心まるだし』という表現も、わたしのボキャブラリー。あなたはそれを、いつの間にか自分の言葉にしてしまったようだけど」

「たとえそうだとしても、問題の本質は変わりません」

「ネガティブな側面もある。そのうえでわたしは、あえてこれを実行に移すと決めたのよ。その理由も説明したはずだけど、それは憶えてないんでしょね」

「憶えてますよ。チラシを刷って既成事実を作ってから交渉した方が有利だ、という御説でした。私に言わせれば暴論です」

「浅茅との交渉はコツがいるのよ」

「なるほど。社長はそれを熟知してらっしゃるといわけですね」

「それ、皮肉のつもり？」

女社長は氷のような冷たい一瞥をくれた。

矢作はたじろがず、強い視線で女社長を見返している。

「浅茅会だの準会員だのと言ったって、そんなものは呼び名を大袈裟にしているだけで、実態は単なる講演の依頼みたいなものなんだから、そのことをわからせちゃった方が早道なのよ。もちかける話に具体性がなければ、警戒されるか、いろんな条件をつけて自分に都合のいい話に変えようとするか、どっちかなんだから、あの男は。その点、はじめから安っぽいチラシを見せてしまえば余計なことを考えさせなくてすむし、こんなていど話なんだとわからせてしまえば、あとはギャラ次第、小遣い稼ぎのつもりでOKしてくれるはずだったのよ」

「それならチラシの見本を見せればすむことです。なにも本当に印刷することはない」

「話をまとめてからチラシを印刷したんじゃ、セミナーに人を集める頃には年が明けちゃうじゃないの。決算をまたいじゃ、意味がないのよ。うちはもう、すこしの余裕もないんだから。それはあなたが一番、よく知っているはずじゃないの」

「すこし声が高いんじゃないか」

矢作が分別臭い顔をしてたしなめると、女社長はいちだん声を高くした。

「誰に聞かれたって、かまいやしないわ。とにかく、チラシはまだ浅茅と交渉するため材料という段階だったのに、あなたはそれをバラまいてしまったのよ。どうしてくれるの」

「ですからそれは、配るなという指示の不徹底です。私の本意ではありませんでした」

「それなら、わざわざアルバイトにA駅の北口で配れと指示したのはなぜなの。あそこなら人も多いし銀行もならんでいるからって言ったそうじゃないの。どうせバラまくなら、少しでも効果的にやらないとダメだと言って」

「いけませんか。私は社員です。不本意な決定であっても、会社のためには最善をつくすのが当たり前でしょう」

「だったら、結果に対する責任感まで共有してちょうだい」

そう言うと、女社長は引き出しの中から一枚のメモを取り出し、読み上げた。

「いい？ 『準会員』を『会員』と印刷してしまったミスプリントが五十枚。回収できたのがたったの四枚。会員になれると信じてセミナーに申し込んできたひとが十人。問い合わせが十件。そのうち十二件がクレームになって、その中の二人が暴力団関係者。そればかりじゃないわ。浅茅の会社に直接クレームをいれた人が三人もいるのよ」

「そんな連中は、放っておけばいいんです。文句をつけて、少しでも金をせびりとってやれと考えているだけじゃないですか。だいたい、彼らにどんな損害が発生したと言うんですか。こちらが謝らなきゃいけない理由なんか、ありません」

「そんな言い分が通ると思ってる？　うちが原因でよその迷惑がかかっているのは現実的なよ。一刻も早くこの火を消さないと、業界の笑いものにされるわ。そんな時に、一番古参のあなたが、『もともと反対だったから自分に責任はない』なんて、あきれてるのがいいないんだけど」

「私に落ち度がひとつもなかったとはもうしません。しかし……」

「しかし、なによ」

「……いえ、何でもありません」

「社長はがっくりと首を折る。」

「ねえ、このやりとり、イライラするから止めて。男らしくハッキリおっしゃい」

「じゃあ、言わせていただきます。私のことばかりおっしゃっていますが、社長ご自身については、どうなんですか」

「わたしがどうしたの」

「チラシを配らせた私に責任があるのなら、チラシを作らせた社長には、もっと責任があると思います」

「当たり前でしょう」

「では、どう責任をおとりになるつもりなので？」

「決まってるじゃない。わたしにできることをするのよ」

「ですから、具体的な方法をお聞きしているのです」

「そんなこと、いちいちあなたに言いたくないわ」

「確かに女社長の歯切れが悪くなる。」

「矢作はギョロリと目をむいた。」

「ちよつと待ってください、私にこれだけ厳しいことを言っておいて、自分の責任については、そんなふうに曖昧にぼやかすんですか」

「べつに、ぼやかしてやしないわよ……」

顔をそむける女社長に、矢作はここぞとばかりにたたみかけた。

「冗談じゃない。口先ばかりじゃないですか。そんな中途半端な覚悟で、私に無礼な口をきくのはやめていただきたい」

「無礼ですって？」

「無礼で悪ければ、短慮です。ようするに、浅はかなんです。そもそも浅茅憲久の力を借りようとするなんて、正気とは思われません。傾いた経営をたてなおす秘策がこれですか。連続赤字を切り抜ける妙案がこれですか。他力本願もいいところじゃないですか」

「だったら、別の案を出してくれたらよかったですのよ。あなた、そういう会議になると、他人のアイデアにけちばかりつけて、自分は何にも言わないじゃないの」

「批判せざるをえないのは、その程度の案しか出てこないからです。私が案を出さないのは、私が何を言ってもどうせまともに取り上げてもらえないからです。これまで私は会社のためを思い、社長にたびたび苦言を呈してきました。しかし社長は、一度たりともまともにも耳を傾けてはくださらなかった。この四年間、ずっとそうでした」

「違うと思うわ」女社長はひややかに言った。「あなたが人の意見に文句ばかり言うのは、他人をおとしめて自分の無能をごまかそうとしているだけ。自分で案を出さないのは、出せないから。やりかたがわからないのよ。一度も自分で考えたことがないから」

「……」

「だいたい、口癖のように『会社のため』を連呼する人間に、本当にそう思ってる人なんていないのよ。あなたの口から苦言なんか聞いたことないわ。聞かされるのはいつだって、からつぽの自己主張か、みじめな愚痴。若い人の仕事はくさすのに、難しい仕事を自分から引き受けてくれたことなんかないじゃない。それがどれだけ現場の士気を下げているか、気づきもしない。仕事が出来ないのはかまわないから、出来るふりをするのはやめてちょうだい。駄目でもかまわないから、せめて一生懸命やってよ」

女社長は容赦なく、言葉の打擲をあびせる。

矢作は何かを言おうと口を開けたが、声が出てこなかった。顔を真っ赤にして、驚きを含んだ目を瞠っている。この年齢になって、ここまであからさまに侮辱を受けるような敬虔も、なかなかできないであろう。

さすがに言葉が過ぎたと思ったのか、女社長は目をつむり、いったん呼吸を整えた。

「……いいわ。バカみたいな案だってことは認めるわよ。でも仕方ないでしょう。いくら堅実な運用を謳ったって、それだけでお客さんはうちにお金をあずけてくれない。いろいろと企画をたちあげて、手を打って、やれることは全部やって、それでも駄目だったから、やむをえずこの案に希望をつないだのよ。それに、ぜんぜん勝算がなかったわけじゃない。刑務所から出て以来、彼の動向はマスコミにあまり伝えられていなかったから、広告に彼の名前が載れば、それだけでもインパクトがあるでしょう。彼の名前は、投資家のあいだではまだまだ魅力があるはずだし……。現に、間違ったチラシでこれだけ反響があったということは、決して悪い狙いじゃなかったということよ」

「しかし浅茅会というのは、浅茅が個人的に親しい金持ちの資金を運用する、いわばうちの集まりでしょう。我々なんか、相手にしてくれるはずがない。つきこむ額が二桁は違う」

「だから準会員ということにしたんじゃないの。とにかく、名前だけでいいのよ。月に一回、食事も開いて、彼に小一時間雑談でもしてもらえれば、たいていの投資家はありがたがって耳を傾けるんだから」

「社長……」

女社長のトーンダウンに合わせ、矢作も冷静さを取り戻した。

「前社長が亡くなって、あなたが社長に就任することが決まった時、私は反対する連中を説得しました」

「知っているわよ。内心では面白くないと思っていたこともね」

「それでもあなたを支持したのは、前社長があなたのことをどれだけ大事に思っておいでだったか、よくわかっていたからです。……社長からごらんになれば、私は仕事のできない無能な年寄りなかもしれないません。たしかに、前社長が銀行を辞めて独立した時、年上の同僚だった私を誘ってくれたのは、出世に遅れて冷や飯をくわされている私に同情してくれたからです。そのことについて、私は前社長に感謝しているし、私がことあるごとに前社長の話をするのも、私としては、あの方への恩にむくいたいという気持ちがあるから

です。社長にとっては不愉快なことかもしれませんがね」

「わからないわ。いったい何が言いたいのか？」

「前社長のことを思えば、社長ご自身のことも、私には案じられるということです。会社のことも無論、大事には違いありません。しかし、社長のお気持ちはどうなんですか。本当にこれでいいんですか。浅茅などという男を頼ることに、抵抗は感じないんですか」

「……驚いた。あなたはずっと、わたしの心配をしてくれていたわけ」

「そうじゃない。今あなたがしようとしていることをお兄さんが見たらどう思うか、そのことを考えてくださいと言っているんです。浅茅憲久といえど、前社長が亡くなって混乱しているところにつけこんで、うちの会社にさんざんうちにボロ株をつかませた男じゃないですか」

「そうよ」

「しかも、寝室であなたを殴った男だ」

「そうよ、思い出させてくれてありがとう」

「その彼を、あなたは刑務所送りにした」

「そこはちがう。わたしは気絶してただけ。救急車を呼んだのは彼。病院経由で暴行の事実がバレて、インサイダーの執行猶予が取り消されたんだもの。わたしが恨みを買ういわれはないはずよ」

「彼があなたを恨んでいなくても、あなたはどうなんですか。あなたは彼を許せるんですか。あの男にいいように利用され、さんざん踏みつけにされたことを、もう忘れたんですか。そんな男に泣きついて助けを乞うなんて、社長には女の意地とかプライドといったものはないんですか」

「あるわよ。人一倍ある。だから、それを高値で売るのが。それでこの会社を守れるのなら、あの人でなしの靴だってなめるわよ。それくらい、わたしは全然平気。見損なわないでください。……ちよっと、そちらの方、遠慮しないで入ってきたらどう？　そこで待たせても、このケンカ、当分終わらないわよ！」

女社長が入り口にむかって怒鳴ると、先ほど水槽を運び出した作業員が、怯えきった目をしてやってきた。

「こちらに確認のサインをお願いします」

受け取った書類に、女社長は一字一字力をこめ、ペン先で名前を彫りこんでいく。

「今日ひきとってもらった水槽ですけどね。またすぐにここに戻してもらうことになると思うから、よそに貸し出さないようにしてもらえるかしら」

「いやあ、それは、どうかなあ……」

「すぐよ。すぐにまた、お宅と契約するんだから。いいわね。お願いしたわよ」

お願いと言うよりは脅しあげるような言い方をして、女社長は書類を突き返した。

作業員は複写を引きちぎって女社長の手に押しつけると、風をまいて去って行く。

水槽がはずされた壁には、ぼっかりと虚ろな空洞が空いていた。穴の中には塗装もされていない木材の表面や、鉛筆でひかれた寸法線などがむき出しになっていた。ここにオフィスを構えた最初から、水槽がはずされたことは一度もなかったのだ。彼女の兄が社長を務めていたその頃から、この壁には蛍光色の熱帯魚が泳ぎ回っていた。

「……ずいぶん殺風景になるもんですね。水槽ひとつ無いだけで」

「ふん、すっきりしたわ。今朝は何匹死んでいるかと心配しながら出勤するのは、毎日憂鬱だったのよ」

こんなレンタルを解約したところで、浮かすことのできる経費など知れている。矢作は、先ほど女社長が読み上げたメモに目を落とした。裏面から、FAXで送られてきた広告が透けている。

「そういうえげ、総務の連中が文句を言っていました」

「また？ 今度は何」

「コピー用紙の裏紙を使うのは、情報管理の観点からやっぱり抵抗があるそうです」

「気をつけて使えばいいのよ。どこでもやってることじゃないの」

「それから離席時にいちいちパソコンの電源を落とすのも面倒だとボヤいていました」

「あらそう。不満があるなら、今後は二人で一台を共有してもらおうよ」

女社長は癩癩をおこした娘のように、つんと顎を上にもつけた。いつの間にか、矢作の子供じみた態度が移ってしまったようだった。

「社長、経理をあずかる立場から言わせていただきますが……」

矢作は、辞色をあらためて言った。女社長が興奮するにつれて、逆に矢作のほうが、大人らしい落ち着きを取り戻している。

「いまさらこんな節約をいくつ重ねても、焼け石に水です。コストカットに取り組みなら、人件費の削減を考えるべきです」

「そんなこと、とくに手をつけているじゃないの」

「賞与や基本給といったレベルの話をしているわけではありません。私が何度も進言したように、思い切った人員整理が必要です。人を切れと言っているんです。それこそ、どこでもやっていることじゃないですか。従業員にも生活がある、などと悠長なことを言っている場合ではありません」

「そう？ じゃあ、あなたが率先して辞めてくれる？」

「いいですよ。それが会社のためになるならば」矢作は瘦せた胸をそらせた。「その辞表は、そういうふうに使ってもらっても結構です」

「ああ、もうっ、うるさい、うるさい、うるさい」

女社長は机の上の辞表を握りつぶし、矢作にむかって投げつけた。くしゃくしゃになった紙つぶては矢作の肩に当たり、絨毯のうえに落ちた。

「この会社で何を優先するかは、わたしが決めるわ。もう出て行って。こんなところで油を売っている暇があったら、さっさとどって打開策を考えなさい。それができないなら、裏紙とパソコンの消し忘れに目をひかせて。そのくらいのことなら、あなたにだってできるでしょう。さあ、さっさと行って！」

女社長は椅子から立ち上がり、息のかかる距離に顔を近づけた。

その時、スピーカーフォンの保留音が止まり、冷たい女の声が聞こえてきた。

「……お待たせいたしました、荻野目様」

女社長は飛びつくように受話器を取り上げた。

「もしもし、ちよつとあなた、いつまで待たせるつもりなのよ」

「申し訳ありません。本日は、たまたま浅茅が当社しておりまして、荻野目様のことを伝えましたところ、直接お話になるということでした」

「浅茅さんが、直接？」

「これよりおつなぎいたしますが、お話しになりますか？」

「決まってるじゃないの。……いえ、ぜひお話しさせていただきます。どうかつないでください。」

「……もしもし、冬子ちゃん？」

鼻にかかった、気障たらしい男の声がした。

「もしもし、浅茅さん？ あの、お久しぶり、冬子です。荻野目冬子……」

女社長はスピーカーのスイッチをきり、くると矢作に背を向けた。

「……はい、おかげさまで。あの、浅茅さんはいかがですか。……いえ、そんな、お詫びだなんて。もう昔のことですし、わたしは何とも思っていますから」

これまでとは別人のような、媚びを含んだ女の声だった。矢作の存在は、もう眼中にな
い。

「……それで、今回の件なんですけれども。……はい、こちらの手違いで、浅茅さんに相談する前にチラシを配布してしまったのです。まことに申し訳ございません。……はい、そうなんです。……いいえ、そのように言っていただけ。……はい、それで、今回の経緯のご説明とお詫びをかねて、ぜひ一度お目にかかれなにかと思ひまして」

女社長は窓にむかってペコペコと頭を下げていたが、不意にバネ仕掛けのようにピンと背筋をのばし、

「……本当に？ ええ、もちろん。嬉しいですよ。そんなふうに言っていただけなんて、ありがとう。本当にありがとう。……え、お料理に？ あなたが？ まあ、楽しみ。それじゃあケーキでも買っていこうかしら。……そうそう、あなた、甘い物は嫌いだったわね。それじゃあワインを持っていくわ。……銘柄は私に任せて。あれからわたしもずいぶん勉強したのよ。成果を見てもらわなくっちゃ」

歯の浮くような追従の言葉。それとは裏腹に、女社長の顔は青ざめ、は醜くひきつっている。

浅茅の方は上機嫌でこの会話を楽しんでいるらしい。彼がこの電話に飽きるまで、女社長の方から受話器を下ろすことはできないであろう。

ポキリ、というちいさな音が聞こえた。女社長の握りしめたペンが、まっぶたつに折れる音だった。机のうえに、真っ黒なインクがポタポタとしたたった。

正視にたえず、矢作はきびすを返した。しかし、部屋から出て行こうと歩きかけたころで、その足はびたりと止まって動かなくなつた。

先ほど投げつけられた紙つぶてが、転がっている。

矢作はふりきって歩き出そうとする。しかし、靴底がべったりと糊付けされたように、どうしても足が持ち上がらない。

女社長の寒々とした嬌声が続く中、矢作は石のように固まって、いつまでも丸められた辞表を見下ろしている。

6 万象慈会を嫌っているのは、七回忌法事の出席者たち【四十一日前】

古い日本家屋の仏間。

襖と障子はすべて開け放され、ひんやりした秋風が心地よく吹き抜けていく。縁側の日だまりで、猫があくびをしている。そのむこうには、手入れの行き届いた庭園。紅葉が色づき、池の上におおいかぶさる竹林が、呼吸をするように上下に揺れている。

立派な仏壇に、線香が燻る。金茶の座布団にさしむかいで座っているのは、ともに六十代の男女。

女は小作りの顔に、終始おだやかな笑みを絶やさない。すっかり白くなった髪を結び、水浅葱の結城に桜色の帯。掌に乗せた湯飲みの上げ下げが優雅で、上品さが体に染みついていく。膝の上に、すこしおおきめの封筒を乗せていた。

男は背広姿。痩身だが、理知的な面差しと、年輪を感じさせない深い皺に、年齢相応の貫禄がある。ただこの夫人に対しては、長姉を前にした末弟のように畏まっている。

「本日は奥様のお顔を拝見できて、安心いたしました」

男は両手を膝にそろえて、頭を下げた。

「長いこと、心配をおかけしましたね」

「お見舞いにかがうこともできず、仲間ともども心苦しく思っております。……お体の方は、もう本当によろしいのですかね」

「ええ、すっかり。……福盛さんは今、どうしていらっしゃるの？」

「昨年まで、いくつかの会社で名ばかりの役員をしておりましたが、すべて暇をもらいました。現在は、倅の仕事を手伝っています」

「そうですね」

「次男が外国の貧村に小学校を建てていまして、その相談役のようなことを。まあ、こき使われておりますよ」

「ご活躍なのね」

「しかし、さすがに年をとりました。年々、時間のたつのが早く感じられるようです」

「みなさん、本当に同じ事をおっしゃるのね」夫人はくすりと笑った。「わたくしは、そのように考えるのは止めにいたしましたのよ」

「ほう」

「わたくしたちの現世の生活なんて、しよせん、一時の仮住まいみたいなものですもの。ごく自然な、そのようなことを言い慣れた者の口調で、夫人は言った。

福盛は表情を変えず、聞こえなかったふりをした。

「それから、七回忌の法要にはお伺いすることが出来ませず、失礼いたしました」

「本当に、残念でした。みなさんもおっしゃってましたよ。福盛さんが来てくれなきゃ、集まった意味がないって」

「先に海外出張が決まっていたものですから。私も残念でした」

「こちらが、もう少し早くご案内をお送りしていればよかったのね。はじめてのことだったので、手間取ってしまった……」

「当時とは、住所の変わっている者もおりますから。お調べになるのも、大変だったでしょう」

「わからない方の住所は、津久井さんや中村さんに調べていただいたのよ。当時、主人と苦楽をともにされた方々を、なるべくたくさんお招きしたいと言ったら、張り切ってくさって。わたしはただ、二人にお任せしていただけ」

「連中、調子にのって、当時の取引先の古い仲間もみんな集めようとしたようですね。奥様の予想以上に、大人数になってしまったのではありませんか」

「そのほうが、あの人も喜ぶでしょう」

「しかし、奥様のご存じない者もいたでしょう」

「いいえ。お会いするのははじめてでも、お顔は存じ上げている方ばかりでした。あの時、主人を支えてくださった皆さんの写真は、たくさんありますから」

「みんな元気でしたか」

「それはもう、同窓会のように賑やかで、わたくしも昔を懐かしく思い出しました。ただ、どうしても連絡のつかなかった方も、何人かいらっしやっただようです。それから、もう亡くなられてしまった方も……」

「大石さんから聞きました。佐藤さんが亡くなったそうですね」

「そういうお話でした。でも、久留里の社員さんではありませんね。どういう方だったかしら」

「協力工場で雑務をしていた人です。社長好みの、寡黙で、実直で、勤勉な人でした。社長は、そういう裏方仕事に従事している人からも慕われていましたから」

福盛は往事を懐かしみ、あらためて仏壇の遺影を見上げた。

川向秀夫。久留里製造元社長。

もじやもじやの頭髪に、よく日に焼けた知的な顔が、精悍な漁師のようにも、優秀な学者のようにも見える。すこし斜めにかまえ、おおきくエラの張った顎をひいて、まぶしそうな目を細めて微笑していた。

「こちらのお庭でバーベキューをした時の写真から、切り取られたのですね」

「あら、よくわかりね」

「すぐわかりました。この写真の社長は、いい表情をしておられる」

「とにかく、賑やかなことの好きな人でしたから」

「昨日のこのように、よく憶えています。あの時はめいめい家族をつれて、おおぜいで押しかけてしまいました。さぞ迷惑でしたでしょうね」

「そんなことはありません。わたしも楽しかったわ」

二人はそろって、庭園のほうへ顔を向けた。

「ただ、後片付けは大変でした」

「子供たちが庭中走り回って、池の石によじのぼるやら、松の枝を折ってしまうやら」

「枝を折ったのは、うちの人でしたよ」

「そうでした。子供たちといっしょに、かくれんぼや鬼ごっこをしておられた」

「嬉しかったのでしょうか。わたくしどもは三十年つれそって、とうとう子供は授かりませんでしたから」

「社長ご自身が子供に返ったように、戯れておいででした」

「みなさんという時の主人は、本当に幸せそうでした。仕事でもそう。若い頃からずいぶんいろいろな仕事をしてきた人でしたけど、久留里の社長に就任してからの主人は、生涯

のうちでもっとも生き生きとしていたように思います」

「本当に、一番いい時期でした。我々も、楽しかった。会社の状況は厳しかったが、あれほどやりがいと生きがいを感じて仕事に取り組んでいたことはありません。すべて社長の指導によるものです」

「一本気な熱血漢でしたから。みなさんには、ご迷惑だったかもしれませんがね」

「とんでもない。あの時、銀行の幹旋で川向社長をお迎えしていなかったら、久留里製造はあの時点で消滅していました」

「それでも、結果的には会社を甦らせることはできませんでしたけど」

「そんなことはありません。社長がおられなければ、久留里はあとに何ものこさず、取引先にも多大な迷惑をかけて倒産していただいでしょう。会社はたしかになくなってしまいました。最後にいくつもの画期的な技術を開発し、業界に貴重な財産をのこすことができたと思っっています」

「本当にそうなら、いいのですけれど……」

夫人は膝元に視線を落とした。

「若い頃から、寝ても覚めても仕事のことばかり考えている人でした」

「そうでしたね、とにかく型破りな方で、はじめはびっくりいたしました」

「もう、言葉づかいがベランメエで、わたくしなどはいつもハラハラしておりましたのよ」
「就任初日のことは、今でも思い出します。新社長をお迎えするために、主立った者たちが社長室に集まって到着をお待ちしていたのですが、いっこうにお見えにならない。心配して探しに行ってみると、社長は作業服を着て工場におられました」

「あの人らしいわ。せっかちで、回りくどいことが嫌いなんです」

「現場の人間を質問攻めにして、説明を聞いたたびに声をあげて感心していたそうです。あれで、頑固なベテラン工員の心を一度につかんでしまった。それ以降も徹底した現場第一主義で、社長室にいることはほとんどありませんでした。食事も食堂で、アルバイトの工員といっしょにとっっていました。意見具申は、清掃員のほんの思いつきにも、真剣に耳をかたむけておられた。おかげで、難しい試作が成功した時などは、すべての従業員でその喜びを分かちあうことが出来たのです。精力的で、あらゆることに体当たりで、行き詰まったときにも決してあきらめない方でした。なにより発想がユニークで、熟練工では絶対に考えつかないようなことをポンポン思いつかれていた。あれにはみんな、舌をまいたものです」

「でも、あのおかしな歌だけは……」

夫人は口もとに手をあてて、くすくすと肩を震わせた。

福盛もつられて頬をゆるめた。

「いやあ、奥様はお笑いになります。あの歌がどれだけ我々の結束を固くしてくれたかしれません」

「久留里の社長に就任することが決まってから、鉛筆をなめなめ、床の中でも思案していたんですのよ。あんまり大まじめなので、わたくし、もう、おかしくて……」

「朝礼では毎回、みんなで肩を組んで歌わされました。はじめは気恥ずかしさもありましたが、毎朝心をそろえてひとつの歌を唄っていると、前日どんないざこざがあっても、不思議と団結心がよみがえってきて、気持ちに張りが出てくるのです。いまでも、あの頃の

連中と集まったときには、かならず声を合わせて歌うんですよ」

「そのようですね。法事の席でも、最後はみなさんで合唱になってしまつて」

「苦しい時期を一丸となつて乗り越えた仲間たちは、あの歌とともに、社長から受けた教えを決して忘れたことはありません」

と言うと、福盛は居住まいをただして口調をあらためた。

「前役員のデタラメな経営で、久留里はもうダメだとすっかり諦めていた私たちに、社長はもういちど、会社を愛する気持ち呼び覚ましてくれました。愛社精神だけではなく、自分の仕事に情熱を傾けることのすばらしさを、一から教えていただいたと思つています。その精神があればこそ、久留里がなくなつた後も我々は、それぞれの新天地で生きがいを感じながら働くことが出来たのです。すべて社長のおかげです。社長の作つたあの社歌を唄える者は、みんな同じ気持ちです」

福盛は、夫人の懐に自分の心をねじ込もうとするかのように、熱く訴えた。川向が非業の死を遂げ、夫人との面会が途絶えて以来、どうしても伝えたいと思つてきた気持ちだつた。

「……過分なお言葉です。あの人にはもつたいないと存じます」夫人は声を詰まらせて、うつむいた。「本当に、ありがとう。これで少しだけ、心が軽くなりました」

着物の袂で目をおさえ、小刻みに肩を震わせている。福盛は思わず腰を浮かせた。

「どうされたのですか、急に……」

「わたくしたち夫婦は、みなさんに恨まれていると思つておりましたのよ。わたしなどは、とても合わせる顔がないと……」

「とんでもない。そんなはずはありません！」

福盛はびっくりして、目を瞠つた。思いもしなかつた、夫人の言葉だつた。

「そんなこと、あるわけがない。いったい、どうしてそんなふう……」

「だって、そうじゃありませんか。そんなに慕つてくださつていた皆さんを、主人は裏切つてしまつたんですもの。あんなにひどい形で……」

福盛は愕然とした顔で、座布団の上にとすんと体を落とした。

「存じませんでした。奥様が、そんなふうにお考えだつたとは……」

福盛はかすれた声を絞り出した。

うかつだつた。夫人が自責の念を抱くことは、予測できたはずだ。彼女の立場にたつて、すこし想像力をはたらかせれば。

川向が電車で飛び込んで自殺を遂げたその日から、夫人は自宅にこもり、一切の人付き合いを絶つてしまつた。その理由を福盛たちは、夫人が自分たちを恨んでいるせいだと決めつけてしまつた。

しかし、事實はまったく逆だつた。そうだとわかっていたら、押しかけてでも夫人の誤解を解き、自分たちが彼女の支えとなることも出来たのに。

しかし、遅すぎる。もう手遅れだ。歳月が変えてしまつたものを元に戻すのは、容易なことではないだろう。

久留里製造は、設立当初からすでに問題を抱えた会社だつた。

今から十五年前、パイプの継ぎ目などを塞ぐパッキンやガスケットのメーカー数社を、大手商社が音頭をとって統合させようと画策した。独自の技術を持ちながら、それを有効に活用できない中小零細をひとつにまとめ、国内に有力な部品供給源を作り上げようという目論見であった。

話を持ちかけられた各社は、仕事の海外流出に苦しんでいた折りでもあり、この話に乗った。しかしそれぞれの経営者は、新会社における主導権を自分たちが握ろうと争った。計画の頓挫を恐れた大手商社は、総花的な調整をおこなって関係者を納得させた。そのせいで、発足した久留里製造は、従業員三十人の規模でありながら、むやみに資本関係の複雑な、役員ばかり多い会社となってしまった。

派閥争いは、会社発足後も続いた。会議は長く、意思決定は遅い。それでも何かが決まれば良いほうで、たいていは口論に終始し、裏では足をひっぱりあう。

多様な技術の統合も、それを戦略的に生かした経営がされなければ、絵に描いた餅にすぎない。当初は業界にインパクトを与えた久留里製造であったが、基本的な経営方針さえ決められぬまま、ずるずると時代の変化に取り残されていった。産みの親であった大手商社は、絶えることのない内紛に、匙を投げて手を引いた。争いの当事者であった旧経営者たちも、会社の未来を見限って次々と離脱していった。

あとには、巨額の負債と従業員だけが取り残された。

このままいけば倒産する以外なかったところ、久留里の潜在的な技術力を惜しんだメイバンクが、会社の建て直しに助力することとなった。その請負人として送り込まれたのが、川向秀夫だった。

川向は銀行員から実業家に転身し、多数の事業を成功させた後、雇われ経営者としていくつもの落ち目企業を渡り歩き、再建させてきた。統率力のある熱血漢で、すぐれた手腕と人間味あふれる人柄が、しばしばマスコミにも取り上げられた。婿入先である川向家も、これまで政治家や実業家を多数輩出してきた名門で、本家直系の一人娘である妻の喜久子は、各界に顔の知られた有名人だった。

技術はあっても、それを有効に活用する頭脳を持たなかった久留里製造は、川向が力を発揮するには、おあつらえ向きの会社だった。

出身会社がバラバラの従業員たちは、それぞれ小さなグループを作って反目していた。彼らの懐に飛び込んだ川向は、瞬時にその心をつかみとり、またたく間にひとつの技術者集団にまとめあげた。生産体制を再構築して効率化をはかり、生じた余力を動員して、新規の技術開発に取り組んだ。数年後、会社は特許の申請を連発するまでになった。その中には、プレス加工におけるかなり革新的な新技術も含まれていた。

会社の中も、活気にあふれていた。川向を中心に固く団結した社員には、自信と誇りがみなぎっていた。誰もが、久留里製造はこのまま波に乗って、奇跡的な復活をはたすと信じて疑わなかった。

「それなのに……主人はみなさんを裏切って、すべてをぶち壊してしまいました。そのうえ、身勝手に自分から命を絶ってしまうなんて……。本当に、あなたたちにはどうお詫びしてよいのかもわかりません」

夫人は細いうなじをのびしてうなだれた。

福盛には、かける言葉がなかった。上辺だけの気休めを言っても、夫人の慰めにはなら

ないであろう。

川向の裏切りで会社が崩壊したことは、事実なのだから。

それは寝耳に水の出来事だった。久留里製造にとって、新技術の特許は、再生への切り札だった。その特許権が突然、他人の手に譲渡されてしまったのだ。

売り渡したのは、社長の川向自身だった。

相手は、素性も定かでないペーパーカンパニーだった。しかもその金額は、この先特許が生み出すはずの利益から考えれば、話にならないほどの捨て値だった。株主や従業員への説明は一切ないまま、その日以来、川向は会社に姿を見せなくなった。

川向は特別背任で告発された。いったいなぜ、川向が突然このような奇怪な行動をとったのか、誰もが首を傾げた。しかし、その真相が本人の口から語られることはなかった。検察に出頭した川向は、事情聴取を受けた帰り道、駅のホームから身を投げてしまったのである。

久留里製造は消滅した。啞然とするほど、あっけない終焉だった。

「その節は、福盛さんにすっかりご迷惑をかけてしまいましたね」

「いいえ、そのようなことはありませんが」

「ひとつの会社を終わらせる大変さは、わたしもよく承知しております。ましてや久留里は倒産でしたから。その後始末を、すべて福盛さんに押しつける形になってしまつて……」

「さほどのことはありませんでしたよ。一番悪い時に比べれば財務状況もだいぶもちなおしていましたので、債権者にはほとんど迷惑をかけずにすみました」

「従業員の方の再就職の斡旋に奔走してくださいさつたとも聞いています。主人がもたらした混乱の収拾を、すべてあなたにお任せしてしまつたようで、本当に心苦しく思っておりますのよ」

「とんでもない。私としては、社長へのご恩返しのためでございました」

「まあ、そんなふうに言っていただけなんでは……」

福盛の言葉に、夫人はふたたび目を潤ませる。

「ねえ、福盛さん……」夫人は卓の一点を見つめ、思いつめたように言った。「わたくし、今でもわからないんです。なぜ主人が、突然あのような行動をとつたのか。会社のことも、みなさんのことも、あんなに大事にしていましたのに」

歳月が流れても褪せることのない無念に、夫人は薄い唇を噛んだ。

「そうですね……」

福盛は言葉を濁し、湯飲みを口にはこんだ。

夫人の問いは半ば独り言のようもので、福盛の返答を期待したわけではなかった。それでも福盛は、冷たい氷を心臓にあてられたように思わず体を硬くした。

実のところ、福盛には川向の自殺の動機に心当たりがある。

このことは、今まで誰にも打ち明けたことはない。六年間、自分の胸にだけしまつてきたことだ。同志ともいべき久留里の仲間にも、このことだけは秘密にしてきた。

あるいは、夫人はこの秘密を知っているのではないか。それがこの六年間の、福盛の疑問だった。しかし今、その答えがわかった。彼女は何も知らないのだ。だとすれば、福盛もこの場で夫人に話すことはできなかった。

あの時の光景は、いまでも忘れられない。特許売却の一ヶ月前のことだ。福盛は、決算

書類の作成に負われて会社に泊まり込んでいた。応接用のソファで仮眠をとり、目を覚ました翌朝。会社には、まだだれも来ていなかった。ただ、社長室のドアが開きっぱなしになっており、中に川向がいた。

川向の姿は異様だった。社長室には、個人用のちいさな金庫がある。金庫は扉が開いていた。中には何も入っていないようだった。そのからっぽの空間に、川向は何度も頭をつこんでは、髪をかきむしり、机につつぶし、広くもない社長室の中をぐるぐると歩き回ったかと思うと、また金庫をのぞき込む。そういう動作を、いつまでも繰り返していた。福盛は声をかけることもできず、物陰からじつと川向の狂態をながめていた。

その時以来、川向は人が変わってしまった。あらゆることに上の空で、落ち着きがなくなり、仕事を手につかなくなった。彼の身に、何かが起こったことは確かだった。しかし川向は、社員たちには何も話そうとしなかった。

そのひと月後、突如、特許の売却が発表されたのである。

なぜ川向は、従業員の血と汗の結晶を、二束三文でたき売ってしまったのか。福盛には、それが川向の意思であるとはどうしても信じられなかった。

川向は、売却を強要されたのだ。ハッキリ言えば、誰かに脅されていたのだと福盛はにらんでいる。その読みが、あの早朝の狼狽した姿と結びつくのだ。

福盛は川向を心から尊敬していた。しかし、彼にひとつ欠点があるとすれば、自己をオパーに演出する癖があるということだった。社員を集めての訓示はいつも感動的だったが、しゃべっている彼自身、自分の言葉に酔っている節がないではなかった。鷹揚で懐が深いように見え、自分に対する批判には、やや過剰に反応した。

端的に言えば、見栄の強い人物だった。こういった人物ほど、弱みを握られた時の脅迫には弱いのではないか。

讓渡先のペーパーカンパニーは、かの悪名高い投資家、浅茅憲久の息のかかった会社であったという。久留里の特許はその後、玉突きのような不可解な讓渡が繰り返され、最終的には樹脂加工メーカー大手の手に渡り、その会社は外資に買収されている。この過程で、浅茅の手には莫大な利益が転がり込んだと言われていた。

浅茅は目的のためなら手段を選ばない男とされている。相手に要求をのませるために、ゆすりや脅迫といった方法も厭わないと噂に聞く。川向も、これにやられたのではないか。金庫の中には何が入っていたのだろう。誰がそれを盗んだのだろう。

川向秀夫の背任と自殺はおおきなスキャンダルとなり、夫人のもとにはマスコミが殺到した。夫人は自宅にひきこもり、葬儀すらまともにおこなうことができなかった。夫人は心労に倒れ、一時は重篤との噂も流れた。海外で療養しているとも、自殺未遂を繰り返しているともささやかれたが、連絡の遮断された福盛には確かめる術もなかった。

夫人が世間との交わりを絶った時、福盛は仲間と申し合わせ、夫人との接触を自粛した。川向の死は、自分たちにも責任の一端があるように感じられたからだ。

久留里製造に関わらなければ、川向は自殺に追い込まれることはなかったにちがいない。そのようなしるめたさを、福盛の仲間たちは共有していた。川向に裏切られたという怒りは、不思議と湧かなかった。普通であれば、会社を破滅においやった川向を恨むのが、社員たちの自然な感情なのかもしれない。夫人がそう誤解したように。

しかし、福盛らと川向の関係は、そのような水くさいものではなかった。夫人はそのこ

とを理解していなかったのだ。

福盛らもまた、夫人のことを理解していなかった。夫が久留里にかかわったことを、夫人は後悔しているに違いない。彼女には申し訳なくて合わせる顔がない。そのような尻込みが、福盛たちの心に壁を作り、夫人へのコンタクトを躊躇わせていた。

そしてそのまま、六年の歳月が虚しく流れてしまったのである。

福盛たちは、夫人との再会はこのまま果たせぬものとあきらめていた。ところが三週間ほど前、突然、川向の七回忌法要の案内が郵送されてきた。

手紙は夫人の直筆だった。法事といっても、堅苦しいことはしない、晩年の主人と苦樂を共にしてくれた久留里製造の皆様にお集まり戴き、旧交をあたためたいという。自身の体調のことには触れられていなかった。

夫人の回復をうかがわせるその通知に、一同は歓喜した。あいにく福盛は出席できなかったが、帰国後、仲間を集めて夫人の様子を尋ねた。

だが、彼らの表情は、一様に暗かった。

「奥様……」

福盛は重い口を開いた。夫人の元気な姿を確認できたのだ。今日のところは、これでよしとしたい気持ちもある。しかしはやり、仲間から聞いた話をこの目と耳で確かめずにはいられなかった。

「私は毎年、社長の祥月命日にお墓参りをさせていただいておりました」

「そうでしたの。存じませんでした」

「今年も帰国して後、さっそくお参りさせていただこうと思ったのですが、七回忌に出席した連中から、お寺を移されたということを知りました」

「そうなんです。川向本家のすべてのお墓を移しました」

「それはまた、どういうご事情で？」

「ある方々が勧めてくださったのです。夫が亡くなった後、わたくしを今まで支え続けてくださった方々です」

夫人の頬に、にわかに赤みがさした。口調も、すこしだけ早口になった。

「新しいお寺の方へも伺って、お参りさせていただきました。立派な墓石に驚きましたけれども」

立派どころか、川向家の墓石は彫刻だった。しかも、等身大の人間の像が四体も並んでいた。ひとりが天を指さして直立し、ほかの三人がその周りに跪くという、物語の一シーンを切り取ったかのような石像だった。

「あれも、どなたかから勧められたものですか」

「福盛さん、『万象照会』という名前をお聞きになったことはあつて？」

夫人はためらいがちに、福盛の反応をうかがうように切り出した。

「いいえ。存じませんでした。新しいお寺の門柱にも、万象照寺と彫ってあったようですね」

夫人はこっくりうなずいた。

「あのお寺が、本部になつているのです」

福盛は、慎重に言葉を選びながら、

「帰国してすぐに仲間と会つた際、彼らからも、万象照会という名前を聞きました。それ

で、すこし調べてみたのです。比較的、新しい団体のようですね」

「今年で創立十年になります」

「その……多少、かんばしくない噂もあるようですが」

「まあ、それはどのような？」

「そうですね。勧誘が強引とか、いちど入会するとなかなか脱会させてもらえないとか……。まあ、ああいった団体には多かれ少なかれ少なかれあることなのかもしれませんが、週刊誌なども時々記事に取り上げているようで、すこし問題の多い団体なのではないかという印象なのですが」

「それも誤解ですよ。きっとわたしたちを快く思わない人たちが、悪い噂を流しているんです」

夫人は、すこし前のめりになった。身内の不祥事を弁明するような熱っぽさだった。

「奥様は、つまり、そこへ入信されたのですね」

「ええ」

福盛は、絶望的な気分になって瞑目する。できればここで席を立って帰りたいくらい気分だった。

しかし、確かめなければならぬことは、もうひとつある。

「噂と申せば……奥様は最近、財産をいろいろと処分されているとか」

「ええ。不動産とか、証券なんかをね。資産といっても、現金は意外にすくないものですから。百貨店関係の株は今が売り時ということ、あらかた処分するつもりです」

「それはやはり……万象照会に寄付をされるためですか」

「万象照会では、来たる市会議員の補欠選挙に候補者をたてることになりましたの。わたくしも会の一員として、わたくしに出来る応援をしようということ、そのように決めました」

夫人はさらに膝を乗り出した。福盛が感情を表に出さぬよう自制しているので、勇気を得たらしい。どんだん舌もなめらかになっていく。

「まあ、使途はともかくとして、その売却先なのですが、あの浅茅憲久だというのは本当のことですか」

「ええ。向こうから買い取りの申し出がありましたので、そちらに引き取っていただくと思っております」

「やはりそうでしたか。奥様は、それでよろしいのですか」

「……と、おっしゃると？」

「奥様はご存じありませんでしたか。社長が久留里の特許を売り渡した相手は、浅茅憲久なのです」

「ああ、そのことですか。……正直に言えば、多少のわだかまりはあります。でも、もう時間もないので、仕方ないんです」

夫人は目をふせたが、苦悩も葛藤も、言葉ほどではないようだった。むしろそれを悟られまいと顔をふせたようにも見えた。

浅茅が川向を脅迫したか否かはともかく、彼が久留里の特許を利用して巨利を得たことは、夫人も知っているはずだ。そのような男と取引することに、抵抗はないのか。あるいはそのような感情など、信仰の前では薄れてしまうのか。

もしここで、福盛が六年間かかえてきた疑惑をうちあければ、彼女を思いとどまらせることが出来るのだろうか。

しかし、福盛にはできなかった。信仰の自由。財産を処分する自由。どちらも他人が口をはさめることではない。

夫人はすでに、おおきな隔たりの向こう側へわたってしまったのだ。それは夫人の目を見れば明らかだった。

六年前。夫人に恨まれていると感じていたのなら、臆せずその申し開きをするべきだった。じかに言葉をかわしてさえいれば、そのような誤解などはじめから生じなかつたはずだ。

福盛たちも、夫人も、必要のない罪悪感に苦しみつづけ、そして夫人は今や、手の届かぬ場所へ流されてしまった。

たった一本の電話を躊躇したばかりに。

川向夫妻との連帯を、勇気をもって信じ切ることでできなかった自分を、福盛は激しく呪った。

あれほど慎ましやかだった夫人が、教団と選挙の話になると、声をうわずらせ、昂揚している。同時に、福盛りに何かを打ち明けようとし、それを逡巡している様子も見てとれた。仲間の報告に寄れば、七回忌法要の時も、夫人はこのようだったらしい。

やがて夫人は、思い切ったように顔をあげた。福盛ならばという淡い期待が、瞳の奥にこめられているように見えた。

「福盛さん、じつはわたくし、選挙の応援演説をすることになりましたの」

女は少女のように恥じらいながら、膝のうえで暖めていた封筒を卓の上にさしだした。「原稿を書いてみたんです。でも、はじめてのことだし、難しくて……。福盛さんは、大勢の前でお話することになれていらっしやるでしょう？ これを読んで感想を聞かせていただけませんかしら。……できれば、教団支部の方たちもいっしょの席で」

万象照寺での法事の席には、見知らぬ若者がひとりまざっていたという。夫人から紹介を受けた「城西支部の幹部」を名乗るその男は、教団と夫人の強い絆をアピールし、流暢すぎる弁舌で、選挙への支援を要請したそうだ。

名門川向家には、広い人脈が期待できる。夫人自身が、マスコミの顔の知れた有名人でもある。広告塔として教団が期待をかけるのは、当然であろう。

彼女に心を寄せる亡夫の元部下たちは、さしずめ手頃な勧誘のトレーニング相手と目されたのかも知れない。

しかし、彼らの目論見は失敗に終わった。福盛の仲間たちも、「生まれ変わった」夫人の姿にはただ戸惑い、絶望しただけだ。

今後、彼女のもとを訪れる者は、誰もいないだろう。福盛も、この封筒は受け取らないつもりだった。

なぜこんなことになってしまったのか。福盛は、仏壇の遺影にもういちど目を向けた。はじめて、川向の自殺を恨む気持ちが生まれた。

2 糠漬けのゆで卵が輪切りにされたのは、お詫びの食事会のみ【四日前】

うなぎの寝床のような、ホテルの従業員休憩室。

二列の長いテーブルに、丸椅子がならぶ。壁際には、革の破れた三人がけのソファが三つ。反対側の壁は、ネズミ色のロッカーの列。

休憩しているのは、十五人ほどの男たち。ちようど昼飯が終わったところだった。

みんな襟もとをだらしなく緩めている。テーブルにつぶして寝ている者。マグネット式の将棋に興じる者。それを観戦してはやしたてる者。その他は、映りの悪いテレビをかこんで、つまらなそうにタバコをふかしている。

そんな中に一人、たまりから離れ、入り口かくの椅子にぼつんとすわっている男がいた。

年は三十代後半。細面の男前だが、どこか部屋の空気になじんでいない。彼だけ服装のくずしかたが不慣れなのは、新入りで、まだ息を抜く要領がわかっていないため。仲間に溶け込めていないのもそのせいだ。

昼飯も、彼だけはすこし離れた場所で一人で食べていた。年下の先輩が親切にお茶をいれてくれたが、それ以外は、この新入りにやさしく話しかけてくれるような者はいない。彼のほうからも話しかけない。

男は電話をかけていた。声をひそめるような奥ゆかしさはなく、むしろ聞こえよがし、というほどではないにせよ、他の連中の耳をじゅうぶん意識した会話であることは明らかだった。

もしもし、ああ、やっとながつた。

俺、俺、加藤だよ。

おうおう、しばらくだったな。調子はどうだい。

ぜんぜん電話がつながらないじゃないか。まったく、何してんだよ。

へえ、オフィスを引越したのか。五階に移った？ ふーん。そりゃご苦勞様。大変だったな。

いやいや、気にするな。こっちもいろいろ忙しくてさ。折り返してもらっても、今度は俺が出られなかったよ。

そっちは全員、元気でやっているんだろな。

よく言うよ。うるさい上司がいなくなっただけじゃない、の間違いだろう。

そうだなあ。ろくに挨拶もしないで急に辞めちまったからなあ。

取引先もずいぶん驚かせてしまっただろう。そのへんの対応では、お前たちにも迷惑をかけただろうな。

今度、埋め合わせはするよ。いつもの店で、またワイワイやろう。みんなの都合をつけておいてくれ。元課長の奢りだ。

バーカ、遠慮するなって。仲間と騒ぐぐらいの金はあるよ。

俺の机の引き出しに？ ああ、忘れていったかもしれないな。おまえ。使うか？ ほし
いならやるよ。

それもそうだな。じゃあ、取りにいこうかな。でも俺も、けっこう忙しいからな。そうか、じゃあ悪いけど、自宅まで送ってくれ。普通郵便で頼む。日中は誰もいないから。

ところで、何か困ってることはないか。

いや、とりたてて用ってわけじゃないけど、気になってたんだ。きちんと引き継ぎができなかったから、申し訳ないってな。

俺はホラ、狙いをこれと定めると、目標まで一直線で、やり散らかすタイプだろう。資料の整理も雑だし、字も汚いし。お前らも、引き継ぐのに苦労したんじゃないかと思ってるさ。

そういえば、例の見積もり、どうなった？

そりゃあ、気になるよ。俺の置き土産だからな。あの金額をはじきだすのに、俺がどれだけ苦労したか、お前も知ってるだろう。

で、結果は？

嘘だろう？ 本当に？

おかしいな。そんなはずないぞ。ちゃんと俺の名前を出して根回したのかよ。

江原さんは何て言ってたんだ。

会えない？ 会えないって、なんだよ。

転勤？ どこへ？

ふーん、横浜か……。じゃあ、栄転だな。

まあ、あの人はやり手だからなあ。いつまでも支店長でおさまっている人じゃなかったよ。

いや、聞いていなかった。どうして教えてくれなかったのかな。十年のつきあいののに、水くさい。

江原さんの後任は、誰なんだ。

うわっ、よりにもよって、あの石頭か。ありゃあ、ダメだ。

お前、挨拶に行ったのか。それじゃあ、コロンビア大の留学と、何とかいう資格の話を聞かされただろう。あの野郎、二言目にはそれだ。経歴ばかり鼻にかけやがって、業界のことなんか、なんにもわかっちゃいないんだ。

例の見積もりだって、どうせ上っ面の金額しか見ずに蹴っちゃまったんだろっよ。

ツキがなかったなあ。いやいや、あきらめるな、まだ間に合うって。俺のいうとおりにしてみろ。まず横浜へ飛んで、江原さんに会いに行けよ。俺が電話で、話を通しておいてやるから。

え？ どうして？

時間がない？ おい、時間がないってなんだよ。

別の案件？ 例のアレか？

お前、ありやダメだ。いくらしゃかりきになったって、脈はないよ。うちが入り込む余地なんかないって。いや、まあ、会社を辞めた俺が「うち」っていうこともないけど。

嘘だろう。企画が通ったのか。信じられないな。誰が通したんだ。

お前が通したの？ 本当に？

へえ……。

いやあ、そりゃ、たいしたもんだ。大物を当てたなあ。うん、おめでどう。すごいじゃないか。殊勲賞ものだ。次期課長まちがいなし。

そうか。それじゃあ、他のことにかまっている暇はないなあ。本当にお前がやったのか。信じられねえなあ。……いや、そういう意味じゃないけどさ。すごいすごい、本当にたいしたもんだよ。

バカいえ、お前の実力だよ。俺が教えたことなんて関係ないさ。

でも、あれだぞ。お前、安心すると気を抜いて、ボカをやる癖があるからなあ。今後のキャリアを考えれば、ここが大きな分かれ道だ。引き締めていかないとな。絶対にモノにするんだぞ。

え、俺の方が？ 順調、順調。

何を言いやがる。俺のことは知っているだろう。いつまでも、じっとしていられるかよ。たしかに、当初は半年くらい充電しているつもりだったがね。どうも怠けていられない体質なんだろうな。もう始動しているよ。

うん、先週からだ。Tホテル。そう、Tホテルっていうんだ。こっちじゃ、まあまあ名前の知れた、一流ホテルの部類だろうな。

そうだよ。ホテルマンだよ。意外だろう。ちよっとした、ひらめきだったんだ。

俺はほら、大学を出て、すぐに企画に配属されて、この年までずっとそっちの畑だったろう。おかげで、どんな大物相手のハツタリにもビビったりしないが、そのかわり、じかにエンドユーザーと接する機会がなかった。

今後、会社を起こすとなれば、そういうことにも慣れておく必要があるからね。……そりゃそうさ。はじめは何でもひとりやらなきゃならないんだから。

それともお前、会社を辞めて俺と一緒に一旗あげるか？ ……はは、冗談だよ。

とにかく、実地で社会勉強というわけだ。この年で新人からやりなおすのも、新鮮でいいよ。蝶タイの結び方をおぼえたぜ。

いやいや。俺の担当はそっちじゃない。俺の担当は、宴会場なんだよ。パーティとか結婚式とか。

うん。難しいね。気骨が折れるわ。ペーペーの一年生だし、何からなにまで教わらなきゃいけないし。

そりゃ、マーケティングのデータを分析するのはわけが違うよ。数字は文句を言わないが、こっちの相手はそれこそ、お客「様」だからな。

ああ、もう、そりゃあひどいもんだ。ほとんど言いがかりだもの。態度が悪いの、目つきが悪いの、いろんなことを言ってくるよ。真顔でいけば愛想が悪いといわれるし、にこにこしてりゃ真面目にやれと言われるしな。

理由があつてのことじゃないんだ。虫の居所が悪かったり、自分の落ち度をこっちのせいにしてたり、そういうことで怒られるんだよ。どんなに不条理なことをいわれても、こっちから反論できないしな。まったく、ストレスたままるよ。

ただ、面白いことは面白いんだ。どんな仕事でもそうだろうが、業界の裏側は興味深いよ。

看板は一流でも、目に見えないところでは、いろいろあるんだ、これが。

俺も知らなかったんだが、ホテルの収益ってのは、宿泊よりも宴会の方が大きいんだっ

てき。それもそのはずだと思っただよ。料金ばかりバカ高いが、その実、料理や飲み物なんて、本当にひどいもんだ。ジュースも酒も、その辺のコンビニで売ってるのと変わらないようなシロモノを仕入れておいて、請求額は一桁違うんだからな。

ボロい家業だよな。そうだとわかっていたら、俺もホテルで結婚式なんかあげるんじゃないかったね。

一円単位でコストを切り詰めていた俺たちの仕事なんか、いったい何だったんだらうという気になるな。まったく、気楽な商売だよ。俺たちの業界の厳しさを、見せてやりたいと思っただね。

それはそうと、おい、昨日ここで、面白い奴にも会ったぜ。誰だと思っただよ？

教えてやろうか。浅茅憲久だよ。

何いってやがる。本物だよ。本物の浅茅憲久。いやー、驚いたね。あいつ、刑務所から出てきていたんだな。

昔テレビで見たのとは、全然別人みたいだったぜ。意外に背が小さくてよ。昔に比べれば痩せていて、ただ、態度だけは大きかったな。そこはイメージのまんまだった。

ちがうちがう。泊まりにきたんじゃないよ。宴会のゲストで来たんだ。

講演という感じでもなかったから、知り合いに頼まれて短いスピーチってところじゃないのかな。それでも、結構な料金をふんだくるんだらうけどね。有名人はうらやましいよな。

俺が玄関で迎えて、控え室まで案内したんだけどな。

それが野郎、むすつとしゃがんでよ。一時間も遅刻しておいて、ひとことの謝罪もありません。

こつちが何を言っても返事は「ハイハイ」なんだよ。それも「今日はお世話になります」のハイじゃない。「お前の言う台詞なんて、マニュアル通りで全部予測がついてる。さっさと次へ進め」のハイなんだよな。頭から見下していやがるんだ。

エレベーターの中でも無愛想でね。なんとか笑わせてやろうといういろいろ話しかけてみたけど、ぜんぜん無視しやがるんだ。とちゅうで馬鹿馬鹿しくなって、こつちも黙ってやっただよ。

向いてない？ それとこれとは話がちがうよ。いくら仕事だった、そうそうぺこぺこしていられるかって。俺は相手が誰だって、いく時はがつんといくからね。

しかしまあ、あのくらい人を見下していないと、大物にはなれないのかもな。そういう意味では勉強になった。

ようは、ハッタリなのさ。最初にかまして、舐められないように……あ、いや、まあ、それはどうでもいいとして。

それよりも、その宴会自体がちよっと面白い宴会でさ。

主催者は俺と同じ年くらいの女で、会社の経営者らしいんだが、隣に並んだドングリ眼のオッサンと二人で、やってくる客ひとりひとりに、ぺこぺこ謝っていやがるんだ。どうやら会社で何かしらへマをやらかして、そのお詫びの食事会だったようだな。

客たちがまた、みんな不機嫌な顔をしていて、まいったよ。

奴らがどんな目に遭ったのかしらないが、人間ってやつは自分が被害者だと思つて、どうしてああも、エラソーになれるんだらうな。

宴会場の空気も重くってよ。どうやら、連中は浅茅が目当てだったらしいんだな。その浅茅の到着が遅れたもんだから、ただでさえ不愉快だったムードではじまった食事が、どんどん険悪さを増していったよ。

ドングリ眼がテールブルをまわって必死で機嫌をとりむすぼうとするんだが、謝りなれないのか、一言多いのか、逆効果なんだよな。

いやー、アレだな。人間、謝る時は余計なことば言わないで、ひたすら頭を下げているに限るな。

怒って席を立とうとする客を、女社長が半ベソかきながら、どうにかひきとめているんだ。そんな奴らの世話をしなきゃならないこっちは、たまらねえよ。

完全なとばっちりで、皿が汚いの料理がまずいの、さんざん罵られたよ。俺は給仕をしているだけなんだぜ。

あげくのはてには、変なチラシをヒラヒラさせて、話が違うとか、詐欺だとか、どう責任とるんだとか。そんなこと言われても知らないっていうんだよな。

ところがだ。一時間遅れて浅茅が現れた途端、それまでの空気が一変したんだ。浅茅も、はじめからそういう効果を狙っていたのかもしれないな。たっぷりジラして、遅れてやってきて、もったいぶってスピーチに登壇したんだ。そうしたらもう、それまでの空気が嘘のように一変して、爆発するような拍手と黄色い歓声よ。まるで千両役者の登場といった感じでき。

こっちはただただ、呆気にとられたよ。浅茅ってやつは、あれだな。刑務所まで入ったってのに、特定の連中にとっては、まだまだカリスマなんだな。

たぶん、あの男とお近づきになって、やつの仕事に便乗して、おこぼれにあずかりたいと思っているような、欲の皮のつっぱった連中なんだろう。とにかく、奴に声援を送る連中の醜悪さといったらなかつたぜ。

浅茅も、そういう手合いを相手にするのはお手の物なんだろうな。スピーチも、慣れたものだったよ。趣味の料理でやらかした失敗談とか、刑務所の中での苦労話とか、おもしろおかしく話して、笑いをとっていやがった。

いやあ、笑いといったって、うわつつらだけの、おべっかの笑いさ。ご機嫌をとって、いい気分にかけて、なんとかオイシイ話を聞き出せないかと、客の関心はそこにしかないんだから。

何を言っても受けるもんだから、浅茅のやつも有頂天になって、グイェットに成功した話だの、ドレッシングの作り方だの、つまらない話をいつまでもぺらぺら喋っていやがった。

やっこさん、柄にもなく料理が趣味なんだってよ。会場まで案内する時、野郎、『これを出席者にふるまってやってくれ』と言って、自家製ドレッシングの入ったペットボトルと、タッパを、俺に手渡したんだ。タッパの中には、浅茅の特性だというゆで卵がたくさん入っていた。といっても、二十人以上いる客全員に配るほどはなかったから、俺がテキトーに包丁できりわけて、厨房にはドレッシング用にミニサラダを急いで作らせて、それでどうにか配膳したんだ。

そのゆで卵ってのが、色も臭いも奇妙な卵だよ。どこが特性なんだか知らないが、この

味を出すまでに何週間もかかったなんて言いやがってさ。野郎、毎朝こんなものを食っちゃ、悦に入っているんだとき。

案の定、皿を出したとたん、客はカンカンになって怒り出した。このホテルは腐った料理を出すのかと、中には俺の頭をこつく奴までいた。

ところがだ。これは浅茅様の自家製ですと説明すると、態度がコロッと変わりやがって、これはなかなか珍味だとかなんとか抜かしやがる。まったく、全員ぶん殴ってやろうかと思つたよ。

たかがゆで卵だぜ。それを、みんな有り難がつて食っているんだ。金儲けの神様が宿っているかとも思つたのかね。薄くスライスした白身の切れっ端を、にこにこ笑つて、浅茅に媚びるように、うまいうまいと食つていやがる。

腹が立つと言うより、哀れな連中だと思つたね。いや、なんだか宗教じみていて、すこし気持ち悪かつたな。

浅茅の奴、ありやあ、反省なんかしてないな。逮捕されたのだから、運が悪かつただけとうそぶいていやがつた。そのうち、またおなじことをやって刑務所送りになるぜ。

カモなんか、そこいらじゅうにいるんだから。あそこに集まっていた連中がそうだ。世の中、バカだだまされて、悪いやつが儲けるようになっていくんだな。お前も気をつけな。

そうそう、そういえば、客の中ひとり、へんなやつが紛れ込んでいやがつた。みんなは気がつかなかつたようだが、ありやあたぶん、マスコミのやつだと思つた。

瓶底眼鏡の、暗い感じの男でさ。なんだかそわそわと落ち着きがないんで、それとなく注意をはらっていたんだよ。そうしたら、脇に置いた鞆の中に手をつっこんで、そいつを不自然に浅茅の方に向けていやがるんだ。あれ、絶対に隠し撮りだと思つた。

最初は客のひとりがミーハーの気分をやっているんだと思つたんだが、それにしちゃ、しつこく撮つていやがる。……いやいや、警察じゃないよ。それはないだろう。あんなスピーチの写真を撮つたって、何の証拠にもならないよ。浅茅も、二度と逮捕されるようなへまはしないと自信満々だったしな。

たぶん、週刊誌じゃねえかな。匂いでわかるね。「あの浅茅憲久の出所後の動向」ってなことじゃないのかな。

俺は知らん顔をしていたよ。主催者にも黙つてた。忠告してやる義理もないし。そのうち週刊誌に昨日の写真が載るかもしれないよ。俺も写つてたりしてな。もしそうなら、いつか会社を起こした時に、取引先との話のタネになるかもね。

浅茅のやつは、三十分くらいスピーチして、さっさと帰っちゃまった。

ところがよ。奴が会場を出ようとしたとたん、客どもがいつせいに席をたつて、浅茅にむらがつて取り囲んだんだ。サインでもねだるのかと思つたら、みんな自分と連絡先を交換してもらおうとしているんだよ。このチャンスを逃さないで、なんとかあの浅茅憲久とつながりを持ちたいということらしい。

浅茅も内心うんざりだったろう。さすがに愛想笑いも尽きて、顔なんかこわばつてやがったが、押しかける側はもう必死で、もはや浅茅の機嫌なんてどうでもよくなっているのがおかしかつたよ。

たつたひとりだけ、自分の名刺を受け取らせることに成功した奴がいたんだ。こざつぱりしたジジイだった。

そうしたら、今度はそいつに羨望の目が集まって、何だか英雄を見るような目で、みんなその男の顔を見るんだよ。

ばつが悪いとおもったのか、その男、こそそとなくなっちゃったがね。

もっともその名刺だって、浅茅が家に帰ったら屑籠に直行だろうけどな。いや、受け取った直後に、その名刺にじっと見入っていたから、もしかしたら古い知り合いかもしれないけどね。

おい、それはそうと、ひとつ儲け話を教えてやろうか。いいから聞けよ。他じゃ絶対に聞けない話だぞ。

スピーチで、浅茅のやつが、したり顔で喋ってたんだ。この先の半年間くらい、百貨店の株が買いらしいぜ。

とくにMデパートの株が買いたと言っていたよ。ある系列の大口株主が、ここ何ヶ月かのうちに持ち株を処分すんだってさ。それを機に、業界の再編がはじまるんだって。いまのうちに買っておけば、三ヶ月後に一・五倍は堅いと断言していた。

客の連中は、阿呆みたいに口を開けて、有り難がって聞き入ってたぜ。笑わせるじゃないか。あいつら、お人好しいところだな。

投資指南の裏情報なんて、それが本当なら黙って自分が儲ければいいんだから、人に教えてやるはずないじゃないか。なあ。

真に受けて、いそいそと教えられた株を買いあつめたって、要するにカモにされるに決まってる。この話には、どうせもう一枚裏があつて、結局は、あいつ一人が笑うようになっているんだよ。あんなゲスな野郎が、親切心で人に金儲けの方法なんて教えるかっていうの。

もつとも、奴の仕掛けを逆手にとるという方法はあるかもな。短い期間で買いあつめて、上がったところでサッと売り抜けちまえば、一・五倍は無理でも、ちよつとした小遣いかせぎにはなるだろう。

どうだ、お前、一口乗らねえか。今度の大殊勲で、特別手当くらいでもおかしくないだろう。

いやいや、冗談だよ。こつちだって、会社つくる大事な資金で、そんな遊びをしている暇ないからさ。

ま、なんなら課の連中に教えてやれよ。その気があるなら、俺が取りまとめてやるぜ。あの店で集まった時にでも、みんなで相談しようや。

ん？ ああ、そうか。すっかり長話しちゃったな。

いやいや、もう切るよ。こつちも、そろそろ仕事にもどらないと。

頑張れよ、本当に。困ったことがあつたら、いつでも電話してこいよ。遠慮なんか、いらないんだぞ。俺にできる援護射撃は惜しまないからな。

しかし、お前が新しい案件に全力投球ということになると、ちよつと困ったことになるなあ。

いや、俺の置き土産の件だよ。最初の見積もりが蹴られたからって、うっちゃっておくわけにはいかないだろう。

仕方ないな。お前が無理なら、俺の後釜に行かせろよ。名前は何て言ったっけ。……：：：そうそう、そいつだ。ちよつと頼りない感じだったけど、俺から江原さんによく頼んでおい

てやるから。

まいったなあ、あいつには、ノウハウを引き継いでおく時間がなかったからなあ。今は俺も忙しくて時間がとれないし。

でも月曜の夜ならなんとかなるから、即席でレクチャーしてやってもいいよ。

いや、江原さんもあれでなかなかクセのある人だから、首を縦にふらせるにはちょっとコツがいるんだよ。

おいおい。遠慮することはないって。大丈夫だよ。ちゃんと教えてやるから。必要ない？ 必要ないことはないだろう。

お前の手伝い？ そうか、それじゃあかわりに小林をよこせ。あいつなら、俺のやりかたはよくわかってるから。

小林も駄目？ 佐久間も？ 片岡も？ なんだ、みんなお前の手伝いなのか。プロジェクトチーム？ お前が指揮する？

へえ、そうなんだ。ははあ、それでごっそり、五階に引越したというわけか。室長？ お前が？ そんな肩書き、うちの会社にあつたっけ。……そうだろう。十年以上

上いて、俺、聞いたことないもん。そうか。お前のために会社が新しいポストをなあ。凄いいじゃないか。いやいや、俺も指導した先輩として、鼻が高いよ。

でも、なんだか大袈裟だなあ。

いやいや、そんなんじゃないよ。ちょっと心配になっただけだ。要は、旧加藤チームをあげて、この案件にかかりつきりってことだろう。それで本当に、大丈夫なのかねえ。

たしかに、せっかく掛かった大物を逃すわけにはいかないだろうけど、でもどうなのかなあ。小さい契約だって、俺は大事だと思うよ。なんでもいいから取引を継続して関係をつないでおかないと、いざという時のパイプが切れちまうぞ。

もう俺はいないんだし、江原さんがうちの担当を外れたとなればなおさらだ。そのへんのところを、部長はわかってないんだよなあ。

まあ、今回は仕方ないか。

せいぜい頑張れよ。応援しているよ。俺にできることがあったら、なんでも遠慮せずに頼みにこい。こちらら、だてに長いあいだ業界のメシは食ってないからな。抜け道から裏技から、いろいろ伝授してやるよ。

江原さんには、いちおう俺から連絡してみるわ。経緯を説明しておくよ。気を悪くしているともまずいからな。

今度また、うちに遊びに来いよ。遠慮するなって。ひさしぶりに独身貴族にもどって、夜が退屈で仕方がないんだ。

みんなにもよろしく。連中の都合を聞いておいてくれよな。例の店で、ばつと騒ごうぜ。プロジェクト成功の前祝いだ。全部、俺が奢るからさ。……え？ あの店、つぶれちまっ

たのか。

わかった、わかった、長電話、すまなかった。また連絡するよ。

電話が切れると、部屋の中が静かになった。

テレビはすでに消えている。ヘボ将棋も決着がついている。

ひえびえとした静寂。ある者は加藤を見て冷笑を浮かべ、ある者は憐れむような目で彼を見ている。

加藤はこそこそと携帯電話を懐にしまった。何か辱めでも受けたかのような、みじめな顔だった。

そこへ、突然ドアが開いて、男がひとり入ってきた。赤いネクタイに白いブレザー、黒縁眼鏡をかけた、小柄で姿勢よい男。

部屋の空気がいっぺんに引き締まった。みな椅子を蹴って立ち上がり、あたふたと身繕いをはじめた。ちようどいま休憩をおしまいにしようと思っていたところですが、と言わんばかりに。

ひとり取り残された加藤だけが、入ってきた男の横顔をぼんやりと眺めていた。

「ああ、みなさん、そのまま聞いて下さい」黒眼鏡は、加藤を視界の外に置いたまま、従業員たちに言った。「昨日の午後、椿の間の給仕をしたのは、みなさんでしたっけ」

返答はない。

「昨日、午後一時から、椿の間。荻野目コンサル様主催の食事会です。給仕を担当したのは、この班じゃなかったかな」

はやり返答はなかった。みな首をすくめ、探り合うような眼で、たがいの顔を見あっている。

「先ほど、ゲストの浅茅憲久様からクレームを頂戴しました。そのことで、何か心当たりのある方はいませんか」

黒眼鏡はひと呼吸おいて、誰かが何かを言うのを待った。

しかし、沈黙が破られることはなかった。

「そうですか。なるほど」黒眼鏡はあきらめて、先を続けた。「では、誰の落ち度かを問うのはよしにしましょう。クレームは、ふたつあります。ひとつは従業員の『醜悪さ』について、だそうです。浅茅様がおっしゃるには、到着された浅茅様を会場までご案内した者が、エレベーターの中で自分の名刺を無理やり押しつけようとしたということなんですが」

一同は驚き、つい反射的に加藤の方を見てしまった。それはすなわち、案内役が誰であったかを暗に指し示す行為だった。

加藤は首まで赤くなった。

しかし黒眼鏡は前を向いたまま、

「驚きました。私も長くこの仕事をしていますが、お客様から『醜悪』などというお言葉を頂戴したのは、はじめてです。それだけ、下品な魂胆を見透かされていたということでしょう。言い訳のしようもありませんでしたので、素直にお詫び申し上げておきましたけれども」

黒眼鏡の口調は淡々としていた。滑舌は良いのだが、原稿を下読みしているかのような一本調子で、体温をまったく感じさせない。

「クレームのふたつ目は、従業員の『頭の悪さ』についてだそうです。この中に、浅茅様が持参された特性の糠漬けゆで卵を受け取って、配膳した方がいますね。その包丁の入れ

方が、呆れるほど無神経で、頭が悪いと言っています」

加藤は目をまるくした。名刺の事は覚悟していたものの、この件でクレームがつけられるとは、思ってもいなかったらしい。

「たかが卵の切り方で、と、私もはじめはそう思いました。ところが聞いてみると、なるほど先方が腹をたてるのも無理はない。卵は八つあったそうです。しかしお客様は、二十三名様いらっしやった。こんな時はどうするべきか。決まっています。卵を三等分する。そうすれば、すべてのお客様に均等にいきわたる。こんなことは、まあ、小学校の算数の問題です。当然、卵は縦に切ることになりません。どのピースにも必ず黄身がふくまれるように、です。しかしその者は、ゆで卵を乱雑にスライスし、数も形もばらばらのまま配膳したというのです。あるお客様には白身の切れ端だけが配膳されました。浅茅様は演台から、その光景をご覧になっていたそうです。せっかくの心づくしが台無しにされたわけですから、まあ、お怒りになって当然でしょう」

これがどういう事かわかりますかと、黒眼鏡は一同を見渡した。

「浅茅様はもちろん、荻野目コンサル様も、二度とうちのホテルを利用してくださることはないでしょう。我々は大切なお客様と、将来の売り上げを失いました。たかがゆで卵の切り方によって、です。ホテル業とはそういうものです。みなさんも、そのところを肝に銘じて仕事をしてください。お願いしますよ」

黒眼鏡はきびすを返し、部屋を出て行こうとした。しかしどうしても言い足りないことがあるらしく、ドアの前で足を止め、振り返った。

「ホテルがその辺のコンビニと同じジュースを高額で提供しているのは、私たちがそこに、別の価値を付加しているからです。我々の言葉遣い、気遣い、身だしなみ、笑顔、卵の切り方、それらすべてが総合的なサービス料となって、金額に乗るわけです。そこが腑に落ちないという方には、この仕事はつとまりません。悪いことは言いませんから、前の仕事におもどりなさい。まあ、戻れば、の話ですけど」

黒眼鏡はどうとう、一度も加藤を見ずに退室して行った。入ってくるときも出ていくときも、彼は足音をまったくたてなかった。

休憩室は再び、静寂に包まれた。誰かがぶるぶると身震いをした。たしかに、先ほどより室温が一、二度下がったように感じられた。

加藤を冷笑する者は、もういなくなっていた。むしろ痛ましそうに、加藤の方へ視線をむけないようにしている。

反対に、加藤は苦笑していた。文字通り、苦しい笑いだった。誰にむけた何の笑いかは、本人にもわからない。

「そろそろ行くか」

誰かが言った。それを潮に、ガタガタと椅子を片付ける音がひびいた。

彼らはぞろぞろと、加藤を避けるように部屋を出て行った。この休憩時間でかえって疲労が増したかのように、どの足取りも重かった。

一人取り残された加藤は、うつろな目で懐から携帯電話を取りだし、しばらく眺めてふたたび胸におさめ、また取り出した。

無人になった休憩室で、彼はいつまでもその動作を繰り返していた。

7 七回忌法事の出席者は、久留里製造の社歌が歌える【三十五日前】

深夜一時の喫茶店。

店内は広く、照明は明るく、BGMは大きめ。観光地の提灯や、下手くそな絵画、とりはずした船の舵など、統一感のないインテリアが落ち着かない。

夜中だというのに、店内は混雑している。観葉植物のかげのボックス席に、むかいあつて座る女が二人。

ひとりは五十代。ふくよかな顔と体型。髪をひつつめにして、フレームの細い眼鏡をかけている。学校の先生のような風貌だが、着ている服やアクセサリーは派手だった。

もうひとりは四十代後半。むかいの女とは対称的に、貧弱な体つきで、いでたちも地味。どこにでもいる近所の主婦といった感じで、態度がおどおどしているのは、深夜の外出になれぬせい、向いの女に気圧されているせい。

それでも、思いつめた瞳の色には、重大な決意が込められていた。

「わかるわよ、あなたの気持ち」太った女は、何本目かわからないタバコに火をつけながら言った。「恵子ちゃんがそう考えるのも、無理はないと思う。わたしでも、同じことを考えたと思うわ」

思いがけない同意をもらって、恵子と呼ばれた女の表情がすこし明るくなった。

「自分を責めちゃダメよ。何があっても、わたしはあなたの味方なんだから。それは、わかってくれているわね？」

「はい」

「あなた、何年目？」

「あの、まだ一年たっていませんけど」

「そうだったけ？ どういうツテだったかしら？」

「平井さんの奥さんに、紹介していただきました」

「ああ、そうそう。たしか息子さん同士がクラスメイトだったのよね」

「はい」

「あなたの息子さんはお元気？ 克也君だったけ あいかわらずなの？」

「ええ……」

太った女はころころ笑いながら、クリームソーダをひとくち啜った。

「あなた、ええ、じゃ分からないわ。何がどうあいかわらずなのか、教えてくれなきゃ」

「すみません。おかげさまで、元気にしています。ただ、学校へはまだ……」

「自分の部屋に、ひきこもっているわけね」

「はい」

「学校へ行かなくなつて、どのくらいたつたの？」

「十ヶ月くらいです」

「相談所みたいなどころへは行っているの？」

「いいえ、それは……」

「あら、どうして行かないの？」

「玉置さんが、いいカウンセラーを紹介してくださるということでしたので……」

「もちろん、そのつもりよ。いやあねえ、恵子ちゃん。忘れてなんかないわ」

玉置と呼ばれた女はあわてた様子も見せず、

「言っただでしょう、支部長の弟さんが教育評論家をしていて、家庭内暴力とか、不登校とか、そういった問題の、いわば専門家なの。ただ、忙しい人なのよ。海外に行ったり、テレビに出たりしている人だから。なかなか時間の都合がつかないの。でも大丈夫。近いうちにかならず、わたしが引き合わせてあげる」

早口にまくしたてると、緑色の液体に浮いているアイスクリームをスプーンですくい、ぱくりとひと飲みにした。

それから玉置は、世間話をはじめた。大半は、共通の知人の悪口だった。恵子の同意をもとめるわけでもなく、一方的に垂れ流される言葉の洪水に、恵子じっと辛抱している。

玉置が次のたばこに火をつけるタイミングをみて、恵子はようやく切り出した。

「あの……さっき申し上げた件なんですけれど」

「さっきのって？」

「会を辞めさせていただきたいという件です」

「わかっているわよ。あなた、急かしちゃダメよ。慈善活動の方も、そうやって焦ってばかりいるから結果がでないんじゃない？」

玉置は店の奥にむかって、すみませんと店員を呼んだ。

「クリームソーダをおかわり。それからナポリタンをちょうだい。……恵子ちゃんも、何か食べたなら？」

「いえ、わたしは結構です。早く帰らないと……」

「何をいつてるの。これから大事な話をしようとしているのに。ご主人だって、もう寝てるんでしよう。お腹が空いてると、いい考えも浮かばないわよ。……すみません。ナポリタンは二つにしてちょうだい」

店員が奥にもどると、玉置はようやくテーブルのうえのファイルを手にとり、ばらばらとめくった。

「ええと、木村恵子さん……木村恵子さん……。あった。平井さんの紹介で、半年前の入会ね。……うーん、記録によると、あんまり成績がよくないのね。ノルマの一割も達成できていないじゃない」

「すみません」

「やっぱり、活動に身が入らないのかしら。わかるわよ。私生活で悩み事があると、どうしてもね」

玉置は眼鏡を額にはねあげて、ファイルの数字に目を凝らす。

「半年間で、新規勧誘がゼロ人。これは仕方がないとしても、売り上げが三千五百円というのは、いかにも少ないわね。奉仕活動の積極性が薄いと評価されてもしかたないわ」

「すみません」

「やっぱり、あなたは外見が地味だから。もっと無理にでも笑って明るくならないと、誰も話なんて聞いてくれないわよ」

「わたし、人と話すのが苦手なんです。お友達もすくないし」

「友達が少なくても、お友達のお友達がいるでしょう。誰だって、そんなにおおぜい友達なんていないわよ、女子学生じゃないんだから。活動を通じて、交友関係の輪をひろげていくことが大切なんじゃないの。あなたみたいにはじめから萎縮していたら、いい結果な

んで出ないわ。もっと図々しくいかないと。成績のいい人は、みんなそうしているよ」
「すみません」

「お友達がダメなら、親戚の方は？」

恵子が首を振ると、玉置はすこしいら立った声で、

「だから、どうダメなのか言いなさいよ」

「すみません……。一度だけ、新潟の叔母がハンカチのセットを買ってくれました。でも、それ以降は電話をしてもすぐに切られてしまっ……」

「ご主人の同僚とか、ご主人のお友達にはアタックしてみた？」

「そちらは、ちょっと、難しいです」

「あら、どうして？」

「主人ははじめから、会のことには反対なので……」

「何も馬鹿正直に、ご主人を通すことはないのよ。ご主人のお友達だって、いちど知り合っ……てしまえば、もうあなたのお友達じゃないの。自分のお友達を救済するのに、ご主人の許しをもらう必要はないでしょう」

玉置のきびしい叱責に、恵子は肩をすぼめた。

すると玉置は、一転して声を明るくし、

「でも、売り上げだけがすべてじゃありませんからね。恵子ちゃんの場合、イベントのお手伝いに、ずいぶん熱心に参加しているのね。ここは高ポイントよ」

「わたしには、そのくらいしか出来ないの……」

「ふふふ、謙遜しなくてもいいのよ。たしかに、売り上げのお金を何十万とおさめて、それで得意になっている会員さんもいるわ。うちの支部に、あるお金持ちの会員さんがいてね。有名な資産家の家系の方で、ご主人もスゴ腕の会社経営者として有名だった人。長年口説いて、最近ようやく正式に入会したの。ところがこの人、たしかにお布施の額は桁違いなんだけど、それ以外のことはさっぱりなのよ。とっても顔がひろいはずなのに新規勧誘はゼロだし。そこへ行くとおあなたは、地位やお金なんかなくたって、体ひとつで懸命に貢献してくださっているわ。こういう、まさに身をささげる貢献こそ、わたしたちの中では高く評価されるのよ。恵子ちゃん、これなら、もっと胸を張っていいわよ。わたしが太鼓判を押すわ」

と、今度はおおげさに褒めちぎる。上げたり下げたり、変幻自在の話術であった。

しかし、今日の恵子は揺るがない。

「でもやっぱり、これ以上お役にたてません」

「大丈夫よ。はじめのうちは、みんなそう思うんだって」

「わたしには、無理です。ましてや、今度は選挙のお手伝いだなんて……」

「あんなの簡単よ。リストの上から電話をかけて、決まった文句を言っていれば、それでいいんだから。それとも恵子ちゃんには、ポスティングの方が向いているのかしら」

と言うと、玉置は思わせぶりに恵子に額をよせ、小声でささやいた。

「ここだけの話だけど、今回の選挙を本気で応援している人間なんて、会にはひとりもないのよ。上の命令でやらされているだけ。本当は当選しようが落選しようが、どっちだっていいの。むしろ今後のことを考えたら、落ちてくれたほうがいくらい。みんな、そういう気持ちで手伝っているんだから、あなたも気楽にやってくれていいのよ。……ちょ

つと、そんな変な顔しちゃいやよ。恵子ちゃんだから、こんなことを言ったんだからね。ほかの人に、わたしがこんなこと言っただけなんてバラしちゃダメだからね」

玉置は恵子の肩をかるく叩いて、女子高生のようににはしゃいだ声で笑った。「とにかく、あの」このままでは埒があかない。恵子はついに意を決し、「今までいろいろやって来て、ちよつと、わたしには難しいということがありましたので。パートも両立できませんし、体もきついので、やっぱり、今度こそ、退会させていただきたいと思えます」

と、せいっぱいの勇気で言い切った。

それからあとも、玉置は硬軟とりまぜて説得をこころみた。しかし恵子はうつむいたまま、石のように固まって、もう耳を貸さなかった。

玉置は、処置なしといったように、フーツと鼻から息を吐いた。

「そう。仕方ないわね。お話はわかりました」

「本当ですか？」恵子はほっと安堵の息をつき、ようやく顔をあげた。「ありがとうございます。会費のほうは、支払いのすんでいる分は返していただくなくて結構です」

「あわてないで。こんな大事なことで、わたしひとりで決めるわけにはいかないの。とくにかく、恵子ちゃんの希望はわたしの方で預からせていただくわ。悪いようにはしないから。今日のところは、それでいいでしょう」

「でも、辞めさせていただけるとはいいですか？ 会を辞めるか辞めないかは、わたしが自分の意思で決めていいことですよ」

「もちろんよ」玉置は根負けしたように、眉を垂れ下げた。「とにかくあなたのことは、支部に報告しておくから」

「わたしとしては、とにかく退会させていただければ、それで結構ですから」

恵子は最後にもういちど念を押した。

店員がナポリタンを運んできた。湯気のたつ山盛りのスパゲティは、深夜に食べるには多すぎるボリュームだった。

「ああ、やつときたわ。とにかく、これを食べて元気を出しましょうよ。ね、恵子さん、わたしがおごるから」

「でも、わたし、もう帰らないと。息子も心配しますよ」

「させておきなさいよ。自分だってさんざん、あなたに心配かけているんだから。わたしだって、二人前も食べられないわ。食べ物を粗末にしちゃダメでしょう」

恵子はやむをえず、フォークを手を取った。

しかし当の玉置は一口も手をつけぬうちに、

「ごめんなさい、ちよつとトイレに行ってくるわね」

と言って席を立った。

後ろ姿を目で追うと、玉置の向かった先はトイレではなく、店の外だった。恵子は首をのびして表の様子をうかがった。ドアのガラス越しに見える玉置は、どうやらどこかに電話をかけているらしい。

恵子の表情に、不安の影がさした。

電話は三分ほどで終わり、玉置は何食わぬ顔で店内にもどってきた。あとは黙々と、スパゲティを食べている。この沈黙が恵子には、なにやら恐ろしく感じられた。

十分ほどして、一人の男が店に入ってきた。

俳優かモデルのような、さわやかな風貌。背広の前のボタンを外し、赤いネクタイをひらひらさせている。年は三十代か、あるいはもっと若いかもしれない。

急いできたのか、男は肩で息をしながら、背伸びをして店内を見回す。玉置と目があうと軽く手をあげた。

玉置も「こっちです、こっち」とおおきく手を振る。

「木村さん」玉置は呼び方をあらためた。「紹介するわね。うちの支部で支部長のお手伝いをしている、中島さんよ」

中島は白い歯を見せてにっこり微笑んだ。

「ちょうど事務所から帰るところだったんだ。いいタイミングだったよ。あわてて来たんで、喉が渇いちゃったな」

「木村さん、もうちょっと奥に入ってあげてよ。中島さんが座れないじゃない」

「失礼しますよ」

恵子の返事もまたず、中島は彼女の隣に腰をおろして壁際においやった。

店員にアイスコーヒーを注文すると、中島はさらに長い脚を組んだ。これで恵子は、逃げ道を塞がれる格好となった。

「ええと、木村恵子さんですね。夜おそくまで、ご苦労様です」

中島は玉置からファイルを受け取り、素早く目を通した。内容を読み取りながら、頭の半分では別のことを算段しているように見えた。さまざまな経験のストックから、この場合に適切な対処法をチョイスしているのかもしれない。

「実はね、木村さん……」

やがて方針が定まったのか、中島はファイルを閉じた。顔つきが急に険しくなっている。「実はいま、電話で玉置を叱りつけたところなんですよ」

その言葉を合図に、玉置は悄然とうなだれた。あうんの呼吸だった。

「木村さんのことは、幹部会でも話題にのぼったことがあるんですよ。お仕事でもご家庭でも大変な中、とても貢献してくださっている方がいると。僕も支部長代理として鼻が高かった。そういった会員さんの力によってうちの会は成り立っているのだと、先生もおおきに感謝しているんです」

「そんな。とんでもない……」

「ノルマなんて、気にすることはないんですよ。だいたい、ノルマという言葉を使うことは、うちの支部では禁止してあるはずなんです。……玉置さん、これはいったい、どういうことですか。あなたの指導が行き届いていないんじゃないやありませんか」

玉置は、それまでのふてぶてしい態度から一変、今にも消えてしまいたいそうなしおらしきで、年下の男の叱責を受けている。

「そもそも、こんなファイルの存在自体が、僕は気に入りません。記録は出納帳だけでいいんです。こんな個人の成績をつけるような記録は、すぐにやめてください。いいですね」

「わかりました。すぐに破棄します」

「本当に、わかっているのかなあ。玉置さんはいつも、返事が軽いんだよなあ」

「そりゃあ、組織の維持のために、お金が必要なことは確かです。純粋な信仰と、世俗的

な金という矛盾は、容易に解決することのできない永遠の問題です。だからこそ、我々は常にその点の自己点検を怠ってはいけません。会員さんは、わたしたちが願いますれば、たいいていのことは努力してくれるものです。ですが、会員さんは我々の道具ではない。我々こそが、会員さんの道具なんです。そこを取り違えて、まるで会員さんにお金集めの義務を負わせるかのようなやり方は、たとえ玉置さんであっても、看過できません」

「申し訳ありません。いけないことだとは思っていたのですが、どうしてもまだ、金額が足りなくて……」

玉置が言葉の端に無念さをにじませると、それまで小言調だった中島の態度が、急にやわらいだ。

「金額って……。ひよっとして、宮内さんの娘さんの治療費のことですか？」

「じつは、そうなんです」

「そうか。玉置さんはまだ、あの可哀想な母子の面倒をみていたんですね」

中島は湿っぽい声で言った。

「すみません。わたし、どうしても見捨てられなくて」

「で、具合はどうなんですか」

「やはり、手術しかないそうなんです。でも、国内では受けられない手術で、それにはお金が」

「どのくらい、足りないんですか」

「あと、半分くらい。わたしとお付き合ひのある会員さんは全員協力してくれたんですけど、それでもおいつかなくて」

「そういうあなたも、ずいぶん持ち出したんでしょう。まったく玉置さんは、自分のかかわった会員さんのこととなると、平気で自分を犠牲にしてしまう人だからなあ……」中島は恵子の方へ顔をよせ、耳の中にむりやり声を注ぎ込んだ。「もつとも、だからこそこれだけ会員さんの人望を集めているんでしょうけどね」

「そんな。とんでもないです。わたしはただ、万象照会で教えていただいたことを実践しているだけですから」

「うーん、しかしそうになると、困ったなあ。問題は、こういったことについて先生はとくに厳しい考えでいらっしやるということなんです。報告すれば、玉置さんに何らかの処分が下ることは避けられません」

「覚悟しています」

「いや、それではうちの支部の会員さんが悲しむでしょう。それこそ、宮内さんの娘さんだって……」

中島は腕を組み、眉間にしわをよせて小首をかしげた。

「とにかく、どうしてこうなってしまったのか、誰がはじめたことなのか、経緯を調べて報告してください。あわせて再発防止策も報告してください。期限は三日後。そこさえきちんとしていけば、今回のことは、僕の胸の中におさめておきます。わかりましたか」

「わかりました」

「あとは、木村さんが許して下さるかどうか、ですが……」

中島は、恵子のほうへ向き直った。

「木村さん、本当に申し訳ありませんでした。僕からお詫びします」

「恵子ちゃん、ごめんなさいね」

「事情は今お話しした通りです。どうか玉置のしたことを許してやっていただけないうかが」

二人は店中にひびく大声で謝罪し、深々と頭を下げる。

客の視線が、いつせいにこちらに向いた。事情のわからない者の目に、この光景はどう映るだろうか。恵子は狼狽した。

「いいえ、あの、手をあげてください。玉置さんは悪くないんです。そんなに叱らないであげてください……」

「それじゃあ、許してくださるということでいいんですね。認めてくださるということで、いいんですね」

「許すも許さないも……」

「ありがとう。恵子ちゃん、あなた、やさしいのね」

玉置は眼鏡をはずし、ハンカチを両目に押し当てた。

「よし！」これで話をついた、とでもいうように、中島はいきおいよく自分の両腿を手でたたいた。「わかりました。木村さんも、認めてくださったことだし。今回は、僕は何も見なかったことにします。また明日から、気持ちを切り替えてがんばりましょう！」

中島はアイスコーヒーのグラスを持ち上げた。玉置も、クリームソーダを手にとった。仕方なしに恵子も水の入ったコップを上にかかげ、これからの健闘を誓っての乾杯をさせられてしまった。

中島は、ファイルを玉置に手わたした。玉置は、受け取ったファイルを大事そうにバッグの中にもどした。

恵子の胸を不安がよぎる。自分が何を認めたことになったのか、恵子にはわからなかった。

「あの……」

「さて、次は木村さんご自身のことなんですが……」

機先を制するように、中島のほうから話を向ける。

「玉置から聞いています。なんでもお子さんがイジメにあって、不登校だとか。大変だなあ」

「部屋に閉じこもって、口をきいてくれないんですって」

玉置が、慣れた呼吸で相の手をいれる。

「中学生というと、十四歳？ 十三歳？」

「十三歳です」恵子は細い声で答えた。「いま、二年生なんですけど……」

「それじゃあ、来年は受験だ。何もかも僕の時といっしょだなあ。とても他人事とは思えないや」

「そーいえば、中島さんもイジメられっこだったそうですね。意外だわ」

「体が小さかったからね。家も貧乏だったし」

「恵子ちゃんのご主人は、このことにあまり関心をもってくれないんですって。再婚で、血のつながっていない父親なんですよ。この再婚自体に、息子さんも反発しているんですよ。そのことが、思春期と、イジメと重なって、引きこもってしまったんじゃないかしら。このあいだなんか、なんとか話をしようドアをノックし続けたら、うるせえクソバ

バアって言われたんでしよう？ それまではお勉強もできて、とつてもお行儀のいい息子さんだったということだけど、心配よねえ」

「そうですか。本当になにからなにまで、僕といっしょだ」

中島はしんみりと声を落としました。

「中島さんは、どうやってイジメを克服したんですか？ 恵子ちゃんも知りたいわよねえ。参考になるかもしれないじゃない」

「やっぱり、一人じゃ無理なんだなあ。かといって、教師はあてにならないし。やっぱり、親の存在は大きいんですよ。ただ、うちの親も共稼ぎで、毎日へとへとになって帰ってくる。僕のことなんか、かまっている余裕はない。そんな両親を支えてくれたのが、万象照会の方々だったんだけどね」

玉置は、うんうんと、熱心に頷いている。

「教義に感銘を受けた両親は、忙しい合間をぬって奉仕活動をはじめた。僕も手伝わされたんだ。そうしているうちに、いつの間にかイジメはやみましたよ。それどころか、その時に僕をいじめていた連中とは、いまでも親友なんです。じつはその連中の一人は、玉置さんも知っている人なんだな。誰だと思う？」

「えーっ、わたしも会ったことのある人なんですか？」

「本部で総務をやっている、田中さんだよ。じつは僕たち同級生なんだ」

「キヤーツ、本当ですかあ」

玉置は容姿ににあわない黄色い声を上げた。まるで何度もリハーサルを重ねていたかのような、見事な合いの手ぶり。

中島はふたたび恵子にむきなおり、

「経験から言わせていただければ、子供さんが苦しい時に、やはり、親御さんが動揺してはいけませんね。お子さんの未来を考えるなら、まず母親のあなたが心平らでなければいけません。そのためには、万象照会の活動なんか、じつはうってつけなんですよ。さつき話した宮内さんという奥さんも、病気の娘さんを抱えながら、時間の許すかぎり奉仕活動に貢献してくれています。そうすることで心の平穏が得られるし、活動を通じて知り合った人が彼女の苦境を知って、支援の輪に加わったりしてくれるんですね」

親身に相談にのっているようにいながら、中島は時折、息のかかりそうな距離で恵子の顔をのぞきこんだ。恵子に相づちを迫っているのだった。

恵子はこくりとうなずかざるを得なかった。

「木村さんだから、正直な話をしてしまいますがね。新興宗教の団体というのは、それだけで世間からおかしな目で見られる。つらいものです。最初はね。でも、うちはそういった連中とは違います。提供している物だって、怪しげな壺だの仏像なんかじゃない。ハンカチや、アクセサリーや、地味だけど、実用性のあるものです。それとも恵子さんは、我々がインチキ商品売りつけていると思いますか？」

「いいえ。そんなことは……」

「そうですね。会員さんは、何ひとつやましい気持ちを持つ必要はないんです。恵子さんも、そう思うでしょう」

「……はい」

「会員さんはセールスマンじゃないんだから、言葉たくみに売りつけるなんてことはでき

ないし、できなくて当たり前です。そんなことは、ちっとも気に病む必要はないんですよ。わかっていただけますよね」

「……はい」

「やっぱり恵子さんは、理解が早いや。とはいえ、物を売る仕事には変わりがありませんからね、やはりコツのようなものはあるんです。……そうだ。今度、成績がふるわない会員さんを対象にした講習会があるんですよ。これから日程を組むんですが、何日がいいのかな。うちは普通の主婦の方がおおいから、やはり平日のほうが集まりやすいのかな。恵子さん、どう思いますか」

「恵子ちゃん、どうなの？」恵子が返答に迷っていると、玉置がぴしやりとテーブルを叩いた。いつの間にか、中島が現れる前の厚かましきがもどっている。「あなたねえ、中島さんほどの方がわざわざ会いに来てくだって、こんなに親身にお話をしてくださっているのに、あんまり失礼な態度をとっていると、わたしも怒るわよ」

「まあまあ、そう感情的にならずに」中島は玉置を軽くなだめて、「……で、どう思いますか、恵子さんは？ 恵子さんも、訊かれたことにはちゃんと答えてくれないと、困りますね」

「はい、あの、そういうことでしたら、主婦といっても働いている方も多いので、やはり週末のほうが」

「なるほど、それもそうだね。でも、今度の土日はそれこそ選挙戦もたけなわの真っ最中だから、よく考えたら難しいな。やっぱり、平日がいいでしょう。じゃ、明日の火曜日に決めよう。午前十時に迎えるのをやりますので、事務所まで来てください。勤めは休んだほうがいいですね。有給休暇の一日くらい、残っているでしょう。K駅の北口です。大丈夫ですよ、簡単な作業です。担当エリアを決めて、ポスティングするだけですから。それならいいですね」

中島がまた、恵子の顔をのぞきこんだ。

恵子はうなずいていた。まるで意思を奪われた人形のようにだった。

中島と玉置は、アイコンタクトを交わした。これで一件落着、といったところだった。中島はソファから立ち上がり、恵子に道を空けてやった。

「それじゃあ、今日は遅くまでご苦労様でした。もう結構ですよ。気をつけて帰ってくださいね。僕たちは、このあとすこし打ち合わせがあるから」

「……わかりました」

恵子は魂を抜かれた幽霊のように立ち上がる。

壁や椅子につかまりながら、よろよると出入口にむかった。今日は何のためか、この店に玉置を呼び出したのだったか。そのことはもう、いったん脇をおいておこう。とにかくは、早く家に帰りたい。ひどく疲れてしまった。頭も体も……。

恵子が出ていくと、中島はネクタイをゆるめ、靴を脱いでソファのうえに胡座をかいた。玉置もやれやれといった顔で、犬のように襟足を搔いている。

「これ、片付けちゃおう」

中島は恵子の食べ残したナポリタンにフォークを刺し、ずるずると音をたてて食べ始めた。玉置も、それにならった。彼らはもう、恵子のことなど忘れていく。

「川向の奥さんの方は、いかがですか」

口のまわりをケチャップで汚しながら、玉置が尋ねた。

「今度、演説をさせてみることにしたよ。いま練習させているんだけど、自分の名前を連呼する変な癖があつて、なかなか直らない。不器用なんだよなあ。ガツカリだよ」

「彼女の人脈が広がらなかったのは、惜しかったですね」
すると中島は、渋い顔になって、

「七回忌の法事を本部の寺でやったのが、まずかった。あれで一気に、参列者から警戒されてしまった。チクショー、しくじったなあ」

「中島さんでも、そういうことがあるんですね」

「集まった連中が妙に和気藹々としていて、僕ひとり、変なふうが目立ちちゃってね。また、あのおっとりした奥さんが、僕のことをきちんと紹介してくれないんだ。おかげでまともに選挙の話につなげられなかった」

そのときの事がほど屈辱的だったらしく、中島はぎりぎりと歯を噛んだ。

「連中も、最初は迷い犬を見るような目でこっちを見て敬遠していたが、酒が入ってくるにつれて遠慮がなくなつて、奥さんを変な宗教に誘い込む悪魔だと罵声をあげせられたよ。部屋のみで悔し泣きしている奴もいた。怒り出したやつからは胸ぐらをつかまれた。これにはさすがに奥さんも止めにはいつてくれたが、冗談じゃないよ。あげくの果てには全員で変な合唱をはじめやがって。まったく、あの連中のほうがよっぽどカルト集団だっていうんだよな」

「『お布施』の方はどうなんですか？」

中島は指でOKサインを作ってみせた。

「そっちは大丈夫。相手は僕らが想像もつかない金持ちだ。まだまだ引っ張れる」

「支部長が、ちょっと怪しみだしているみたいなんですけど」

「そうだなあ、玉置さんの口座を経由するやり方は、そろそろ変えないとまずいかもしいない。でも大丈夫。何か方法を考えて、もうしばらくは……」

そう言いかけたところで、スバゲティにかじりつこうとした中島の顎がピタリと止まった。視線は、入り口の方を見ている。

「……どうかしました？」

玉置も入口の方を振り返った。

そこにはひとりの少年が立っていた。

ジャージの上下を着て、髪の毛がボサボサにのびした、顔色の悪い少年だった。華奢な体でせいっぱい仁王立ちしているその後ろには、恵子が隠れている。

少年は、中島と玉置を指さして、何かを叫んだ。興奮でうわづった声は、啖呵をきるには幼すぎた。中身は半分も聞き取れなかったが、それでも、店内の客たちに十分意味は伝わった。

すべての視線が、中島と玉置に集まった。そのどれもが、強烈な非難の眼差しだった。中にははつきり、怒りをたたえている目もあった。

二人は赤面した顔をふせ、そのまま上げられなくなってしまった。
恵子は息子の背中で、嗚咽をこらえている。

4 ミスプリントが配布されたのは区駅の南口【二十八日前】

区駅ゆいいつの改札を抜けると、右が北口、左が南口。南口から外へ出ると、高架線のガード沿いに、商店街が続いている。狭くてごみごみした、いわゆるシャッター商店街。頭上には「すずらん通り」と書かれた古いアーチ。

時刻は昼前。

看板の字が薄くかすれ、もう何の店だったかわからなくなってきているシャッターの前に、軽トラックが一台駐車している。その陰に隠れるように立っている、一組の男女。

女の方は二十代後半。目鼻の造作がおおきく、生き生きと活発な身のこなしをしている。リクルートスーツを着ているが、衣装ほどのフレッシュキはない。肌には張りがなく、年齢以上に老けて見える。ただ、眼だけは異常なほど輝いていた。

男の方は、だらしないネルシャツにジーンズ姿。体中からアクセサリをちらちらら下げているが、軽薄な装いがぜんぜん板についていない。女とは反対に、真面目な青年が、無理して軽薄ぶっているという様子だった。

「これが最後です」

青年は、放置自転車の籠からチラシの束を取り出した。

女は鼻歌まじりに腕時計を見る。

「予想より、早く終わるわね」

「そうですね」

「わたしの言うとおりにしてよかったですよ」

「どうですかね」

青年の鈍い反応に、女は顔色を曇らせた。

「なによ、その元氣のない返事」

「先輩が元氣すぎるんですよ。たかがチラシ配りで、そんなに張り切りなくてもいいんじゃないかなあ」

「わたしは何事にも、全力投球じゃないと気がすまないのよ」

「ゆっくり配っても、あわてて配っても、もらえるお金は同じじゃないですか」

「もらえるお金がおなじでも、かけた時間が短ければ、効率よく稼いだことになるのよ。そのくらいのことわかるでしょ」

「逆に、早く終わるすぎてバイト料を値切られませんか」

「そんなこと許さないわよ。普通に配ってたら、たっぶり一日はかかる量じゃないの。それを、わたしが作戦を練って、二時間で配り終えたのよ。ボーナスをくれるっていうならともかく、減額をされる理由はないわ」

「しかしですよ、二時間の労働には二時間分の報酬しか払わないよといわれたら、文句のいいようがないじゃないですか」

「その時はまかせなさい。いざとなったら力尽くで交渉するから。担当の、矢作さんだっけ？ あんなオジさんならわたしでも勝てるわよ」

女は華奢な腕を突き出して拳をかざした。

青年はげんなりした顔で、肩をすぼめている。

相手のノリの悪さに、女はつまらなそうに長い息を吐いた。

「あんたさあ、もうすこし若者らしくできないの？ 午前中から、そんな辛気くさい顔を見せないで。もっと背筋を伸ばしたらどうなのよ」

「はあ、すみません」

「ホラ、電車がついたわよ、準備して」

女は青年の尻を叩いた。

二人はチラシの束を分け合い、位置につく。

やがて駅の出口から、ぞろぞろと人が吐き出されてきた。

もう十一時に近いというのに、やってくる通行人は、これから勤めに向かう人が多いようだった。ダイヤが乱れているのだ。

人身事故の影響で、通勤時間に完全ストップしてしまった。やっと動いた電車も終点のA駅へはたどり着けず、現在、ひとつ手前のこのK駅で折り返している。したがって、ラッシュ時に繁華なA駅で降りるはずだった利用客が、この時刻にK駅に続々と降りてくるのである。

彼らが細い商店街を抜けようと歩いていると、停まっているトラックの陰からだしぬけにチラシが差し出される。

「投信セミナーのご案内です」

「浅茅会の準会員になりますよー」

女は、ういいういしい笑顔。対する男は、ぶすつと不機嫌な顔。

たいていの人は、出し抜けに突き出されたチラシを、反射的に受け取ってしまう。それも、愛想のいい女の方のチラシを。

女の手持ちのチラシがなくなると、男の分を半分に分ける。それがなくなると、また半分。やがて残りは、ごく数枚になった。

「本当に、みるみるなくなっていくますねえ」

言葉と裏腹に、青年の感動の熱は低い。

「基本的な戦略と、状況に合わせた柔軟な応用のなせるワザよ。なんでもそう。いきあたりばったりはダメなの。作戦を練らないと」

「まあ、ただのチラシ配りですけどね」

「あんた、よっぽどそこが引かかるのね。……たしかに、たかがチラシ配りだよ。でも、つまらない仕事ならなおのこと、あれこれ工夫でもしなくちゃ、それこそつまらないでしょ」

「じゃあ、チラシを早く配り終えるための作戦って、何ですか」

「教えて欲しい？」

「いや、やっぱりいいです」

「教えてあげるわよ」

「いいですよ。教えてもらわなくてもわかります」

「あら、そう？ じゃあ、どんな作戦？」

「僕にこんな格好をさせておいて、先輩はスーツを着ている。道行く人は僕に不快感を感じて、僕を避けるために、印象のいい先輩からチラシを受け取るようになる、という寸法でしょう、どうせ」

「どうせって、何よ。その通りだったじゃないの」

「僕から受け取っていく人だって、けっこういましたよ」

「作戦は服装だけじゃないのよ」

と言うと、女は無邪気な目をして青年の顔をのぞきこんだ。「それはどんな作戦ですか？」という問いを待っているらしい。

青年は黙っていた。絶対に訊いてやるもんかと心に決めた。しかし、すぐに根負けした。

「それはどんな作戦ですか？」

女はにっこり笑って、

「要点は、何でも同じなの。ゲームでも、スポーツでも、会社経営でも、みんな同じ。あたえられた条件を、どう効率的に処理するか、なのよ」

「ははあ……」

「中でもいちばん大事なものは、何か大事じゃないかということ。わかる？」

「いやあ、あんまり」

「えてして、大事な物事の中には、かならず大事じゃないものがまぎれこんでいるのよ。それを正しく見極めて、排除していくことが重要なワケ。要件に的をしぼって、要るものと要らないものを正しく分別して、どんなに重要に見えても不要であれば果敢に排除するわけよ」

「おかしいなあ。僕たちはチラシ配りの話をしていたはずなんだが」

「わたしはチラシ配りを通じて、もっと普遍的な話をしているのよ」

「お言葉を返すようですが、チラシ配りにおける無駄な動きの排除って何ですか。肩幅に立って膝を使うとか？ 脇を締めて最短距離で腕をのばすとか？ そもそもチラシ配りに要件なんてあるんですか」

「それは、ケースによって毎回異なるのよ」

「じゃあ、今回のチラシ配りについて、どうぞ」

「今回の要件は、一枚のこらず配ること」

「ああ、なるほど、そういうことなら分かります」

たしかに、矢作という依頼元の担当者からは、そのように念押しされていた。

「それから、繁華なA駅の前で配ること」

「ここはK駅前ですけどね。先輩が勝手な判断で、移動しちゃったわけですけど」

「それが、要件の中にまぎれこんだ無駄なんだってば。よく考えてごらんささい。矢作さんは、A駅で配ることにこだわったわけじゃないのよ。このあたりで一番人の多い場所がA駅前だと思ったから、そう指示しただけ。でもA駅で電車が停まって、ひとつ手前のK駅で折り返し運手となれば、話は別よ。A駅で降りるはずだった乗客は、みんなK駅で降りるに決まってるんだから」

「まあ、そうですね」

「命題から目をそらしちゃだめなのよ。すべてのチラシを配りきるといって、一番大切な目を見失わなければ、A駅で配れという指示は無視してもよい、むしろ無視するべきということがわかるわけ。これを臨機応変というのよ」

「それで勝手に移動して来ちゃったんですか。あとで怒られませんかね」

「勝手にじゃないわ。ちゃんと安達さんには電話しておいたわよ。矢作さんが留守だっただけ」

「でも、ですよ。どうせなら、こんなさびれた商店街より、反対側の北口のほうがもっと人は多いと思うんですけど。この町のメインストリートは北口側だし、A駅までの臨時輸送バスは、北口から出ているみたいですよ」

チツチツチ。女は人差し指を振り子のように振った。青年は驚いた。こんなジェスチャーは、古い西部劇でしか見たことがない。

「あなた、耳をすましてごらんなさいよ。何か聞こえるでしょう」

「聞こえますよ。選挙演説でしょう。川向、川向って連呼してますけど」

今度の日曜におこなわれる市会議員の補選は、選挙戦の後半に突入している。K町が地の女性候補は、おおぜいの女性支援者を壇上にあげて、北口駅前で応援演説のリレーをおこなっていた。拡声器に乗った黄色い声、先ほどからときおり、風に運ばれてくる。

「演説だけじゃない。大応援団が全身桃色の衣装に、桃色のハチマキをして、大勢でチラシを配りまくってるわよ。あれ、北口の改札を出た目の前でやってるのよ」

「だから競合を避けた、というわけですか」

「正確には、共倒れを避けたのよ。もしくは巻き添えを避けたの。あの人たちがどういう団体か知らないけど、駅を降りた目の前にああいう集団がいたら、あんたならどうする？」

「まあ、関わり合いにはなりたくありませんね」

「そうでしょう。そんな人たちのそばでチラシなんか配ったって、同類と見なされて、誰も受け取ってくれやしないわ」

「なるほど。それで南口に河岸を変えたと」

「普段なら、北口に比べて降りる人は少ないでしょうけど、あの大応援団に反感を持つ一定数のひとが、こっちから降りることが見込めるわけよ。こっちに降りたって、その路地を抜けてガードをくぐれば、バス乗り場には出られるんだから」

「ははあ」

「加えて、この道は細いから逃げ場がない。このトラックのおかげで、さらに道幅が狭くなっていくから、わたしたちから距離をとって遠くに避けることはできない」

「ははあ」

「しかも、わたしたちはトラックの陰に隠れているから、声はすれども姿は見えない。相手は心の準備ができない。五メートル前から顔を伏せて目を合わせないようにするような防衛策がとれないわけよ」

「はあ」

「おまけに、あなたとわたしのコントラストで、感じの悪い男性から受け取るより、愛想のいい女性から受け取ったほうがマシ、と反射的に思わせる」

「はあ」

「最後は、浅茅会を連呼する。このチラシの内容の中で、いちばん人の興味を引くのはこの浅茅会というワードなんだから。投資に関心のない人だって、有名な浅茅会と聞けば、すこしは『おや』と思うでしょ。……どう、これが作戦よ。あんたは漫然と配っていただけでしょうけど。その裏には、二段構え、三段構えの戦略がはりめぐらされていたというわけなのよ」

「なるほど」

「恐れ入った？」

「うーん、どうかなあ。正直いって、牛用の包丁で鶏を料理する、みたいな諺を思い出しました」

「なによそれ。感心してるの、馬鹿にしてるの」

「先輩はやっぱりするすごいなと思いなと思いました。それは確かです」

「どういうところが？」

「いつも楽しそうなところ」

「わかったわ。馬鹿にしてるのね」

「ちがいます。皮肉じゃないです。どこまで有効な作戦だったかは疑問ですが、こんなうでもいいチラシを楽しそうに配っている先輩には、たしかに、馬鹿にしきれない何かを感じるんですよ。俺だったらこんな仕事、面倒臭いなあとか、退屈だなあと考えても、それを我慢しておしまいですからね」

「そういうこと。同じ時間、同じ仕事をして、あなたはつまらない。わたしは面白い。それだけとっても、作戦は有効だったのよ。すくなくともわたしにはね」

「僕もだんだん、そんな気がしてきました」

人の流れは小休止している。

青年はチラシを小脇にかかえて腕をくみ、骨董品を鑑定するような目で、女の顔をしげしげとながめた。

「先輩って、どういう人なのかなあ」

「どうしたの、急に」女は一步たじろいで、「悪いけどわたし、年下には興味ないんだけど」

「いやいや、人間的な興味で訊いているだけです」

「脅かさないですよ」

「こっちの台詞ですよ」

二人はたがいに顔をしかめた。

「そうじゃなくて。じつは、噂で聞いたんです」

「何を？」

「先輩って、デザイナー志望なんですよね」

「そうよ」

「専門学校か何かに通ってるんですか」

「じゃ、訂正するわ。まだデザイナー志望じゃない。デザイナー志望志望。今は、専門学校に通うことを志望している、そういう段階」

「なのにお子さんがいるんですか」

「あら、誰から聞いたの」

「いろんな人からですよ。べつに秘密にしているわけでもないんですけど」

「そうだけど。驚いた？ とても四歳の子持ちには見えない？」

「いいようにとるなあ。そりゃ、いつもの格好を見れば、子供がいるようには見えませんよ」

「いつものって？」

「サンングラスに、迷彩のパーカーとか。くわえタバコに、ショッキングピンクのパンツとか。あんな姿で子供の手をひいて、周りから変な目で見られないのかなあ」

「見られないわよ。手をひいて歩いたことなんか無いもの」

「子守りは人任せ？ ひどいなあ」

「ばか。バイトでチラシ配ってる女が、どうやって子守なんか雇うのよ。息子は旦那にとられちゃったの。子育ては、新しい奥さんがちゃんとやっているんですって」

「……ははあ」

男は絶句して、視線を宙に泳がせる。

女は青年の男の頭をこついた。

「立ち往生するくらいなら、はじめから踏みこんでこないの」

「すみません」

「べつにいいけど。もういちど夢にチャレンジしようと思えたのも、離婚したおかげだから」

「勉強のほうは進んでるんですか」

「ばつちりよ。たまたま去年は不合格だっただけ」

「受験や結婚生活には、得意の戦略は使わなかったんですね」

「それは逆。受験と結婚に失敗して、そこで戦略の必要性に気がついたの。人間は、失敗から学ぶんだから」

「じゃあ、僕らがチラシを早く配ることができたのは、先輩が受験と結婚に失敗した成果ってわけだ」

「そういうこと」

「なんだか、コストと利益がひきあわないようですが」

「知るもんですか。チラシ配りのことを考えて結婚したわけじゃないし」

「そりゃ、そうでしょうけど」

「結果の帳尻が合わないなんていちいち腐っていたら、はじめから何にもしないほうがマシってことになっちゃうわよ。一万円かけて五千円しかもうからないこともあるのよ。それを馬鹿馬鹿しいとか無駄だと思ったら、それこそ死ぬまで退屈することになるじゃない。骨折損なんて、怖がっちゃいらんないわ。……あれを見なさいよ」

女は数メートル先の道ばたを顎で指した。そこには、受け取られた直後に丸めて捨てられたチラシが何枚も散らばっている。

青年はため息をついた。

「いくら戦略的に配っても、ああやって捨てられちゃうんだもんなあ」

「あんただって、街頭で受け取ったチラシを、家まで持って帰ったりしないでしょ」

「まあ、そうだけど」

「捨てるほうは、配るほうの気持ちなんて考えないもん。捨てたことだって、五秒後にはもう憶えてやしないんだから。相手がとくに忘れていることを、こっちで気にしたって仕方ないでしょ。こっちはこっちでやらせてもらっただけよ。捨てていくなら捨てていけばいいのよ。そのかわりこっちの努力を、無駄だとか馬鹿馬鹿しいとか、そんなことは言わせないわ。……どう、今の台詞。バツイチのフリーター女にしちゃ、カッコイイこと言うでしょ」

女は自分の名台詞に興奮して、青年の肩を何度もたたいた。

青年はせいっぱい愛想笑いを浮かべた。

「まあ、なにはともあれ、おかげで今日のバイトは退屈しなくてすみました」
「でしよう？」

「はい」

「わかれば結構」

女は満足そうにうなずいた。

頭上から、遅延をわびる駅員のアナウンスが聞こえてきた。

やがて次の電車が到着し、再び改札から人が吐きだされてくる。

「これで最後よ。今日は気分がいいから、帰りにコーヒーおごってあげる」

二人は位置についた。しかし、こちらに走って近づいてくる男の姿を見て、すぐに態勢を解いた。

「あの人、安達さんよね」

「そのようですね」

「何しに来たの？　なんであんなに慌てているのかしら」

のっぽで撫で肩の若い男が、大きく手を振りながら二人にむかって走ってくる。その泡を食った形相は、ただ事ではなかった。

安達は二人の前までやってくる、肩で息をしながら彼らを見比べた。

「君たち、チラシは？　あとどのくらい残っている？」

「残りって……。あとこれだけですけど」

二人の手に残っているのは、合わせてもせいぜい十枚足らずだった。

「嘘だろう、だってまだ昼前だよ」

「本当です。もう全部、配り終えたんです。これだけしか残ってません」

女はエツヘンと胸を張った。

安達はがつくりと膝を折った。

「……どうかしたんですか？」

安達は答えず、血走った目であたりを見回した。道ばたに丸めて捨てられたチラシを見つけると、飛びついて拾い上げる。

それから彼は、商店街の奥へ向かって走り出した。数分後に戻ってきた彼の手には、しわくちゃのチラシが五枚ほど握られていた。

「さっき、印刷屋から連絡があったね」安達はチラシをひろげて二人に見せた。「ミスプリントがまぎっていたっていうんだ。見てくれ。こっちは『セミナー参加者は、あの浅茅会の準会員に推薦』とある。ところがこっちは、準会員のところが会員になっている」

「本当だ。ぜんぜん気がつかなかった」

「どっちが正しいのかしら」

「そりゃあ、準会員でしょう」安達に代わって青年が答えた。「浅茅会といったら、早い話が秘密クラブですからね。そんなに簡単に入会できるわけない」

「印刷屋から受け取った時の検品が不十分だった。しくじったなあ……」安達は頭を抱えてしゃがみこんだ。「今ならまだ間に合うと思っただけだ。……そうか、もう全部配っちゃったのか……」

「大変だ。こいつを真にうけた人は、正会員になれるつもりでセミナーに申し込んできますよ」

二人は手持ちのわずかなチラシに目を落とし、それから互いの顔を見合わせた。腹の底をチロチロ炙られるような、嫌な感覚。

「すみません、なんだか余計なことをしちゃったみたいで」

「とんでもない。君たちは仕事をしただけだよ」

「でも、わたしが勝手に場所を変更しなければ、もう少し残っていたかも」

「そのことは矢作さんには黙っていいよね。会社じゃ僕しか知らないから、大丈夫、大丈夫」

安達はむしろ、自分に言い聞かせるように言った。

「むしろ、場所を変えてくれてよかったかもしれない。賑やかで人の多いところより、こういう地味なところの方が、人目につかないだろうし」

「でも、全部配っちゃったことには変わりないですよ」

「いいんだよ。こんな商店街を通り抜けようって人に、投資に興味のあるなんか、そういないだろう。すくなくとも、銀行が軒をつらねているA駅前よりは、影響は少なくてすむよ」

安達は立ち上がり、虚ろな目をしたまま、せいっぱい笑って見せた。アルバイトの二人に責任を感じさせまいとしているのか、なるべく出来事を矮小化して自分が安心したいのか。

どちらにしろ、気のいい人なのだ。それだけに二人は、なおさら心苦しかった。

「さて、どうするかなあ」

安達は腕を組み、天を仰いだ。しかし考えるポーズだけで、頭の中が真っ白になっていることは、一目でわかる。

安達はさすがのような眼を青年にむけた。青年は女に、その視線を転換した。「戦略家の先輩ならこんな時どうしますか、と尋ねているようだった。

女も必死で考えたが、とりたてていいアイデアは思いつかない。

「とにかく、起きてしまったことは、起こる前にはもどせないし……」

「そうだよねえ」

「このことで本当に怒る人がいるのなら、誠意を持って謝るしかないと思いますけど」

「どうやって？」

「うーん、やっぱり坊主かなあ」

「やっぱり坊主かあ。仕方ないなあ」

安達は頭をかきむしると、二人から残りのチラシを受け取った。

「矢作さんに殺されちゃうよう」

泣きそうな顔でそうつぶやき、また風のように駅の方へと去って行った。

安達と入れ違いに、彼より遅れて電車を降りた通勤客が、ぞろぞろ二人の前を通り過ぎていった。しかし、もう手渡すチラシはない。人の流れにポツンと取り残された二人は、たがいの間の抜けた顔をむなしく見合わせる。

仕事は終わった。くずくずしている必要はない。あとは帰るだけ。

しかし、なぜかこの場を去りたい。

「先輩、何を考えてるんですか」

「あなたと同じことよ、たぶん」

「僕たちのせいじゃありませんよね」

「ありたまえよ。なによ、あんたそんなこと考えてたの」

「安達さんも、すこし大袈裟じゃないのかなあ。そりゃ、何件かクレームはくるかもしれないけど、謝ればすむ話でしょう。相手に損をさせたわけじゃなし」

「そうよねえ」

「ミスプリントが何枚まざっていたのか知りませんが、僕らの任務はそれを配布することですからね」

「そうそう」

「印刷の内容については、あずかり知らぬところです」

「その通り」

「『準』の字が抜けていた事に気づかなかったからといって、不注意と言われる筋合いはありません」

「当然よ」

「安達さんも、僕らの責任ではないと言ってくれたし」

「まったくあんたの言うとおりだわ。まあ、ちよつとだけ後ろめたいのは事実だけど」

「たしかに、『作戦』が裏目に出てしまった感は否めませんね」

「余計なことは考えず、あのままA駅前で配っていれば……」

「まだチラシは半分以上、手元のにこっていたかも……」

「調子にのって、被害を拡大しちゃったのね」

「だったら、僕らは何もしない方がマシだったんでしょか」

「わたしたちは、あのまま退屈を我慢しているべきだったってこと？」

「その結論は、面白くないなあ」

「やっぱり、あんたもそう思う？」

「女は暴力的なまでの強さで、青年の肩をわしづかみにした。」

「じゃ、やりましょ」

「何を？」

「何かできることを、よ」

「できることって？」

「あんた、聞いたことない？ 体操選手が鉄棒から落ちて怪我をした時、無理矢理にでももう一回鉄棒を握らせて、それから病院へ運ぶんですって。そうしないと、失敗した光景が最後の記憶になって、復帰が難しくなるんだそうよ。怖くなっちゃって。わかる？」

「うーん、今日はまだ、鉄棒から落ちてはいないようですが。先輩も僕も……」

「やらないほうがマシだった、なんて言わせないってことよ。そのためにも、自分たちの落とし前だけは、きっちりつけて帰ろうじゃないの」

「そんなこと言ったって」

「あたりを探し回って、捨てられているチラシを回収するのよ。さつき安達さんが拾った物の他にも、きつとまだ捨ててあるでしょう」

「ああ、なるほど」

捨てられたチラシを放置しておけば、拾った誰かがミスプリントを信じていまうかもしれない。それをすべて回収する。無駄ではないはずだ。

「一枚残らず拾って帰るのよ」

二人は下を向いて歩き出した。

チラシを受け取った人の大半は、商店街ではなく、ガード下をくぐって北口の方へ流れていった。そのあとをたどっていくと、あちらこちらに捨てられたチラシが踏みつけられている。それを一枚一枚拾っていく。

こんなことがどれだけタシになるかはわからない。けれども、とにかくやるのだ。

「焼け石に水なんて言ったら承知しないからね」

「言ってませんよ。これですこしは安達さんの助けになりますかね」

「安達さんのためにやるんじゃないわよ」

ゴミの集積場の中に、多数のチラシが捨てられていた。生臭い袋の山をよりわけて、二人はチラシを拾いあつめた。

「ひどいわ。こんな場所に捨てていくなんて」

「要らないチラシをゴミ捨て場に捨てていくなんて、まったく正気を疑いますね」

女の冷ややかな一瞥に、青年はちぢみあがった。

「冗談ですよ。いやだなあ。そんな怖い顔して」

「あなた、ちゃんと勉強はしているの」

「なんですか、突然」

「さっき、わたしの受験失敗のことをさきんさんからかったですよ。そういう自分はどうなのよ。予備校にはちゃんと通っているの」

「ぼちぼちです」

「頑張りなさいよ。三浪なんかしたら、ご両親泣くわよ」

「それを先輩に言われても」

「負けるんじゃないわよ。食らいついていきなさい。この世はなんでも根くらべなんだから」

「はい」

はいはい、と重ねたくなるのを、青年はなんとか堪えた。

「先輩って時々、俺のことを励ましてくれるんですね」

「そりゃ、かわいい後輩だもの」

「けど本当は、俺を励ましてるんじゃないやありませんよね」

「いいじゃない。あなたが勝手に励まされてくれるんなら、その部分は、あなたを励ましているも同然よ。本当に人から励まされるって、そういうことよ」

今度は犬のフンの上で踏みつぶされているチラシを発見した。尻ごみする青年の横で、女は爆弾処理でもするような慎重さで、それを回収していく。

つくづく感心して、青年は言った。

「先輩って、勇敢ですね」

「それだけが取り柄だもん」

「けど、強がってますよね」

「だから、それだけが取り柄なんだってば」

小休止・会議室【八日後】

ちいさな警察署の、せまい会議室。時刻は朝の十一時。

年季の入った建物で、天井はカビだらけ、壁はしみだらけ。その壁を覆うように、集荷用のコンテナが累々と重ねられている。中身はすべて、プラスチック製のバインダー式ファイル。

一方、窓辺にはたくさんのダンボール箱が積み上げられて、冬のやわらかい日差しをさえぎっていた。

そのダンボールを前に、神経質そうなやさ男がひとり、呆然と立ちつくしている。

隣では、顔中ひげもじやの男が、あまり反省した様子もなく頭を掻いていた。

「信じられない。信じられないよ。信じられない」

やさ男は、紙のように真っ白な顔をして、同じ言葉をくりかえしている。

「またあ。おおげさなんだよ」ひげ男は豪快に笑いとばそうとしたが、鬼の形相で睨みつけられると、両手を前で合わせてかしまった。「どうもすみませんでした」

「お前、何をやらかしたか、わかっているのか」

「はい、僕は、このダンボールに貼ってあった付箋を、すべてはがしてしまいました。ごめんなさい」

「なんだ、それは。ひょうきんぶってるつもりか？」

「滅相もない」

「そんなおとぼけで、俺が苦笑いしてすませるとでも思ってるの？」

「思ってますん」

「いいや、思っている。お前はいつもそうだ。いつだってへらへらとおちゃらけて、その場を乗り切ろうとする。言っておくか、俺にその手は通用しないぞ」

「承知しております」

「しらじらしい敬語はやめろ！」

怒鳴りつけられ、ひげ男は神妙にうなだれた。しかし、いくらもたたぬうちに、じわじわと口元が緩んでいく。

やさ男は目を瞠った。

「何がおかしいの？ 何がおかしいの??」

「だってお前、まるでこの世

「みたい、じゃない。終わりで、破滅だ、終焉だ。俺の警察官人生の幕を、お前がたったいま引いた。それも、薄笑いをうかべながら！」

「しーっ。あんまり大きな声出すと、外に聞こえちゃうよ」飛んでくる唾に辟易しながら、ひげ男は言った。「そんなに怒ることないよ。これはただの、うっかりミスなんだから」

「うっかりだと？ 一枚残らずはがしておいて？ 箱は二十個もあるんだぞ。わざとやったとしか考えられん」

「そんなことするわけじゃない。俺はただ、そこにあるホワイトボードを、むこうへ移動しただけ。ファイルを調べるのに邪魔だったから」

「それでどうして付箋がはがれるんだ」

「テーブルにぶつけちゃいけないと思って、なるべく端によせて動かしたんだよ。そうし

たら、知らないうちにこっち側の縁が、ダンボールの表面をこすってたんだけだ。ガリガリって」

「で、全部こそぎ落としちゃったわけ？」

「そのようだね」

「だったら、どうして落ちたままにしておかないの？ それなら箱と照合できたのに、どうして全部ひろってくずかごに捨てちゃうの？」 やき男は、にぎりしめた付箋の束をつきだした。「これじゃ、どれがどれだか全然わかんないよ！」

「それは仕方ないよ。ふと気がついたら、足下にばらばらと紙くずが散らかっているんだもん。まさか、たったいま自分でちらかしたゴミとは思わないじゃない。こっちは親切のつもりで掃除してあげたんだから」

「親切！」

「不可抗力って、こういうことを言うんだね」

「不可抗力！」

「お前ったら、部屋に入ってくるなり、女の子みたいな悲鳴をあげるんだもの」 ひげ男はくすくすと思いきや笑いをして、「なにか大変なことが起きたのかと、びっくりしちゃったよ」

「大変なことが、起きたんだよ！」

やき男は女の子みたいな悲鳴をあげると、貧血を起こしたようによるめいた。ひげ男が手をさしのべる。 やき男はそれをふりはらい、両手で顔を覆った。

「……だいたい、どうして部外者のお前がここにいるんだ」

「冷たいことを言うなあ。お前と俺とは同期の桜」

「だから迷惑しているんだ。昔から、お前がトラブルを起こす時、なぜか俺は決まってその近くにいます」

「お前は昔から、ツキがなかったからね」

「そういう問題じゃない」

「そういう問題なんだよ。俺はヘマの多い人間だが、どういうわけか、これまで大事になったためしはない。お前とちがってツキがあるんだ。いつもヘラヘラしている俺と、いつもキナキナ考えすぎるお前との差が、そこにある」

「何を言ってるんだ、お前は」

「今回もきつと大丈夫だよ。根拠はないが、心配するな」

「主任にもそう言うといい。昼前には、こっちに来るんだ」

「なに、本当か」 ひげ男はようやく真顔になった。「そいつは大事だ。あの人、怒ると怖いから」

「怖いですむか。八つ裂きにされるぞ」

「かわいいそうになあ」

「かわいそうになあ……？」 やき男は、気の毒そうにこちらを見ているひげ男の視線に気がつき、驚愕した。「お前、この始末を俺に押しつけて、逃げる気じゃないだろうな」

「悪く思うなよ。俺は人に姿を見られるわけにはいかないんだ。これは、いわば潜入捜査なんですね」

そう言ってひげ男は、とっておきの秘密をうちあけるかのように声をひそめた。

「お前も想像はつくだろう。ここにある資料の山は、いまや全警官の垂涎の的だ。こっちじゃみんな『浅茅ファイル』なんて呼んじゃってさ。未解決だったあの事件この事件の秘密が、全部ここに隠されているんじゃないかってな。うちの課長なんか、『あいつら、いつまで独り占めするつもりなんだ』って、お前たちのこと怒ってんだよ。『そりゃあ、向こうの捜査を優先するのは仕方がないでしょう』って、俺がなだめてるんだから」

ひげ男は太い腕を組み、昨今の軽薄な風潮を嘆く老人のように首を振った。

「どうかと思うよね。みんな変な期待をもちすぎなんだよ。いくら浅茅憲久だって、そうそうあちこちの事件に首をつっこんでいたはずないじゃない。でもうちの課長は、大昔に自分が捜査した事件の証拠を浅茅がにぎっているはずだって、そこは確信があるみたいなんだな」

「それで、お前を送り込んだのか」

「そう。こつそり見てこいって。その事件は、結局立件できなかったらしい。課長にしてみたら、何年たっても無念なんだろうね。当時の自分の見込みが正しかったのかどうか、どうしても確かめたいんだな。俺も気持ちはわかるから、断りきれなくて。でもこの話、内緒だよ。よそにばれると抜け駆けだって叱られちゃうからね」

「どうやってここへ忍び込んだんだ。誰の許可をもらった？」

「お前の」

「俺の？」

「そう言ってる、こちらの課長さんにここまで通してもらった」

やさ男はあんぐりと口をあけた。「お前は、なんとという奴だ」

「わからないなあ」ひげ男は不思議そうに、「何をそんなに怒っているの？ 悪いのは浅茅だよ。何を書いてあったか知らないけど、そんなに大事なことを付箋にして貼っておくなんて、論外だ」

「付箋を貼ったのは浅茅じゃない。俺たちだ」

「なんだ。それなら同じことをまた書いて、貼っておけばいいじゃない。俺も手伝おうか」

「それが出来るくらいなら、主任に八つ裂きにはされたくないんだよ」

「出来ないことないだろう。箱の中身が変わるわけじゃなし」

「箱の中身は関係ない。付箋に何を書いてあったのは、順番だ。もともとキャビネットにしまってた箱の配置が、こっちへ運びこむとわからなくなるから、左から番号を振って貼っておいたんだ。主任が気をきかせてな」

「それだけ？」

「簡単に言うな。これを見ろ」

やさ男は、コンテナの中のファイルを一冊手にとり、ページを開いてテーブルの上にたたきつけた。クリアフォルダの中には一枚の紙が挿入してあり、その真ん中に、数字が一文字だけ書いてある。

「このファイルは、浅茅の仕事上の資料が、時系列に綴じてあるんだ。その中で、ページのあちこちに、こんなふうに数字だけ書いたメモがはさまってるんだ。この意味がわかるか？」

「いやー、ちょっと」

「俺たちも、さっきようやくわかったんだ。ファイルの中の数字をつぶさに調べてな。浅

茅は、自分がたずさわった案件の資料をすべて保管していた。A4サイズまではバインダーのファイルに。それより大きい品物はダンボール箱に」

「それはわかる」

「ファイルの資料は、時系列に綴じ込んであった。でも箱に入れる品物の方は、サイズがまちまちだ。時系列にはならべられない。二十個ある箱の中から、そのつど物の大きさに合った空スペースを見つけて、収納していくしかない」

「そうだね」

「ファイルのあちこちに挿入されているこの数字は、箱の番号だったんだよ。調べてみたら、メモに書き込まれていた数字のパターンは『1』から『20』までで、箱の数と一致したんだ。それでわかった。たとえば『3』という紙が挿入されているページがあったら、それは、本来このページに綴じ込まれるべき資料が『3』の箱に入っている、という意味になる」

「そうなの？」

「誰が考えたって、そうだよ」

「だからって、お前たちが勝手にふった番号が、浅茅の考えていた番号と一致するという保証はないと思うが」

「一致するんだよ。浅茅だって、このていどのことに暗号なんか使うはずない。綴じ込んでいる番号が『3』なら、それは単純に三番目の箱って意味に決まっている。問題は、浅茅がキャビネットのどっち側から箱を数えていたかってことだけだ。右からか左からか。横向きか下向きか。それくらいは、ファイルと箱の中身をじっくり比較すれば見当がつく。いや、つくはずだったんだ。もとの配置さえわかっていたらいいな」

「ああ、わかった。なるほど、そういうことか。それは大変なことをしちゃったね」

ひげ男は他人ごとのように感心しながらも、まだ釈然としていない。

「でもやっぱり、お前がそこまで怒ることないんじゃないの。ファイルと箱が一致したからって、それで犯人がわかるわけじゃない」

「それが、わかるんだ。このファイルの中にはな、誰かに抜き取られている部分があったんだよ。八ページ分、連続してな」

「へえ」

「俺たちは、抜いていったのは犯人だと見ている。時系列に綴じてあるんだから、始めてファイルを見る人間にだって、目的の資料を見つけ出すことは簡単だ。だとしたら、その資料を盗み出すことが、殺しの動機だったのかもしれないじゃないか。そうだろう」

「まあね」

「その抜き取られた次のページに、『12』のメモが挿入してあったんだ。つまりこのメモは、抜かれた資料と連続している可能性がある」

「なるほど」

「犯人も、このメモを見たはずだ。しかし、その意味まではわからなかったかもしれない。数字の意味がわからず、箱の中まで調べなかったかもしれない。それなら『12』の箱の中には、犯人が奪いそくなった資料がまだ眠っているはずだ。殺しの動機にむすびつく証拠品がな」

「ああ、そういうことかあ」

「そいつを今日の昼過ぎから、みんなで手分けして探す予定だったんだ」

「どうして？ なぜメモの意味がわかったその場で、箱を調べなかったんだ？ 変に間をあけるから、こんなことが起こるんだよ」

「俺たちは寝てないんだよ！ 一晚中資料と格闘して、ようやくメモの意味がわかったところで、ひとまず仮眠をとって、胃袋に何かいれて、すこしはシャキッとして仕切りなおそうと、俺が提案したんだ。つい三時間前のことだ。その三時間のあいだに、お前が全部ぶち壊しにしてくれたんだ。わかったか！」

「わかった、わかった。今度こそわかったから、お前、そこにすわって、すこし休んだ方がいいよ。さつきから顔色が悪い」ひげ男は心配そうに、やさ男を椅子にすわらせた。「いま、お水もらってきてあげるね」

「駄目だ！ ここを動くな」やさ男は、ひげ男の腕にしがみついた。「主任が来るまで、絶対どこにも行かせないぞ」

「水をくんでくるだけだっただ」

「嘘だ。そのまま逃げるつもりだ」

「逃げないよ。俺だっただ、用がすんでないんだから」

口ではそう言いながら、ひげ男は力づくで腕を引き抜こうと試みる。やさ男は死んでも放さない。

子供のような取っ組み合いをつづけていると、しばらくして戸が開き、ひとりの男が入ってきた。

「どうかしましたか？」

「あ、課長さん」ぬっと顔をつきだした白髪の男を見て、ひげ男は何事もなかったかのように姿勢を正した。「先ほどはどうも」

「どうです、探し物は見つかりましたか？」

「それが、こいつとすっかり話しこんでいました。ひさしぶりに顔を見たので、懐かしくてね」

「なるほど、そうでしょうなあ」ひげ男の腕を抱きしめているやさ男を見て、課長はうなずいた。「わたしは、こちらに主任さんが来ていないかと思っ、のぞいてみたんだが」

「主任さんは、もうすぐ来るそうですよ」

「なら、伝言をお願いしたいんですがね。先ほど、うちの水元から連絡がありました。おたくの高橋さんといっしょに、いま下関に着いたそうです」

「下関？」やさ男が目をまるくして、ようやく我に返った「どこの下関？」

「たぶん、山口県の下関だと思いますけど……」

その時、課長が背後のダンボール箱に目をやった。次いで、やさ男の前に積まれた付箋の山を見た。「あっ」

「そうなんです。やってしまいました」すばやく、ひげ男が言った。「大失態です」

「これは大変だ」

「大変です。おかげで、どれが『12』の箱かわからなくなっていました。でも、責めてはいけません。ミスは誰にでもあることですから」と言っ、励ますようにやさ男の肩に手を置く。「お前もあんまり気を落とさないほうがいいよ」

やさ男は驚倒した。やさしく微笑むひげ男の顔が悪魔に見えた。否定と、言い訳と、非

難と、罵倒の言葉が渋滞してのどが詰まり、声が出ない。その隙について、ひげ男はままと腕を引き抜いた。

「では、私はいったん失礼して、でなおしてくることにしましょう」

ひげ男は軽く会釈をし、そのまま退出しようとした。

課長はダンボールの壁面を見つめて、なにやら考えごとをしている。

その様子が気になって、ひげ男は足をとめた。

「……何を考えているんです？」

「なんとか方法がないかと思いましてね」

そう言うと課長は、いそいそとホワイトボードを二人の前まで引っ張ってきた。そこには、これまでの会議の内容が雑然と書き込まれている。

課長はその中で、野球の得点スコアに似た表を指さした。

「これは、数字を書いたメモの度数表なんです」

「度数表、ですか」

「ファイル全体を通じて、それぞれの数字が、どういう頻度で出現したかをカウントしたものです」

「ほう、面白そうですね」

「面白くない！」ようやく声を取り戻したやさ男が、ひげ男を怒鳴った。「お前という奴は、どうしてそう調子がいいんだ」

「まあまあ。私の話を聞いてください」課長がおだやかに諫めた。「表の上の段が1から20までのメモの数字、下の段がその度数なんです、全体的に、箱の番号がおおきくなるにつれて、度数は減少していく。『1』が十七回で『20』が四回です」

「そうですね」ひげ男がうなずいた。

「だが、きれいに反比例しているわけでもありません。一番多い度数は『3』の二十回だし、そうかと思うと『4』は八回。『5』は十二回。ばらばらです。それでいて、全体としてはやはり、番号が大きくなるにつれて度数は減っている」

「不思議でもなんでもありませんよ」やさ男はテーブルに肘枕をつき、ぶっきらぼうに言った。「浅茅はべつに、箱をまんべんなく使おうなんて思っていないかっただけでしょう。偏りがあるのは当然だし、『1』が多くて『20』が少ないのも、あたりまえのように思います」

「そうですね」

「入れやすい箱から入れていく。そのサイズがおさまるようなら、その箱に入れる。入らないようなら、隣の箱に入れる。そこがだめなら、また隣の箱。浅茅のデスクから一番入れやすい、手前の箱が『1』で、遠い箱が『20』だったんでしょう。たしよのでこぼこはあったって、若い番号ほど沢山品物が入っている。あたりまえじゃないですか」

「そうでもないぞ」ひげ男が言った。「だいたいはお前の言ったとおりだが、この表によると、もうすこし大きいむらがある」

「そうですね。全体として奇数が多くて、偶数がすくない」

「それはそれで、何の不思議もないです。キャビネットは、上半分にファイル、下半分にダンボールが収納されていた。ダンボールはキャビネットごとに四つずつ。上下二段の左右二段、2×2です。なるべく手前の箱に入れようとするのと同じ理屈で、上下があれば

上の箱に入れることが多くなるでしょう」

「そのとおりです。つまり、アドレスは上下上下にふられていたということじゃないでしょうか。上の段が奇数、下の段が偶数。だから奇数の度数が多くなる」

「それがわかったところで、どうなりますか？ 大事なのは『12』の箱を見つけることです。きれいに数が減っていくなら、それで『12』の箱をつきとめられますが、大きいむらがあるんでしょう？」

「それは関係ないよ」ひげ男が意気込んで言った。「どっちにしろ、メモの数だけ品物が入っていることだろう。だったら、全部の箱の中の品物を数えてみればいいんだよ。十七個の品物が入っている箱が『1』、四個しか入っていないのが『20』。……『12』のメモは全部で六回でてくるらしいから、つまり品物が六個の箱を探せば、すなわちそいつが『12』の箱だ。じつに単純明快じゃないか」

「そうじゃないってば」やさ男はいらいらしながら言った。「そんなに単純な話じゃない。メモの度数は、品物の数とイコールじゃないよ」

「どうして？」

「たとえばだな、三巻セットの本を資料として箱に入れるからといって、メモを三枚もはさむか？ メモは資料の発生した回数なんだよ。資料そのものの個数じゃない。品物が何個でも、一度に一枚ずつ」

「たしかに、そうなんです」課長がうなずいた。「ために箱をひとつあけてみたんですが、細かい物を含めて三十個以上の品物が入っていましたよ。品物の数とメモの枚数は、たしかにイコールではないようです」

「そうですか」

「ただし、こいつを逆に考えることはできる」

「と、いいますと？」

「イコールではなく、以上かもしれないが、しかし、おそらく未満ということはない」

「そうか」ひげ男はひぎを叩いた。「複数の品に一枚のメモはありえても、ひとつの品に複数のメモということは無い。『12』のメモは六枚。品物は六個以上かもしれないが、六個未満ではありえない。箱をぜんぶ調べて、五つしか品物が入っていない箱があれば、それは『12』の箱ではないってことだ」

「つまり、消去法です。『12』そのものは当てられないが、絞り込むことはできる」

「どうですかねえ」疑りながらも、やさ男は体を起こした。「犯人が数字の意味に気がついて、箱から品物を持ち出していたら、そもそもその数が合わないわけだし」

「馬鹿だなあ。その時は、『12』の箱を探す意味自体がなくなるじゃないか。犯人がそうしなかったという仮定にたって、箱を探しているんだろう？」

「……まあ、そうだけど」

「課長さん、こうなったら全部の中身を数えて、品物の多い順に箱をならべてみましょう。このテーブルをあっちへどけて、スペースを作って……ほら、お前もぼさっと見てないで手伝えよ」

急にはりきり出したひげ男の指示に、やさ男はしぶしぶ従った。

積み上げられた箱をすべて床にならべ、ホワイトボードに別の度数表を作り、手分けして箱の中身を調べていく。書籍や冊子、カセットテープやビデオテープが多かったが、そ

の他にも置物や機械装置など、様々な物が詰め込まれていた。

次々に箱を調べていくと、ひげ男が不意に歓声をあげた。

「あった！ 課長が言っていたのは、きつとこれだ」

彼が手にしている物は、ゴルフコンペの優勝記念の盾であった。刻印されている優勝者の名前は山中某。コンペ開催日は、二十五年前の日付である。

「お前、そんな物を探していたのか」

「こんな物とは知らなかったがね。この山中ってやつに関係した何かを探していたんだよ」
「誰だ、そいつは」

「四年前に、大手製薬会社で内紛騒動があったろう。会長派と社長派が大モメにモメた結果、天下り役員がひとり辞任して決着した。その役員が、この山中ってやつだ。うちの課長がまだペーペーの頃、ある汚職事件の捜査に加わった。その事件のキーマンと目されていたのが、当時は官僚だったこの男でね。しかし、他の関係者とは面識がないとシラを切られ、結局、容疑を固められなかった」

「わからないね。そんなに昔の事件に、浅茅がからんでは思えないが」

「浅茅が噛んでいたのは、四年前の内紛の方だよ、社長派に荷担した浅茅が、会長派の山中の弱みを握り、奴を脅して辞任に追い込んだらしい。そのネタというのつまり、山中と汚職事件を結ぶ証拠なんじゃないかと、うちの課長は読んでいる」

「ゴルフ優勝の盾が、汚職の証拠なのか」

「詳しいことは、ファイルの方を調べればわかる」というと、ひげ男は急に我に返った。

「そうだよ。もともと俺は、先にそっちを調べるつもりだったんじゃないか」

ひげ男はコンテナの方へ歩いて行き、中から四年前のファイルを取り出した。ページをめくっていくと、たしかに件の製薬会社に関する情報が、いろいろ綴じ込まれている。

その中に、一枚の写真があった。ゴルフ場で撮影されたと思われる、記念の集合写真だった。日付は、盾に刻まれたのと同じ日になっている。

「決まりだ。ここには若き日の山中も、他の容疑者たちも写っている。面識がないという山中の証言は、やはり嘘だった。これならじゅうぶん、脅迫のネタになるだろう」

「そうかあ？」

「関係者のなかには、現役の政治家も、そのスジの大物もいるんだよ。この写真をマスコミに流されて事件を蒸し返されれば、山中は今後、どの世界でも生きていけない」

「それよりも、見てください」 課長が声はずませた。「写真の次のページに、『18』のメモが綴じ込まれている」

この写真と盾は、いわば対をなしていると言ってよい。『18』は、盾を収納した箱の歯番号であろう。つまり、盾が収納されていた箱は『18』番だということだ。

課長とひげ男は顔を見合わせ、目を輝かせた。

「なあんだ。品物からファイルをとどることが出来るじゃないか」

「すべての物が可能というわけではないが、日付のはっきりした品物があれば、可能性はありますね」

「そんなにうまく行きませんよ」 やき男が言った。「今のケースは、どう考えたってまぐれです」

「いちいち悲観的な奴だなあ。その根性が、ツキを逃がしてるんだってば」

「とにかく、箱の中身を数えるだけ数えましょう」課長が言った。

三人で手分けをし、内容点数の多い順に箱を左からならべてみた。さらに、半分の十個のところまで二分して、上下に重ねる。先ほどの仮説が正しければ、左の列から上下下に番号はふられていく。すなわち、六列目の下段が『12』の箱となる。いわば『仮12』だ。

「浅茅ってやつは、本当にいろんな情報を、まめに集めていたんだなあ。感心しちゃうよ」

『仮12』の中には、品物が八つ入っていた。書籍、置物、アクセサリー等々。

一方、抜き取られた八ページの前後に綴じ込まれていたのは、老舗料亭、金属加工プレス、台湾リゾート開発に関する案件の資料である。

「どれも、結びつきそうな物はないなあ」

「近くの箱も、調べてみましょう」

右隣の『仮14』の箱は、中身の品物が五つしかなかった。先ほどの仮説にたてば、六品未満のこの箱が本物の『12』である確率は低い。

左隣の『仮10』は、十点以上の品物が収納されていた。ポルノ雑誌が数冊と、日本人形と、古めかしいポータブル式テープレコーダ、カセットテープが数本。

テープを再生してみると、男女の会話が録音されていた。内容はなんでもない日常会話だが、沈黙している時間の方が長い。声が遠く、音質も悪いところをみると、どうやら隠し録りしたものらしい。

「女の声に聞き覚えがあるような気がするの、気のせいかなあ」

「気のせいだろ。浅茅がお前の知り合いに関心を持つとは思えん」

「日本人形なんか、料亭と関係があるかもしれないですね」

「どうでしょうね。こじつけじゃありませんか」

「ケチばかりつけてないで、お前も少しは考えろよ」

ひげ男になじられると、やさ男はぶすつとした顔で腕を組み、

「何をどう考えろってんだ。人形と、ポルノと、録音テープのどれかが、料亭と、プレス加工と、台湾のどれかと関係しているかもしれない。していないかもしれない。雲をつかむような話じゃないか」と言うと、壁にかかった時計を見上げた。「どっちにしろ、主任が来るまでとても間にあわないよ」

やはり、気になるのはそのことらしい。

しかし今の彼の言葉に、課長が眉をひらいた。

「そうか、なるほど。三つのうちのどれかなら、他の二つを除外すればいい。除外できれば、すくなくともこの箱が『12』ということは証明できる」

「どういう意味です？」ひげ男が尋ねた。

「ファイル調べましょう。『12』のメモが挿入されていた、他の五か所を調べてみて、そこに人形かポルノか録音テープに関連するものが発見できれば、この箱は『12』と見ていいでしょう。どうですか？」

「なるほど。いけそうですな」

対象となるファイルは四冊あった。メモの前後に綴じ込まれていた資料は、沖縄の県議会選挙や、映画俳優の事務所独立騒動など、やはり多岐にわたっている。

それらの資料をながめているうちに、課長とひげ男がそれぞれ別のことに気がついた。

「そういえばこの日本人形、これは琉球人形じゃないでしょうか。ほら。この選挙事務所

の写真に写っている人形と、形はちがうが髪型がよく似ている。これは普通の日本髪じゃありませんよ」

「思い出したぞ。さっきの女の声は、この所属タレント名鑑に載っている女優の声だ。うちのカミさんが、この女の出ているドラマを嫌というほど繰り返し見ていたから、声か耳についてしまった」

「本当かあ？」

「間違いないって。これが『12』の箱だよ。おまけに、抜かれた八ページと関係する資料も、消去法でわかったじゃないか」

人形と録音テープが除外された。残ったのは、ポルノ雑誌である。

こんな物が、浅茅殺しの動機と関係があるのだろうか。

「……まあ、いまのところは可能性がある、というだけのことだが」

三人は同時に箱の中をのぞきこみ、不快げに顔をしかめた。

それは、外国製の児童ポルノだった。

数分後、部屋に主任が現れた。

やさ男は直立不動。課長はにこやかに挨拶をし、ひげ男は軽く会釈をしただけで、小指で耳を搔いている。

「なんだ、ずいぶん散らかってるな」

「はあ、じつは……」

釈明と陳弁に追われたのは、はやりやさ男だった。付箋を剥がした失態を詫び、その何倍もの大ききで、問題の証拠品を特定できたらしいことを強調する。

幸い、主任は上機嫌だった。というよりも、やさ男の言っていることにハナから関心がないようだった。課長が水元からの連絡のことを告げると、

「ええ、私のところにも、高橋からメールが来ていましたよ。犯人がわかったので、これから逮捕に向かうということですよ」

「そうでしたか。それはよかったです」

「すべて水元さんのおかげのようです。あの人を遣わしてくれた署長さんには、感謝しなくちゃいけませんなあ」

主任と課長は笑顔で握手をかわしている。

やさ男は、わけがわからず呆気にとられていた。なんだこれは。事件が解決したと、二人はそう言っているのか……？

その肩を、ひげ男がぼんと叩いた。

「なんだかわからんが、よかったじゃないか」ひげ男は白い歯を見せて笑った。「ま、俺のツキにかかればこんなもんさ」

∴ 犯人は総武ガスケットの従業員である

宛先：服部主任

差出：高橋

標題：犯人逮捕に向かいます。

本文：先の電話、とちゅうで切れてしまつてすみません。お伝えしたように、我々はいま、下関に向かっています。現在、北九州空港行き機の機内でこのメールを書いています。

浅茅憲久を殺害した犯人は、株式会社総武ガスケット総務部契約社員、大石梅司、七十歳であると思われます。下関は大石の生まれ故郷です。

これまで捜査の進捗報告もままならず、申し訳ありません。聞き込みの対象がめまぐるしく変わるため、それを追いかけるのに精一杯で、落ち着いて電話をしている時間もありませんでした。∴∴∴というのは半分言い訳で、正直にいえば、捜査初日のことを根に持つ気持ちもありました。すみません。

しかしここへ来て、ようやく事件の真相にたどりつきましたので、これまでの経緯をまとめて報告する次第です。

といっても、報告書の体裁をととのえている時間がありませんので、捜査のあいだつけていた覚え書きを、とりあえずお送りします。

十一月二十五日

浅茅憲久殺害事件捜査。初日。本日より所轄の水元警部補と同行。どうしてそうなったか、経緯については書きたくない。主任の言うことは二度と信用しない。

現場から、新宿「浅茅コンサル」へ移動。聞き込み。社員は事件に動揺しているが、悲しんでいる様子はなし。会社は設立してまだ日が浅く、関係も希薄だったよう。浅茅の会社はせいぜい週一度。仕事もほぼ社員任せだったというから、無理もない。

ひと月ほど前から、浅茅の住所を尋ねる匿名の電話が頻繁にかかっていたとのこと。電話の主は男。住所は教えなかった。この件を浅茅に伝えたところ、そんなことは昔から日常茶飯事だと気にもとめていなかった。ただし連絡先は絶対に教えるなど厳命。

三週間ほど前、荻野目コンサルの社長という女から電話あり。たまたま浅茅がいあわせ、直接会話。旧知の仲らしく、親しげに話していたという。そのうち浅茅はTホテルで荻野目コンサル主催の食事会に出席し、スピーチしている。この電話がきっかけだったのではないか、とのこと。

十一月二十六日

水元さんとファミリールストラんで、朝食がてら打ち合わせ。水元さんは朝の七時からハンバーグを食べている。わたしはヨーグルトとコーヒードだけ。

まずは荻野目コンサルへ向かう。途中、池田さん中田さんに遭遇。これから荻野目に向かう由。昨日、われわれの後に浅茅コンサルへ行き、同じ話を聞いたらしい。

仕方が無い、わたしたちは遠慮しましょう、と水元さん。どうしてこちらが譲らねばならないのか、納得がいかない。我々はTホテルに行き先を変更。ところがここでも、先着

の多田さんに遭遇。ロビーですれ違いざま、「何もなかったよ」の一言。

我々は電車で動いている。おまけに水元さんは足が悪いから、どうしても移動が遅くなる。一方、精鋭であらせられるところの諸先輩方は、手分けをし、同時進行で多方面に展開している。これではどこへ行っても、彼らの後塵を拝することになる。出し抜くためには、新しい次の切り口を探さなければならぬ。しかし水元さん、「せっかくここまで来たんだから、わたしたちも話を聞いていきましょー」。

やはりこの人は駄目だ。それとも、わたしが焦りすぎ？

宴会場責任者、坂上氏。ひじょうに迷惑そう。それはそうだろう。たったいま、多田さんたちに、根掘り葉掘り質問されたばかりなのだから。

同じことをもういちど話せとはいえない。そこで、宴会場担当全員への聞き込みを交渉。多田さんたちは、坂上氏にしか話を聞かなかったようなので。

坂上氏は難色。ここで断られると、わたしたちのすることがなくなる。粘ってかけあい、なんとか許可を得る。

午後に披露宴があるらしく、その準備にみな忙殺されている。ひとりひとり順番に、控え室で話を聞く。さぞかし迷惑がられるかと思いきや、みんな殺人事件の捜査に興味津々。一の質問に十答えてくれる。これはこれで困った。

食事会当日、浅茅は一時間違えて到着。自家製のゆで卵を持参し、出席者にふるまったとのこと。スピーチは大ウケ。退出時には出席者が殺到し揉みくちゃに。

浅茅は機嫌よく話しているように見えたが、その後、本人からホテルへクレームがつく。理由は、給仕係の不手際だそうだ。

彼らが口をそろえて証言したことは、次の二点。ひとつは、食事会にマスコミの人間が侵入し、浅茅を隠し撮りしていた「らしい」ということ。もうひとつは、浅茅に名刺をわたした客が一名いた「らしい」ということ。

彼らが直接見たわけではない。別の従業員が目撃し、彼らはその話を聞いただけ。加藤というその従業員は、浅茅からのクレームの原因を作った人物でもあるという。入ったばかりの新人だったが、すでに辞めてしまったとのこと。連絡先を聞く。

隠し撮りと名刺のことを坂上氏に確認。彼は知らなかった。とすれば、多田さんたちにも話していない。この情報はわたしたちの独占ということだ。

浅茅が受け取ったという名刺は、彼のデスクから発見されていない。セールスマンの名刺まで几帳面に保管していた彼が、なぜその名刺だけ破棄したのか。破棄しなかったとすれば、なぜその名刺が引き出しから消えていたのか。

大収穫！ ……だと思ふのだが、水元さんは興奮した様子なし。どうせまた、主任に報告しましょー、と言いつ出すのかとあきらめていたが、それは言わなかった。そのまま今日は解散。

十一月二十七日

水元さんとファミレスで待ち合わせ。水元さん、今週発売の週刊誌、経済誌を大量にかえてくる。手分けして浅茅の記事を探すが、食事会の記事はどこにもなかった。もちろん、隠し撮りの写真もなし。

加藤氏の現在の職場を訪問。途中、信号の故障により電車がとまり、鉄橋のうえで四十

五分も立ち往生。その間、ラッシュのすし詰めで身動きがとれず。到着する前にくたくた。足の悪い水元さんにはお気の毒だった。

加藤氏はホテルを辞めたあと、食品加工工場にアルバイトとして勤めている。受付で呼び出しを頼むと、「加藤さん、若い女性のお客さんよ」と館内放送。まもなく工場の方から、赤い顔をして加藤氏登場。同僚からさんざん冷やかされた模様。加藤氏も、まんざらでもなさそう。和気藹々とした雰囲気の良い会社らしい。

加藤氏にホテルを辞めた理由を尋ねると、仕事が合わなかったから、という答え。とくに浅茅からのクレームには、この世界でがんばっていきこうという意欲を削がれたという。クレームの原因は、浅茅の持参したゆで卵を切りわけるとき、輪切りにしたこと。これでは黄身の含まれない切れ端ができてしまう。給仕として無神経、ということらしい。このゆで卵は、例の糠漬けの卵だったようだ。

当日は、食事に出席したほとんど全員が、浅茅との連絡先交換をこころみた。そのうちたったひとりの客が、自分の名刺をわたすことに成功。こざっぱりした格好の男性の老人だった。浅茅とは、以前から面識があったように見えたという。一方、隠しカメラで浅茅を撮影している人物は、分厚い眼鏡をかけた、痩身の中年男性。

二人とも、もういちど顔を見れば見分けることができるというが、彼から聞くことのできた話はそれだけだった。帰りの電車も、どういうわけがギューギュー詰め。都内にもどってきた時には、完全にぐったり。

喫茶店で遅い昼食。食欲なし。気分ガタ落ち。昨日の興奮が嘘のよう。

我ながら軽薄だったかも。名刺と隠し撮り。考えてみればどちらも、殺人との関連をうかがわせるものはない。名刺なんか、浅茅がとちゅうで落っこしただけかもしれない。水元さんはよく食べる。わたしの残したミックスサンドまで全部たいらげた。このあとどうするのかと尋ねると、もちろん、食事会の線を追うという。わたしも同意。どうせ他にすることもない。わたしたちはアテにされていないのだ。名刺の線が空振りに終わったところで、誰が気にするというのだ。

水元さんは、無駄足も立派な捜査のうち、むしろそちらが大半と言う。自棄気味のわたしに、すこし困惑している様子。たしかに子どもっぽい態度だった。ますます自己嫌悪。

夕方、荻野目コンサルへ。女性社長みずから対応。露骨にいやな顔をされる。昨日、池田さんたちから、浅茅との関係についてしつこく訊かれた模様。彼女は浅茅の元恋人。恒子さんの言っていた「数日前の訪問客」というのは、彼女だった。浅茅と夕食をともにし、その席で食事会のスピーチを依頼。浅茅からよりを戻すことを迫られたが、そちらははぐらかしたという。

食事に詳しく聞きたいというと、さらに不機嫌に。浅茅会の準会員という特典付きで集客をはかったところ、会員とミスプリントしたチラシを配布してしまい、それを真に受けたクレーマーたちへのお詫びとして、食事会を開催した。彼女にとっては、思い出したくもない出来事らしい。

出席者の名簿をあずかる。ご迷惑はかけませんのでと断りをいれると、彼らは顧客でもなんでもないからどうでもいいわと、こちらも自棄気味。聞けば、この中に暴力団関係者が二人おり、食事会のあともネチネチと因縁をつけてくるのだとか。

この名簿の中に、浅茅に名刺をわたした老人と、隠し撮りをしたカメラマンがいるのか。

明日はこの二人を探すことに決め、解散。さすがに疲れた。ふくらはぎがパンパン。

十一月二十八日

水元さんとファミレス。今日発売の新聞雑誌をチェック。浅茅殺害の記事であふれかえっているが、食事会の記事はなし。水元さん、今朝は豚汁朝食セット大盛り。

昨日あずかった名簿には、氏名と連絡先は書いてあるが、年齢の記載がなかった。老人を探すには、ひとりひとりあたるしかない。まずは電話で絞り込もうと思ったが、水元さんは「直接お会いなさい」と言う。さいわい、記載されている住所はすべて都内。しかし全員に会ってまわるとなると、どれだけの時間がかかるやら。歩きまわるやら。

老人はわたしに任せ、水元さんはカメラマンを探すのだそうだ。パーティにもぐりこんで隠し撮りをするような人物だから、偽名を使った可能性が高い、という。したがって名簿からはたどれない。ではどうやって探すのかと尋ねたら、都内の出版社をかたっぱしから当たるといふ。そんな回りくどい方法しかないのかなあ。

新聞社系、週刊誌系の出版社をあたるということ、というルートの回ると効率がいかに昨夜のうちに研究し、メモにひかえていた。これには素直に感心。

メモはわたしの分もあった。名簿に記載された住所は自宅のものだろうから、昼間たずねていっても会えないかもしれない。水元さんは昨夜のうちにほぼ全員に電話をかけ、日中の連絡先を教えてもらっていた。この順番なら早くまわれるわよと、駅やバスの路線まで詳しく書き込んだメモをくれる。よかつたら使ってみてね、と。

ありがたいやら、そのおせっかいが少し腹立たしいやら。こんなことは自分で準備しておくこともできたと考えると、なんだか恥をかけたような気持ちになる。複雑。もつとも、昨夜のわたしはヘトヘトで、とてもそんなことをする体力はのこっていなかったが。

そこから二手にわかれるはずが、水元さんが「最初の二件は同伴する」と言って、わたしについてくる。メモのルートにしたがったところ、最初の二件は、きのう荻野目社長が言っていた暴力団関係者だった。

ヤクザなんか怖くない。こちらが警察だとわかれば、連中もすぐんだりはしてこない。おばさんと若い女のコンビが相手でも、終始慇懃な態度。その点だけが不気味だった。人を探しているのなお手伝いしましょうか、などと申し入れてくる。この世界には我々とは違う情報網があるから、案外、こちらのツテの方が早く見つかるのかも。

しかし水元さんは、馬鹿おっしやい、と一蹴。相手に対してというより、わたしに対して言っているように聞こえてドキリとした。

結局、たいした話は聞けなかった。彼ら自身が事件に関係しているという印象も受けなかった。浅茅は出所後以来、こういった連中とのつきあいに慎重だったという話もきくから、たぶん無関係なのだろう。それでも水元さんは、同じ質問を、それこそネチネチとくりかえす。相手もうんざり。もうこの件には関わりたくないという気分にかけて、荻野目に対するいやがらせをやめさせようという意図らしい。

その後、二手にわかれる。メモにしたがって、ひとりひとり訪ねて歩く。みな一様に冷淡な対応。女ひとりと見て侮られているのが、はっきりわかる。中にはチェインロックを外してくれず、ドアの隙間ごしにあしらおうとする者まで。こちらもついで、いらだちが顔や声に出してしまう。最後は口論のようになってしまった。

夜十時まで、歩きに歩く。面会の都合がつかなかった人、五名。時間切れでまわれなかった人、十二名。明日はこの人たちに会いに行く。このうちの二名は、そもそも名簿に記載の電話番号につながらなかった者。ただの書き間違いか、それとも嘘だったのか。番号が嘘なら、名前と住所も嘘だろう。この二人が老人とカメラマンである可能性は、高いと思う。

十一月二十九日

ファミレスで新聞雑誌チェック。件の記事なし。今日はわたしもハンバーグを注文。きのこの成果を報告しあうも、お互いに収穫なし。店を出たあと、水元さんが準備中の靴屋に飛び込んで、わたしにローファーを買ってくれた。

昨日の残りを訪ねてまわる。彼らは皆、区駅前で荻野目コンサルのチラシを受け取り、浅茅会の正会員になれないお詫びとして、食事会に招かれた。なんとか浅茅と面識を得ようと下心もって臨み、袖にされた格好。周囲のことなど気にしておらず、名刺をわたした老人についても、潜入カメラマンについても、何の証言もえられなかった。

電話のつながらない二人の住所は、やはりでたらめだった。氏名は「佐藤」と「山本」。その後、荻野目コンサルへ行つて名簿作成の経緯を再確認。いわく、チラシを見てクレームや問い合わせをしてきた者に対し、ほぼ無条件に食事会へ案内をしていた。事前の面談などもなし。立場が弱いので、身元確認も出来なかった。関係者の誰も、「佐藤」と「山本」の人相風貌を覚えておらず。

夜、水元さんと電話。カメラマンはまだ見つからないとのこと。

十一月三十日

朝、いつもの店で打ち合わせ。新聞にようやく食事会の記事。ただし、事件前の浅茅の動静として短く伝えているだけ。写真もなし。

食事会から今日で十日。殺人から五日。その間、隠し撮りの写真は紙面に出てこない。なぜだろう。浅茅の、おそらくは生前最後の写真。彼が殺されたいまこそ、最大の価値を持つはずなのに。

水元さんは昨日までに、めばしい出版社の雑誌編集部を、ひととおり回っている。食事会の記事にしようと企画していたところはなかった。そのような記事売り込みきたライター、カメラマンもなし。とすると、マスコミ関係者ではなかったのかもしれない。念のため、こういった手法の取材をしそうなフリーランスを挙げてもらい、ひとりひとり当たっていく。今日はわたしも水元さんと同行。

リストアップされた人数は、それほど多くない。問題は、なかなか相手が見つからないこと。やっと連絡がついても、取材で遠方にいたりして、面会の約束がとれない。今日会うことができるのも、二人がやっと。甲府と成田。もちろんこちらから出向いていく。

水元さんは足が悪くて大変そう。怪我の理由を、ついに聞き出す。四年前、重要参考人の少女の自宅へ任意同行を求めに行ったところ、錯乱した少女が団地五階ベランダにたてもり、説得にあたった水元さんを道づれに飛び降り自殺をはかった由。少女は死亡。水元さんは樹木の高枝に太ももを貫かれ、三時間宙ぶりだったという。結局、少女は事件と無関係だった。その後、休職、内勤。そして今回の現場復帰。

無理やり聞きだしたことを後悔。何をしているんだ、わたしは。文字通り東奔西走。結局、二人とも問題のカメラマンではなかった。明日は三人と面会の予定。本当に、こんなことをしてよいのか？

十二月一日

横浜でようやく、カメラマンを発見。

本当の名前は有馬氏。食事会では「山本」の偽名を使ったという。とくに浅茅を追いかけていたわけではなかったが、知人から問題のチラシを提供されて興味をもち、荻野目に問い合わせたところ、すんなり食事会に招待された。

なぜ今まで記事にしなかったのかと尋ねると、以前から予定されていたバリ島での仕事の前倒しになったため、記事にまとめる時間がなかったという答え。一昨日まで現地にしたそうで、浅茅が死んだことは、きのう帰国するまで知らなかった。

有馬氏は、最初こそ警戒気味であったが、いったん打ち解けたあととはとっても協力的に対応してくれた。このあたりは、水元さんの風貌がモノをいっていると思う。

浅茅に名刺をわたした人物については、よく憶えていないとのこと。彼の興味は浅茅だけに集中していたろうから、無理もない。

隠し撮りの写真を拡大してもらおう。スピーチ中の写真が十一枚。退出時、客にとりまかれている写真が六枚。写り込んでいる客は十人ほど。どれも見覚えのある顔。わたしが足をはこんで訪問し、話を聞いた人たちだ。

ただその中に一人だけ、見覚えのない人物がいた。こざっぱりとした男性の老人。加藤氏の証言と合う。思わず快哉。まちがいない、この人物が「佐藤」だ。

「佐藤」は、浅茅のすぐ近くに写っている。名刺をわたす瞬間の写真はなかったが、その直後と思われるショットがあった。浅茅は自分の手元を見下ろしている。おそらく、受け取った名刺を見つめているのだろう。「佐藤」は彼の前に立ち、隣の男に体を押されてよろめいている。

この「佐藤」を押している男を見て、有馬氏があつと声をあげた。当日は気づかなかったが、彼はこの男を知っていた。あの海老沢昭夫の秘書をしている男だという。

つり目で驚鼻の、特徴的な顔。わたしは二十八日に、この男の自宅を訪問している。名前はたしか、東原といった。チェーンロックを開けてくれなかった男だ。

なぜ海老沢の秘書がこんな場所に？ 海老沢が事件に関係している？ まさか。

水元さんが東山に会ってみたいというので、明日会いに行くことにする。細かい糸が、切れる寸前だからうじて、次へ次へとつながっていく感じ。しかも思わぬ方向へ。

十二月二日

東山宅を再訪。この前のことがあるので多少身がまえて行ったのだが、今日はすんなりドアをあけてくれて拍子ぬけ。これも水元さんの風貌効果かと最初は思ったのだが、それにしては東山氏の様子がおかしい。前回はハリネズミのように全身で警戒心をあらわしていたのに、今日はまるで心ここにあらず、ぼんやり虚脱している。

聞けば昨日、公職選挙法違反の疑いで、任意で取り調べを受けたとのこと。先の市議会議員補選がらみで、容疑は買収。金を受け取ったのは海老沢だが、東山氏もその場に同席

していたらしい。悪名高いフィクサーの秘書ともなれば、もうすこし腹がすわっていてもよきそうなものだが、取り調べでそうとう絞られたのか、本人はすっかり意気消沈。

あらためて、食事会の模様をじっくりと聞かせてもらおう。しかし「佐藤」のことは、まったく憶えていなかった。有馬氏提供の写真も見せた。老人を押しつけているのが自分だということとは認めたものの、浅茅に近づこうと大勢がむらがつているさなかの出来事だから、些細なことはいちいち記憶していないという。

問題のチラシは、藤波という男からもらったらしい。藤波は今回の買収劇で、海老沢に金をわたした人物。落選した候補の選挙参謀だ。金を届けにくる途中、駅前で配布していたものを藤波が受け取り、東山氏への土産として持参したのだそう。東山氏がかねてより個人投資に興味を持っており、藤波はそのことを知っていた。その後、浅茅会会員の宣伝につられて荻野目に問い合わせ、食事会へ案内される。海老沢には内緒だった。

収獲はゼロ。これで完全に糸が切れた。とうとう、することがなくなってしまう。公園でおにぎりの昼食をとりながら、水元さんとこれからのことを相談。

問題のチラシは十月二十八日の朝、K駅前商店街で配布されていた。荻野目コンサルによれば、配布されたのはこの時いちどきり。つまり食事会に来た者は、当日の朝、K駅前を歩いていたということだ。「佐藤」もまた、そうだったのではないか。

もちろん、有馬氏や東山氏のように、本人が直接チラシを受け取っていないということもあり得る。チラシを配った人物が「佐藤」のことを憶えている確率はゼロに等しい。

それでもこの線で行く。おめおめと主任の元に帰らざるを得ないのなら、その前にやれるだけのことはやっておくのだ。大きくても小さくても、かく恥は一回。

荻野目コンサルへ向かい、チラシについて再度質問。配布に雇ったアルバイトの連絡先を聞き、その足で会いに行く。

浜口という、妙に元気な若い女性。喫茶店で落ち合い、話を聞く。配布は昔のバイト仲間の青年と二人でおこなった。荻野目からはA駅前と指示されていたが、電車の事故を知り、機転をきかせてK駅前に変えたという。繁華な北口では選挙演説がうるさかったため、それを避けて南口の商店街でチラシを配った。もちろん「佐藤」とおぼしき老人のことは、憶えていない。

期待していたわけではないが、やはりここまでか。ただひとつ。北口の選挙演説では、川向という名をしきりに連呼していたという。この名前には聞き覚えがある。浅茅の絡んだ事件のどれかに、川向という名の登場人物がいたような気がする。

主任に電話して確かめようかと思っただが、それもくやしい。マスコミ関係者なら知っているだろうと思いい、有馬氏に電話。川向のことを訊いてみる。すると、「久留里製造事件」のことだろうと教えてくれた。

図書館で、当時の新聞を調べる。久留里製造は、パッキンやガスケットのプレス加工メーカーで、六年前、社長の川向氏が自殺を遂げている。直前に、会社にとって虎の子だったはずの特許を捨て値で浅茅に売り渡しており、さまざまな憶測を呼んでいた。

鳥肌が立った。プレス加工メーカー。しかも六年前。浅茅のファイルから不自然に抜き取られていた八ページと、ぴったり符合する。これが偶然か？

十二月三日

区駅前の派出所で話を聞く。十月二十八日は、宗教団体「万象慈会」擁立候補の選挙応援演説が北口広場でおこなわれていた。その中には、川向社長の未亡人もいたという。

川向邸に電話をしてみたが、お手伝いさんが出て、奥様は和歌山の別荘で静養中とのこと。「万象慈会」はすでに退会。理由は、関係の深かった教団幹部の横領が発覚したためだそう。夫人もそうとうな額を巻き上げられ、たいへんショックを受けているという。久留里製造について情報を集める。業界大手の数社に電話をかけ、福盛氏という元部長の連絡先がわかったので訪問、話を聞く。

福盛氏いわく。川向社長は金庫の中の秘密を盗まれ、それをネタに浅茅に脅されたのではない。その結果、会社は倒産、社長は自殺。未亡人は失意のうちに「万象慈会」に入信して、人が変わってしまった。

福盛氏は紳士だが、言葉の端々に、教団と浅茅への恨みがにじむ。他の元従業員たちも、同じ気持ちのようだ。社長の七回忌法要の席では、同席していた教団の人間がつるしあげられたらしい。そのあと、涙をのんで夫人との断交を申し合わせた。

彼らは親睦会のようなものを作っており、現在も時折集まっているという話。名簿はなかったが、年賀状のやりとりがあるとのこと。福盛氏に見せてもらう。その中に「佐藤三郎」の名あり。久留里製造の下請け工場「総武ガスケット」社員だった人物で、年齢は七十くらい。

「総武ガスケット」はA町にあるそう。チラシが配られた日、A町へ向かう通勤客は全員区駅で電車をおろされた。そこで夫人との遭遇を避けようと思えば、反対の南口から降りるしかない。とすれば、彼がチラシを受け取った可能性は高い！

ところが佐藤三郎は、何年も前に「総武ガスケット」を辞めているという。しかも食事会の一月ほど前に病死しているとのこと。これではチラシも受け取れない。名刺もわたせない。

だが、わたしも水元さんも不思議と気落ちしなかった。これはもう、絶対に偶然ではない。この線がよい。この線が正解。この先に必ず、事件の核心がある。

午後、佐藤三郎の単身者用アパートを訪問。部屋はすでに別人が入居済み。大家さんから、遺品を整理しに来たという知人の連絡先を聞いたので、そちらへ急行。

元同僚の樋口という青年。同じく元同僚だという女性と新しく会社をはじめらしく、真新しいオフィスに訪問。この二人が佐藤氏の最期をみとったそう。

内装工事のため立ち話。樋口君の口から、病床の佐藤氏をただひとり見舞った旧友の話聞く。名前はわからないが、氏と同年代の老人で、総武ガスケットの社員。しかも久留里製造にも関係のある人物だという。

十二月四日

樋口君に同行を願って総武ガスケットへ。従業員二十人。かつては工場も持っていたが、すべて売り払って今は商社化している。社長に事情を話し、総務で従業員の写真を見せてもらうと、その中に樋口君が見舞客を発見。でも、彼に教えてもらうまでもなかった。その顔は、有馬氏の写真に写っていた「ござっぱりした老人」と同一人物だったから。

老人の名は大石梅司。これは福盛氏の年賀状にもあった名前だ。年齢七十歳。昨年妻を亡くし今は独り者。仕事は雑用係。履歴書をみると、以前は久留里製造勤務だった。

大石は先月二十八日より、帰郷を理由に会社を休んでいるとのこと。届けは今月一日までだが、今日になるまで連絡なし。出勤簿を見せてもらうと、毎朝七時半の出勤。事件の朝も七時三十五分に出勤している。

浅茅の家から総武ガセットまでは、一時間以上かかる。目覚まし時計がセットされていた時刻が七時三十分。浅茅がその時刻に起床し、朝食を作り、その後殺されたのだとすれば、大石のアリバイは成立しているように見える。

しかしこの朝食は、浅茅がつくったものではない、と水元さんは言う。わたしも思う。浅茅本人がつくったのなら、たぶん糠漬のゆで卵はスライスしない。戸棚の前の死体を五十センチひきずったのは、ゆで卵を取り出すのに邪魔だったからではないか。つまり、朝食が作られるより先に浅茅は殺されていたのだ。

福盛氏に電話。事情を話し、大石の故郷の場所を尋ねる。下関という以外は知らないという答え。しかし仲間の中には知っている者もいるかもしれない。これから全員に電話をして聞いてみると言ってくれた。

その間に、わたしたちは現地へ急ぐ。大石は死ぬつもりでは、と水元さんは言う。向こうへ着いてから、再度福盛氏に連絡しよう。さすがに主任にも、連絡をしなければ。

浅茅の甘言にまどわされ、川向社長の金庫から秘密を盗み出したのは、大石だった。久留里の雑用係だった彼は社長室の清掃もまかされており、金庫に接近するチャンスがあった。秘密を売り渡した対価は、難病をかかえていた妻の治療費に使ったという。

社長を自殺させたことへの罪の意識は、病に苦しむ妻の姿がまぎらわせた。その妻が死に、さらに七回忌の法要をきっかけに川向夫人の変貌を知ったことで、おそまきながら巨大な罪悪感にさいなまれるようになる。大石は、浅茅を殺して自分も死ぬことで、すべてを清算する決意を固める。

浅茅の会社で住所を聞き出すことには失敗したものの、出勤途中のK駅でチラシを受け取った大石は、偽名に親友「佐藤」の名を借り、食事会にもぐりこむことに成功する。浅茅は大石の顔を憶えていた。わたしたち名刺は、大事に保存していた川向社長の名刺に、自分の電話番号を書いたものだった。それだけで、浅茅は大石の意を察し、翌日、自分の方から大石に電話をかけてきたという。恐喝罪の時効は七年だから、まだ一年残っている。今度は自分が脅される番か、と思ったであろう。

早朝、浅茅の自宅を訪れて、彼を殺害。仕事部屋をあさり、机から名刺を、キャビネットから資料を奪回。大石にとっては、これが社長の名誉回復だった。ただし、『12』のメモの意味はわからず、箱の中の品は残ってしまったが。

それからアリバイ工作のため、目覚まし時計を細工し、朝食を作る。食事会のスピーチで、浅茅は自分の食習慣をべらべら喋っている。よく片づいたあのキッチンで、話で聞いたとおりの朝食を再現することは、独身者の大石には難しいことではない。ただ、エッグスタンドのことは知らなかった。浅茅が加藤氏につけたクレームのことも。だから、自分が見たとおり、ゆで卵をスライスしてしまった。

「ひとつ、わからないなあ」夕暮れにそまる所轄署の屋上で、服部は言った。「冷蔵庫の下に落ちていた菓子ば、何だったんだ」

「大石の手土産だそうですね」主任の吐き出すタバコの煙に顔をしかめながら、高橋は答えました。「浅茅が朝食を作ったように見せるためには、殺害現場はキッチンである必要があります。ああいう物を受け取れば誰だって、とりあえず冷蔵庫にしまっておこうとするでしょう」

「よくそんなこと思いつくなあ」

「殴られた拍子に浅茅は菓子箱を落とす、中身が床にばらまかれてしまった。そのうちのひとつだけ、大石が拾いそびれたというわけです」

「ちゃんと朝刊を取り込んでおくあたりも、芸が細かい。そんなに悪知恵のはたらくジイさんには見えないがね」

「会社での評判は、無口だが細かいところによく気のつく人、ということでした。悪知恵ということとは、ちよつと違うんじゃないでしょうか」

むきになって自分の口調に気がついて、高橋は頬を赤くした。そんなつもりはないのだが、つい大石のかたをもってしまう。

服部はタバコの火を上に向け、鷹揚に笑っている。

下関へ飛んだ水元と高橋は、福盛と連絡をとり、大石の出身が彦島であること、ただし生家はもう残っておらず、親戚もないらしい、ということを知らされた。島へわたった二人は、観光案内にのっているホテルらかたっぱしから電話をかけ、大石が宿泊している古いビジネスホテルを発見した。

大石の部屋は十階だった。水元と高橋が部屋に入っていくと、大石は窓を開けて、近寄ったところから飛び降りると絶叫した。下関に帰って以来、どのように死ぬかを考えあぐねていたらしい。

説得は、一時間におよんだ。水元は福盛に、電話で大石と話してもらおうよう依頼。その頃、福盛のもとへは、久留里製造の仲間が続々と駆けつけて大石の身を案じていた。

彼らがどのような説得をしたかはわからない。ただ、離れて聞いていた高橋の耳には、受話器からなにか歌のようなものが聞こえた気がした。

大石は目に涙を浮かべ、自殺を思いとどまった。この時の水元の晴れやかな表情を、高橋はおそらく、刑事を続けていくかぎり忘れることはないだろう。

三人は新幹線で帰京した。捜査本部にもどると、水元は服部にこれまでの単独行動を詫び、あとのことすべてを高橋に任せて帰宅してしまっただけだ。

「さすがに、くたびれちゃった。あとはあなたのいいように言っておいてちょうだい」

水元の気持ちはうれしかったが、高橋は、すべては水元のおかげであると正直に報告した。自分はただ、水元さんのあとについて行き、彼女の指示通り動いただけだ。

「お前も馬鹿だね。先輩の好意は素直に受け取っておくもんだ」

「次からは、そうします。期待してまずから」

長身の高橋に上から覗き込まれ、服部は苦い顔をした。

「俺の好意にあずかりたきや、もうすこし身だしなみに気を配るんだね。お前の靴は汚いよ」

「大きなお世話です。主任には、わからないんです」

高橋は、ヨレヨレに履きくたびれたローファアを、むしろ誇らしげに突き出した。